ニート失格

アーリマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ニート失格

【Ｎコード】
Ｎ５２５７Ｈ

【作者名】
アーリマン

【あらすじ】
僕のペンネームはアーリマンといいます。僕はこれまで一等賞を取ったことがありません。何をしても失敗ばかりで全然ダメでした。どこにいっても落ちこぼれで、１００人中いつも８５番目ぐらいでした。でも１番になりたいと思いました。１番の小説家になりたいです。そのためには小説を８３３冊よりたくさん書かないといけません。原稿用紙３５０枚が小説１冊とみなしました。８３４冊書いたら、僕は日本で１番の小説家になれます。頑張ります。

A1（前書き）

日本一まで頑張ります。

A1

一

俺はとあるテレビ番組を見ていた。ニートが年々増加して、社会問題になっているというのだ。それを見る俺も当然ニートだ。だが、ニートは34歳を越えると、ニートでなくなる。労働せず、親のすねをかじって、生活している連中の数はニートの数を越えるに違いない。金が有り余っているニートもいるだろう。俺は有り余っているほどでもないが、後5年ぐらいは、食っていけるだけのお金がある。

ニートが成り立つためには金がいる。金さえあればニートになれるのだ。金がないものはニートになれない。つまり、問題というのは、金のないものがニートになっているという点だろうと、俺は思った。

テレビ番組の主張は続く。俺は金のないものがニートになる点だけが問題だと思っていたが、テレビが言うには、労働力やらに影響が出て、結果的に社会に影響が及んでいるということだ。俺に経済を語られても、かじった程度なので、ほとんどわからないが、ニートは金欠病を抱えているので、税金の支払いは通常の社会人より少ないというのは常識として理解できる。

俺は社会がどうこうという意味で、ニートを肯定したり、否定したりはしたくない。人間ほど醜い生き物はいないと思っている。

人間はまさに地球のクズだ。今にしっぺ返しを食らうことになるだろうといつも不安そうに見ている。

俺はニートというものを、「人間を浄化させることの出来る唯一の集団」だと思っている。ニートのおかげで、この世は何とか安定化を図ることが出来ている。ニートの増加は汚れた世界を浄化する勢いを高めることに同じだ。

ニートとはそもそも何か？　９９パーセントは金がほとんどない人間だと思う。金も能力もない、おちこぼれだろう。しかし、隠れた能力を持っているものはいるはずだ。それを開花させる前に閉ざしてしまったものも多いはずだ。

金がないものが、ろくに人間的な生活が送れるだろうか？　送れるはずがないと思うのだ。金がなくなれば、その時点でニートを終えるか、死ぬか。こういう人種がニートなのだ。ほとんどのものが、金を失ったときに、ニートを終えて、社会に出るのだろう。しかし何十年もニートをしていたものが社会に出ても、せいぜい、アルバイトがいいところで、頑張っても、一億以上の財産を手にすることは難しい。むろん、億万長者になる可能性もないわけではないが、かなり低いと見て間違いは無さそうだ。

生涯賃金という点では、ニートほど少ないものはいない。ニートは金をもらえない人種だから、ニートを永遠に続けた場合、生涯賃金は０だ。途中から復帰したものも、せいぜい５０００万がいいところだ。

そんなニートになぜなったのか？　理由は多々ある。特に引きこもりは深い理由を背負っている場合が多い。俺はかれこれもう二年、外に出ていない。引きこもり歴二年というわけである。

ただ、俺から言わせて貰うと、今の自分は勝っていると思う。少なくとも、働きたくもないが働かざるを得ない人間よりは勝っていると思うのだ。したくないことをするというのは決して、いいことではない。

要するに、勝っているか否かは主観的な意見なので、客観視をすれば、勝ち負けを決めることは出来ない。これは、あくまで、俺の立場に立ったときに、勝っているというだけのことだ。なぜ勝っているのか、それは、俺は自分に忠実に生きているからだ。

そう言うのは、俺は巨額の富がほしいわけでも、地位や名誉がほしいわけでもないからだ。だからと言って、満たされているわけでもない。むしろ、精神的には激しく飢えている。けれど、それは金

が欲しい、女が欲しいといった、そんなものとは一線を画す。ほしいものは他にある。

俺は議論をするつもりはないから、自分の意見をはっきり言うが、もし、ニートがクズだというニートでない人間がいれば、ニートはあなたをクズだと思っている。お互いが見下しあっている。しかし、ニートは本気になって、人を見下したりはしない。なぜなら、人間は自分も含めて、例外なく見下しているからだ。

俺の場合だけに限らせてもらうが、俺は普通の人間とはまるで違う人種だとはっきり自信を持って言える。いわば、変人だ。

だが、俺ほど優れた人間はこの世にほかにいないとも自信を持っていえる。理由は簡単だ。俺にしかないとてつもない心理とか性質があるからだ。

だが、自信過剰というわけではない。むしろ、俺は罪悪感と戦って、生命をギリギリ維持しているのだ。

二

俺は今日も午前１０時過ぎに起床した。一日の睡眠時間は十時間に上る。寝すぎというのが、一般的な見解だろう。

俺はいつも脈絡のない夢を見る。ほとんど忘れてしまうが、稀に残っているものもある。もう何年も前に見た夢で、今でも残っている夢を紹介したい。俺はこれを神からの何かのメッセージだと今でも思っている。

夢自体はおかしなものではない。まず、人がいるのだ。男。たぶん、俺だろう。その俺がメガネをかけた子供、恐らく、コ●ンだと思う。大きな石版の前に立っているのだ。わずかに石版から目を切ると、森の風景が見えた。そして、よく分からない問答の後、俺はコナンによく似た少年と歩き出すのだが、ついた先がお墓なのだ。森の中に開けた低地があって、そこにお墓がある。

そして、ここで、石版に書かれていた真実がここにあると、コナ

ンによく似た少年は言い出すのだが、何があったのかよく分からないまま、俺はひとり、もと来た道を戻っていく。すると、舞台は変わる。となりのト●ロで出てくるバス停に近いところに出る。もちろん、夜だ。俺はなぜか、そこで立ち尽くすのだ。何がやってくるかと思えば、汽車だ。F●6の魔●車、もうあれそのままだ。それが俺にぶつかる。いつの間にか中に入っているのだ。中は明るく、普通の電車のようなのだが、ずいぶん、高級そうな長いすが連ねてあったように思う。誰もいない。俺はどこかに坐った。

妙ななりの男がやってくるのだが、何かの問答の後、

「いいところに連れて行ってあげる」と低い声で言うのだ。あれは恐ろしい声だった。

そうだ、俺はどこかに行けるのだ。その後、何があったのかよくわからない。まったく脈絡の無い夢に移行した。その夢は思い出せない。

こんな夢があったのだが、起きてみれば、すごい恐怖が心に蓄積しているのだ。あれは夢だったのか。誰かが俺をどこかへ連れて行こうとしたのではないか。いつまでも頭にまとわり付いていてくる。

俺はもう一度あの夢に行けないだろうかと毎晩楽しみにするのだが、もうあの夢は見ることが出来ない。

俺はこの夢を客観的に見れば、別に取り立てるほどのことでもないように思う。しかし、これだけ心に残る夢がほかにあるだろうか。あるはずがない。俺は正直、起きてからしばらく凄まじい放心に身を委ねた。

この夢は俺の人生を変えてくれた。そのときから、俺はどこにつれて行ってもらえていたのだろうと考えるようになった。

この夢はニートになってから見たものだ。俺はそのとき、ニートになったことが正しい道だったと思うようになった。

俺が起きるころには、労働者はせっせと起きて、出社し、仕事をしているのだろう。それはそれでいいと思う。金のためだ。だが、俺はニートでもいいのではないかと思う。もちろんお金があればの

話だが。ニートを馬鹿にするクズが世の中には多すぎる気がする。頭が悪いといえばいいのか、ニートに恨みがあるといえばいいのか、分からないが、ニートを馬鹿にするもののその理由に『働いていない』というものを挙げるのだ。

馬鹿だと思わないのだろうか？　働いていないからニートはクズ。論理的に見て、こんな意見が正しいと思えるだろうか。まあこれは、単純に感情的に言った発現だと思うが、障害を抱えて、働けないものもいるわけだ。もちろん、健康で働いていないニートが障害者より安く見られるのは仕方がないことだが、俺が思うに、労働をしているか否かは本来、人間の格付けに影響を与えるものではないと思う。

ニートはクズではないというのが、俺の意見だ。これは社会的な問題で言っているわけではない。社会学者なら、ニートはクズだというかもしれない。そもそも経済学をはじめとして、文型の学問はすべて、人間のエゴイズムが生んだものだ。そんなもので人の性質を審査しようなど、思い上がりも甚だしい。文型は人間の泥団子のようなものだ。汚いものだ。だからこそ、人気がある。けれど、神に対する冒涜だ。

そういうわけで、ニートは神の配下にある人間として、劣っているわけではない。しかし、人間の配下にある人間として、恐らく劣っていることになるのだと思う。

人間の配下にある人間として、俺は一番下でありたいと思う。なぜなら、それが神の配下となったとき、一番下は一番上になると思うからだ。

俺は人間には興味がない。だから、飢えているというのはあくまで、人間の配下にあるものではなく、神の配下にあるものだ。そして、それらは哲学的な要素を含んでいる。例えば、人はなぜ生きるのかとかそういう意味である。

つまり、俺はそういうものを知りたくて、それを知ることが出来ず、飢えているのだ。俺がニートになったのは、人間の配下にある

人間になりたくなかったからだ。

三

俺は人間の配下になりたくない。それはつまり、犬のように人間に尻尾を振りたくないのだ。まず、就職活動は、それをするものは犬になる。犬小屋を探して歩き回るのだ。

「僕ちゃんを拾ってくだちゃい。給料くだちゃい。ご主人ちゃまのために何でもしちゃうよ。べろべろー」

と尻尾をピコピコと振る人間を俺は汚らわしいと思う。もちろん、生きていくためには犬のように鎖を繋いでもらうほかないのだ。そういうふうに人間は発展してきたからだ。だが、もし、鎖を引き離して、神秘の渦巻く世界に旅たつことが出来るのなら……。俺はたとえ、腹ぺこで目が回ってきたとしても、その世界を目指したい。

具体的に言うと、それは答えを見つけるか否かだと思う。もし、犬小屋にその人の答えがあるのなら、俺は犬でいいと思う。だが、俺の探す答えは犬小屋になかった。

ないのだから、他を探すほかない。人の中には答えを見つけることすらせず、

「まあ、とりあえず、みんなが生きているので生きるし、就職しているので就職するし、子供を産んでいるから産むし」

などというものもいるだろう。むしろ、一般人、つまり凡人というのはそういうものだ。人間の９割が凡人だ。凡人というのは悪いことではない。

凡人というのは最もいいものだと思う。波風立つことなく、平穏無事に生きて行けるのだ。しかもそれなりの年収と将来の伴侶を得ることが出来、マイホームを手に入れることも出来る。だが、俺はそういうものが解とは思えない。

解というものは本来、絶対的なものだ。ｘ＋１＝０の解はただひとつに定まる。そう、つまり数学的なものになるはずなのだ。

俺は一時期数学にその解を求めたことがある。数学とはご存知の通り、フェルマー、ガウス、オイラーなどが解明を続けてきた学問だ。未解決問題が無数に散らばっている。

数学が神の残したメッセージまたは解を解読するために必要な媒体だとすれば……。そこに解を得るヒントがあるに違いない。

しかし、俺はそこに解がないことを証明することに成功した。そして、自然科学にもその解がないことを証明した。

宇宙にしろ、時間にしろ、これらはシステムに過ぎない。これらを解き明かしたところで、所詮システムだ。神のところに辿り着けはしない。少し、俺が定義する神を述べよう。神を数学的に考える。神をXとしよう。すると、俺はXを「Xを超える数は存在しない。またXはいかなる数よりも大きい」というものに定めた。

これを使えば、例えばXがあり、X＋1があったとする。すると、Xはいかなる数よりも大きいのだから、X＋1＜Xとなり、矛盾する。よってX＋1は存在せず、Xが最大の数ということになる。

こうして、神を最高峰と考えるのだ。具体的に言うと、神を越えるものがいたとして、その「もの」にも神が存在することになる。つまり、結局、神が最高峰という意味だ。

こうして、考えると、解を知っているとすれば、神だけだ。

俺がニートになったのは、その神から解を聞き出すためだ。そのためにはどうすればいいかを考え始めた。

まず、ひとついえることは、神は科学的なものに当てはまらない。なぜなら、科学とは先立つ具体例があり、それから成り立ったものだ。もし、水が１００００度で沸騰していたら、今日の化学は成り立たない。恐らくだが、神に翻弄されて生じたものだと思う。もちろん、数学も同じくだ。

では科学でなければどこにある。宇宙を解き明かしても、神は見えない。恐らくだが、無限ループが生じる。解き明かしてもまた謎が出てくる。そういう無限回廊に神は人間を陥れるだけだ。絶対なる解はまずその無限回廊を抜けるところから始めなければならない。

ニートはそういう人種ではないか。人間の配下から神の配下に移動した人種。それは神への挑戦者、はたまた、神と対話をするもの。とてつもなく優れた人種だ。

だが、俺はニートになる前は人間の配下をずっと肯定していたのだ。何が言いたいかと言うと、俺はひとつ壁を越えたのだ。

９９パーセントの人が人間の配下を抜けることが出来ない。例えば、勉強。受験にしろ、研究にしろ、すべて人間の配下にあるものだ。芸術も、スポーツもすべて同じだ。

俺も昔はスポーツで一番を目指していた。うまく結果が出せず、挫折した。しかし、そのおかげで、人間の配下から、足をひとつ出すことが出来た。受験で難関大学を目指したときもあった。うまく偏差値が伸びず、挫折した。おかげで、足を外に出すことが出来た。後は腕だけ。

さて、俺が言いたいのは、ごく普通の人というのは挫折を続けても、どこかに引っ掛かるということ。

弁護士を目指していたが、なれなかった。だから、サラリーマンになった。弁護士を目指していた人が挫折して、人間の配下から一歩外に出ても、サラリーマンという人間の配下に身を委ねるのだ。

だから、神の配下に行けるものというのは、人生の真の挫折者だけなのだ。そして、それがニートだ。もちろん、すべてのニートがそうというわけではない。

ニートだけが、神の配下へ辿り着くことが出来る。俺には聞こえる。神の声が。

「よくぞ、ここまで辿り着いた」

神はそう言っている。ほとんどの人間、一億のうち、９９９万人が浸っている人間の配下から抜け出し、一握りの神に近づいた人間となれた。

俺は人生において、至福を得た。もちろん、まだ完全に神の配下に行けたわけではない。人間の配下にいるものたちに憧憬や羨望を向けてしまうこともある。

だが、俺は人間の配下だけには戻る気はしない。見えるからだ。ゾンビのように蠢く人間が人間の配下には見える。無限に続く低地をひたすら、歩いていく。みな、同じ顔をしている。醜く、汚らわしい顔をしているように見えた。

そして、神のいるであろう高地を俺は捉えた。そして見上げた空の神秘的な景色はもはや神の地として相応しいものだった。

ニートになって、ようやく神を捉えた。そして俺は歩みだしたのだ。

四

起きた俺は、まず水を飲みに行く。まだ人間の配下にいる俺はこの汚らわしい空間を越えられずにいる。神が遠い。手を伸ばしても届く気がしない。

そんな飢えと戦いながら、日々を送っていた。

どこに神がいるのだろう。数学にも自然科学にもいなかった。俺は数々の書物を読み漁った。

読んでも、感動はない。神を知った俺に、人間の配下の万物はもはや石や砂のようなものだ。それらに俺が見出すべき解はない。人生を言及した本を何冊も読んだ。魅力的だったものは皆無だった。なぜなら、すべては人間の配下にあるものだからだ。必然だとは思うが、聖書を読み漁り、神話を読み漁り、大量のオカルトを読み漁った。すべては人間の配下にあるものだった。

「神を掴むためにはさらなる飛躍が必要だ」

そう結論を出し、俺はひとつの可能性を見つけた。

漫画を読んでいるときだった。人間の配下にあるにも関わらず、何度も何度も、神秘的なものを感じるのだ。それは何だろう。俺はその漫画に正体があると思った。

「まるで、人間ではなく、神が書いたような作品だ」

そう思い、俺はその漫画のタイトルを見た。なるほどと思った。

これはあくまで俺の感じたことだから、この漫画のファンや作者、関係者に不快な気持ちを与えてしまったのなら、フィクションとして、流してもらいたい。

俺はまず、この作品と他の作品を比べることによって、その違いを分析してみた。すぐにわかった。

「これは神が人を操作して書いたものだ。そして、隠蔽されている」

何が隠蔽されているのか、簡単だ。神秘的なもの、すなわち神だ。神がいる。そう思って、俺は背筋に悪寒を感じた。

俺はそのとき、集中力を持ち直した。

「神が確かにいる。ここにいる」

そんなことをつぶやいて、俺はその漫画を読み出した。それは面白いのだが、面白いを通り越して、大きな神の姿を描いている。

「これだ」

と思った俺はすぐさま、目を閉じ、考え始めた。

だが、これに限ったことではない。俺は音楽を聞いているときにも、ゴッドボイスを聞いた。

「神がいる」

そう思った。そして、俺は神の居場所をついに捉えたのだ。俺だけが神を見つけ出したのだ。俺は世界いや、この世の神の次に偉くなったのだ。

「神の居場所は精神世界だったのか」

俺はその結論を得て、しばらく、放心した。なるほど、そこにあったのか。神は天才だ。まさか、そんなところに潜んでいるとは思わなかった。

「だとすれば、神は精神世界の奥底に潜んでいる」

そう結論を下した俺はまず精神世界からかけらを拾ってくる芸術というものに目をつけた。最初はまず、ここに神はないと思った。しかし、そこに神の一部があった。

それは、本体は芸術になくても、神を掴むうえで重要な性質を持っていることを意味している。

芸術と学問の大きな違いは、自由度の違いだ。当然だが、神が定めたシステムに従うのが現実世界だ。精神世界は従わない。
「精神世界は神のシステムには従わないから、神の手が届いていない世界なんだ。そして、そこから神は俺たちに宇宙ないし、世界を与えていたのか」
独り言をつぶやき、俺は冷蔵庫を開けた。何かを食べようと思ったのだが、あいにく何もない。
しかたなく、庭に出て、犬とじゃれあった。もう少しで神を掴める。そう思ったのだ。夢に出てきたいいところ。それは精神世界だったのだ。
「精神世界なら、考えたことがすべて叶う。肉体が体験できないまさに神秘の世界だ」
精神世界は早い話が妄想だ。つまり、空を飛ぶ自分を想像できるし、例えば、悪さをした自分のところに警察が来て、
「あなたは素晴らしい人だ」
といわせることも出来る。まるで、神のように人やものを動かせる。
「まてよ、だったら、人はすべて、神になれるし、例外なく神だ」
障害がない限り、人は想像が出来る。ならば、すべて神だ。
「そうか、それらをすべて掘り返して、その奥に神が潜んでいるんだな」
そういうことだ。つまり、精神世界の深層に神がいて、解があるのだ。
精神世界は広い。もしかすれば無限かもしれない。神に辿り着けないかもしれない。
「それはない」
力強く、俺はつぶやいた。
神が精神世界にいるとして、ではなぜ、俺たちに肉体を与えたのか。わざわざ……。
「神が呼んでいるんだ。精神世界を掘り返すためには情報がいる。

その情報を得るためには経験が必要なんだ。ついに神を捉えた。見ていろ」
俺は心に深く刻んだ。俺の夢は神を誰よりも早く捉えて、解を聞き出す。そして、俺は神となる。俺の夢は神になること。
それは簡単なことではない。無限かも知れない精神世界を掘り、神を見つけ出さなければならない。どうすればいいのか。
まず、いえることは、もし、ニートにならなければ、決して、神を捉えることが出来なかった。そして、神になろうとか、そういう気も起こらなかった。俺は神になるために途方もない努力を始めた。偶然だろうか、必然だろうかは分からない。
「神になるためには精神世界を掘るほかない。どうやって掘れば効率がいいのだろう」
俺はその段階へと足を踏み入れた。神になるための努力。

五

俺は神を目指し始めた頃、親とよく喧嘩をした。
「いつになったら働くのか？」
そう聞かれて、
「夢がある。それを叶えさせてくれ」
と答えた。神になれるのは俺だけだ。俺が努力をするほかないのだ。しかし、人間の配下で生きている親はその理解をしてくれない。
「もう21歳、早く働かないとお嫁さんももらえないぞ」
みたいなことを俺に言ってきたが、俺は呆れた。神を捉えたものが今更醜い人間をもらうだと？　思い上がった人間だなどと思いながら、
「いらんそんなものは」
と答えた。性欲がなくなってくれれば、女など必要にならないのだ。貰っている暇などない。神が遠ざかるばかりだ。
確かに、長いスパンで神を目指して行こうと思えば、子孫を残し

て、
「神を頼んだぞ」
と受け継いでいかなければならないのだが、神になるか否かは質の問題であって、量の問題ではないと思うのだ。
というのは、精神世界は無限に近い。だから、量を掘っても徒労に帰す可能性のほうが高いのだ。それに、俺は死んで終わりとは思っていない。死後にはまた新しい何かがあると思っている。死についての話はもう少し後だ。俺は今、神を目指すことに忙しかった。
「いらんて、そんなあんたね、簡単にいうけど」
みたいなことを親が言っていたが、
「俺の勝手だ」
ぴしゃりと言ってやった。
「いつまでも家に入れるわけではないぞ」
みたいなことを言っていたが、
「それが親の仕事だ」
みたいなことを返した。責任感の強い俺の親は何も言わなかった。うざい親だと、
「お前のことを思っていっているんだ」
みたいに、心配していることを装って、穀潰しを追い出そうとする。そもそも、人の幸せなんて人それぞれだ。それを勝手に親の価値観で決められては困る。俺は人並みに生活することに幸せを感じるような凡人ではない。神を目指す変人なのだ。人間なんかで終わっては溜まったものではない。猿と同列の人間と一緒にされては困る。こっちは神なのだ。
こうして、俺は今もニートだが、恥ずかしいことに、まだ神を掘り当てていない。
「神が遠い」
そう思って、飢えているのだ。いつになれば、神を掴めるのか。しかし、それで一生を終えてもいいとおもっている。人並みの生活で猿に甘んじるより、神を目指す猿で死にたい。神を目指した崇高

なる人間として死にたいのだ。
俺はそういう人間だから友人がいない。しかし、それを誇りに思っている。
「俺に並べる人間はいない」
友人や恋人がいないことを、俺は誇っている。それが、俺のいる位置の高さを教えてくれている。神に近づいていることを教えてくれる。
「最大の心配事は神が遠ざかっている可能性だ」
だが、それは判断しようがない。
俺に言わせれば、友人など必要ない。人間の配下でブタのように醜くせめぎあう人間ほど醜いものはない。神は人間だけに唯一のチャンスを与えてくれている。
そのチャンスを掴んだのが俺なのだ。俺は神となりて、すべてを生み出すものとなる。それを醜い人間と付き合えというのか。
それから、親が俺に言ったことは、
「どうして、外に出ないのか」
これに対しては、
「出る必要がないからだ」
と答えた。しばらく言い合いが続くことになった。

六

俺がそう言うと同時に親は激怒したのを覚えている。
「あんた、一生そうして生きるつもりか？」
怒りを含んだ声で言った。
「可能なら」
と答えると、
「一生は無理だ」
みたいなことを１５０語ぐらいで言われた。確かに無理だろう。
俺が一生生きられるだけの金があれば、もっと裕福な暮らしをして

いるわけだ。俺のところは三人兄妹だから、なおさら無理だった。
「なら可能なまで」
と答えると、
「その後はどうやって生きていくつもり？」
と聞き返す。そんなことを言われても分からない。腹が減って倒れるか、働くか、そのときの精神状態で決まるだろう。
「そのときになるまで分からない」
みたいなことを言うと、話し合いが終わった。どうせ、解はない。ならば、言い合っても無駄だ。
俺の親は、父親の場合、自分の価値観だけで決定してくるが、母親は幅広く対応してくれる。そのため、うまく折り合いがついて、ニートを続けることが出来ている。
俺は親を偉大だと思っている。ニートの親はしつけがダメだった悪い親とか、頭の悪いことを言うものもいるが、俺は神を捉えた人間だ。まさに、俺の親は神を産んだものとなるわけだから、まさに天才だ。それに、しつけとニートは関係ない。なぜなら、しつけ自体がエゴイズムの塊。それがエゴと気付いた頭のいい人間はそんなしつけに従わない。ニートになるか否かは親のしつけとはまったく別のところにある。それは後ほど。
さて、この点にしてもそうだが、ニートの最大の心配事は生活がいくつまで維持できるかという点だ。俺が少し費用を計算してみた。細かいところは省いた。
まず食費だが、ウエイトゲイナーを主体にいく。格安の外国ウエイトゲイナーを切り詰めて使えば、一月に３５００円分ぐらい。それに３０００円をプラスした食生活で、一月６５００円あれば、健康は維持される。最近のゲイナーは凄まじい。かなりの栄養素が詰まって、４キロ５０００円台を切るものもある。
格安の商品を厳選して、ゲイナーをまとめて買って、国際送料を減らせば、７０００円は確実に切る。
これに格安アパートを借りて、１５０００円。１２０００円や１

００００円のところもあったような気がする。
ゲイナーは水に混ぜるだけだし、食材も生で食うから、光熱費はかなり少なくなる。電気やガスは不要なぐらいだ。水道だけあれば十分だ。
風呂は入らず、週二で銭湯にでも行けば、カビも生えない。洗濯は、「こちかめ」によれば、古来の洗濯石鹸は洗剤より強力で、シャツが百枚洗えるらしい。そしてズボンはほとんど洗う必要がないらしい。
最後に雑費だが、トイレットペーパーは公園のを使えばいいし、廃品回収で漫画などをただで手に入れて、古本屋で売ればいい。ガラクタをあさって、酒の空き瓶を拾ってくれば、コップになる。粗大ゴミに乾電池の山が出てくるが、まだ使えるものもある。全部貰っておこう。
最強の敵が保険料だ。まさにエゴイズムの塊というべき出費だ。約２５０００円。計５００００円。年間で、６００００００万円。古本にはゲームの攻略本や学参などの高額品もあるし、バザーの売れ残りは十円で買える。売りなおせば、高額を稼げる。
すると、かなり貧乏にはなるが、少し贅沢をして、ネットとパソコンを用意しても、年間１０００００００もあれば楽に生活出来る。ただし、病気になれば自力で治す。病気にならないように、食事は一日二食かつ、８００カロリー。食べ過ぎなければ、ガンにもならないし、風邪も引かない。引いても自力で治る。
というわけで、親から年間１０００００００円を支給してもらえれば、くっていける。一般サラリーマンの年収は５００万円で手取りが３００万だとして、１０００００００はかなり厳しいが、出せない金額ではない。そのあたりは、
「産んだ責任として、徴収させていただきます」
といえばいい。快適にニートで過ごすためには、だいたい、年間１０００００００いる。フリーターの生涯賃金が６０００万だから、フリーターがギリギリ一生を生きるだけの金がかかる。

もちろん、６５歳で年金がくるが、月８００００だ。まさにギリギリの生活だ。深刻な病気にかかれば、そこで死。

要するに今の日本だと、フリーターで子供を養うつもりなら、死ぬほど切り詰めなければならない。贅沢禁止で、月５万を切る生活をしないといけない。

ニートだとさらに６０００万がないのだから、もはやギリギリのギリギリの生活になる。５０歳まで生きられれば奇跡だろう。つまり年金がもらえるほどまで生きられないのだから、国民年金をわざわざ払う必要もない。医療保険も必要ないだろう。どうせ、自力で治せない病気にかかれば、助からない。それはあきらめなければならない。

つまり、ニートとは病気になれない人種だ。病気にならないように全力で免疫力を高めておかなければならない。

冷暖房は当然禁止。活性酸素の増える運動は禁止。頭を使いすぎない。睡眠十二時間。ストレスをかけない。食べすぎ禁止、栄養不足に注意。こうして、何とか、ガンなどを食い止める。とにかく、ガンは生活習慣病だから、生活にさえ注意すれば問題ない。食べ過ぎなければ糖尿病もない。（遺伝子に恵まれていないと厄介）ガンは遺伝子要因を除けば、まずない。原因不明の病気になれば、もはやあきらめるしかない。

しかし、それらを乗り切れば、そこには神の領域が広がっている。サラリーマンの生涯賃金は3億近くになるらしい。

それだけのお金と引き換えにニートは永遠の自由と神への挑戦権を得ることが出来るのだ。そこには苦労が重なっていることだろう。しかし、その苦労の先に神がいると信じている。どう考えてもニートは魅力的だ。人間の配下にいる豚にはわからないだろうが。

七

俺はとりあえず、３５歳まではニートが続けられそうだから、残

り１３年を全力で生きるつもりだ。死を宣告されているからこそ、毎日を有意義に過ごせる。
死が遠いということはのんべんだらりと生活してしまうだけだ。具体的に死を宣告されることはショックもあるが、そこに自分にしか出来ないことをやろうという活力が起きる。それこそが、神を掴む原動力になるのだ。
俺はまだ生活に余裕がある。ネットに接続して、掲示板に向かってみた。ここには頭の悪い人間が犇めいている。
「ここまで頭の悪い人間がいるとはおもわなかった」
などと、最初は引くほどだ。
慣れれば、
「ああ、こいつらもニートなんだな」
とおもいながら、好感が持てるようになる。
ニートはクズというものが多いし、人間の配下では正しいことなのだが、俺はそうは思わない人間の一人だ。
ニートになるには理由があるのだ。初めからニート志望というものはほとんどいない。生きているうちに仕方なくニートに行き着くのだ。まさに偶然のごとく、ニートになる。
掲示板にこんな書き込みがあった。
「人が怖くて外に出られない」
俺にはそいつの心情が見えるようだった。人が怖くなるのは罪悪感を抱えて生きているニートには必ず起こる事態だ。
まず、俺から言わせれば、今の社会で健全に生きるためには狡猾さなどが必要で、言い換えれば悪人でなければならない。
法律に反していなくても、悪い人間でなければ社会で生活は出来ない。言い換えれば、
『人間の配下の法律に反していなくて、神の配下の法律には反している人間が社会でうまく生きていける』だ。
逆に神の配下の法律を守っているものはニートになる。神に忠実だからこそ、ニートになる。ニートのほとんどが神の配下で忠実だ。

こういう点から言っても、善人が損するという標語は当たっている。しかも、善人は社会ではいらない人間となりつつある。

試してみよう。乞食が日本を巡る。５０００万人の社会人とすれ違った。

「十円の寄付をお願いします」

と言って、回ったとする。

善人率が１００パーセントなら、乞食が５億を得る。１０パーセントでも５０００万だ。１パーセントであっても５００万円だ。１０人に１人善人がいれば、一巡り、５００万円だ。

しかし実際はせいぜい５０００円だと思う。理由は簡単。

『汚れた社会』だからだ。

社会に悪人がほとんど占める中、乞食に金を与えるものなどほとんどいない。善人が１パーセントの社会というのはすごと思う。でも、実際はそれより、小数点が三つは左に移動する。

この悪人たちに対して、ニートや引きこもりは善人の場合が多い。俺は乞食には金を与えるが、神社に賽銭は入れない。理由は次の通り。

「俺はすでに幸せな奴には１円も与えない」

と考えているからだ。善人というのは幸せなものを懲らしめて、不幸なものを助けるものだ。

だから、ニートはネットの掲示板では成功者を全力で罵っている。すでに巨額の富を得た奴らを落とすためだ。もちろん、びくともしない。ただのあがきに過ぎない。しかし、罵るのに懸命な彼らを見ていると、俺は応援したくなる。彼らに幸せをと神に祈りたくなる。成功者を落とし、不幸に苦しむ者に光ありと。

俺の好きな漫画に『ヒ●ミ教』というものが出てくる。俺はそれを信仰したいのだ。

俺はどれほど努力を重ねて成功した人間であっても、幸せを感じているものを落としたいと思う。そして、どん底にいる人間たちに祝福を与えたいと思うのだ。

もちろん、ネットに向かって、恨みやつらみを吐いても、何も起きない。むしろ、変人扱いされるだけだ。それでもいいのだ。幸せな人間は不幸しかばら蒔くことができない。不幸な人間だけが他人に愛を与え、幸せをばら蒔くことが出来るのだ。

人が真に勇気付けられるのは何か？　スポーツで成功したものの言葉か？　違う。そんなわけがない。そんなもので勇気をもらえるものは真に苦しんでいないだけだ。病気で苦しんでいるものたちの必死に生きようとする姿だ。テレビで成功者が何かを言って、国民に勇気を与えたなんて、馬鹿な奴らがほざくが、ふざけるな。お前らの撒き散らした不幸はどれだけ大きいか。それを理解して、発言しろと言いたい。成功者が、

「皆さんのおかげです」と言ったら、そいつは許せる。きちんと分かっている。多くの人間の不幸から、なりたっていることをよく知っている。

不幸のどん底を這って生きるものたちに目を向けてみろ。もう死にたいなんて思わなくなる。それは不幸だ。本人が幸せを主張しても、第三者からは不幸にしかうつらない。しかし、しかしだ！　そいつらこそが苦しむものたちに力を与えるのだ。幸せを与えるのだ。この世に不幸な人間を作った神はきっとこう思ったに違いない。

「お前たちは幸せを与えてくれた」

不幸な人間がいる理由はそこにある。そう思うのだ。ニートの存在理由。それは永遠のテーマだが、そこにヒントが隠されているのだ。

世の中には難病に苦しむ人間がたくさんいる。苦しまない人間もいる。この違い。きっと死後の世界で、神が苦しんだ人間を助けてくれるはずだ。もし、助けぬなら、俺が神となって、与えてやる。そして、再び、生の世界に帰ってくる。幸せを与えるためだ。

こうして、ニートも必ず、転生してくる。それは複雑なシステムによって恐らくは代数的に定義されているはずだ。その神を目指すことがニートの仕事なのだ。

四

第一に神の遠さを感じたのはニートになって一年が過ぎた頃だ。ニートになって、一年もたつと、だいぶニートになれてくる。俺がニートなのは必然。その存在意義を俺は示すだけだ。役に立たない、早く死ねといわれてもいい。なぜなら、人間の配下でそう言われても、すでに、神の配下にいる俺には関係のないことだからだ。

俺は必要だ。生きる必要がある。神の配下で必要な人材だ。

「神は姿を現さない」

起きて、俺は外を見た。今日は曇っている。俺は曇りが好きだ。昼より夜が好きだ。暗いのが好きなわけではない。

夜のほうが、外を歩いていて、神に会える可能性が高いからだ。青空より暗い空や星空のほうが神秘的だからだ。

俺は星空が好きだ。三時間も見つめていたことがある。

地面を蹴って、あの星まで届けば、どんな感覚なのだろう。そんなことを考える。青空ではそんなことは思わない。

月を見るのが好きだ。突然、月が赤くなったり、何かが動いたりすることを期待しながら見る。

さらに夜に不思議な体験を二度したことがある。

まず一度目は火の鳥を見たというものだ。夜の十一時ごろだっただろうか。俺は暗くなった公園を歩いていた。そこに突如、何かが横切った。身体が輝く鳥が山のほうへ飛んでいく。やがて、見えなくなった。

それがなんだったのかはよく分からない。しかし、輝く鳥などは聞いたことがないので、不思議だった。

もうひとつは公園の堤防を越えると、川があるのだが、普段はないはずの緑色の光が水面に張り付いていたのだ。それがなんだったのかは分からない。しかし、次の日以降は存在しなくなっていた。

近くに電柱はないし、取り壊された跡も無い。

それから、ちょっとこれは横道にそれるが、幽霊は実在する。これは俺が保障する。この事実はあまり語りたくないのだが、二つ奇妙な話がある。ただ、先に言っておくが偶然だったというのが、一般的な見解だと思う。

まずひとつはお盆の日に、親の祖母の家に行った。かなり鄙びた場所で、すごく不思議な場所だ。どう不思議かと言うと、難しいのだが、寝室がいかにも奇妙なのだ。裏山の中に墓がある。墓参りから帰ってきたときのことだった。

俺はポ●モン（アドバンスの奴）を始めたのだが、サファリパークでカ●ロスを捕まえようと悪戦苦闘していた。なかなか捕まえられず、二時間が経過した。

「カ●ロスを捕まえさせてください」

とお願いしてから、電源のスイッチを入れた。一回目のエンカウントでカ●ロスが出て、一回で捕まえられた。俺は驚いた。偶然にしては出来すぎていると思わないか？　これは本当のことだ。

もうひとつある。これはかなり前の話になるのだが、墓で写真を取った。すると、俺の頭に緑色の……比喩で言うなら、悪魔城ド●キュラの『ノ●男』みたいなものがへばりついていた。奇妙だと思った。それから、しばらくして、その写真からノ●男みたいな奴が消えてなくなった。しばらくして、写真がどっかにいった。

俺の見間違いだったとは思うが、それにしては鮮明に覚えている。それから、母が看護婦をしていたのだが、心霊現象によく経験していた。生々しい体験を色々と聞かせてくれた。本当だと訴え続けていたからたぶん本当だろう。

恐らくだが、幽霊は何らかの科学的根拠によって示すことが出来ると思う。実在する。そう思った。まだ奇妙なことはいくつかあるが、ここでは保育園時代の超が付くほど奇妙な経験だけを語っておく。

これは実話だ。そのままを話す。

俺が保育園のころはその体験のおかげでかなり闡明に覚えている。

例えば、先生に押入れに入れられた経験などよく覚えている。
外に遊具があって、今も残っているかはわからないが、土山にドカンをとっこんだようなものがあった。山の近くにある保育園で、スコップなどの入れてある用具室の後ろに丸太が置いてあった。穴が開いているのだが、その奥に緑色の生物がいた。
当時は何かわからず、ずっと見ていただけだった。というのは大人しいほうだった俺はそれを人に尋ねるようなことをしなかったからだ。
自由時間にその緑色の生物を見に行ったのだが、ずっとそこにいるのだ。俺が丸太を揺らすとわずかに反応する。
いつかは忘れたが、ある日、丸太を揺らした、すると、緑色の生物が出てきた。宙にとび出してきた。よく見ると、蜘蛛のようで、足が器用に動いている。飛ぶ蜘蛛がいるとは思えない。緑色の生物はそのまま森の中に消えていった。それから、そんな生物は見なくなった。ちなみにそこはH県T市だ。暇があったら、探してみてくれ。

八

俺がニートになるまでは、思った以上にまともな奴だった。たぶん、そのまま進んでいれば、普通の凡人になっていたかもしれない。そうは問屋が卸さないのが現実だ。
俺は兵庫県丹波市に生まれた。生まれたときは丹波市という地名はなかった。丹波市になったのは高校になったときぐらいだったろうか。
俺は小学生の頃、今からは想像できないほど、まともだった。悪さをして怒られたことはあるが、すぐに反省していた。今思えば、その頃から、今の自分の面影があった。
俺は涙もろいから、少し怒られると泣いてしまった。そのたびに、憎悪とか怒りを覚えた。俺は感性が強かったのかもしれない。俺の

場合、すごく長引く。憎悪がなかなか心から離れない。
だから、兄弟喧嘩をすると、もう数ヶ月は尾を引く。
そんな人間だから、憎悪や怒りの積もる速度が尋常ではなかった。内向的というわけではなかったが、そういう点に関しては内向的だったから、ストレスを発散することが出来なかった。
こうして積もった憎悪に拍車をかけたのは恐らく負けず嫌いな性格だ。俺は負けず嫌いで、兄にゲームで負けると癇癪を起こしていた。さらには、某有名アクションゲームで、死ぬたびに、腹の立つ効果音が流れてきて、腹が立って、投げつけてしまった。
ゲームの記録が消えて、腹の立つ効果音が聞こえてくると、一晩中泣くこともあった。ゲームをつけて、付かない。接続部に息を吹きかけて入れなおす。ついたと思えば、記録が消えていた。とても虚しいものだった。
こんな人間がまともに小学校を終えられたのはまさに奇跡だ。中二までは普通に生活を送ることが出来た。
中二こそがすべての始まりだった。この時期が俺を狂わせ始めた。まさに中二病だ。本当に恐ろしい病気だった。
中二で一番変わったことといえば、『にきび』が出来たことだ。たかがにきびだと思っていたら、こいつの恐ろしさはもはや核兵器級だった。
もし、この世の中に俺より『にきび』で苦しんだ人がいるとすれば、その人間は神話を気付くことが出来るというほどだ。
にきびというものの真の恐ろしさを公開したいと思う。もし、にきびという悪魔が体を洗脳し始めたら、至急対策を立てなさいといいたい。それから、周囲は馬鹿で知識がなさ過ぎて、ひどいことを平気で言いやがる。そういう奴は知識のない馬鹿だと思って、すえておきなさいといいたくなる。
まず、にきびというのはもはや悪魔だ。どういう悪魔かと言うと、人間の顔や胸や肩、または全身に寄生して、皮脂をエサに憎悪を心に流し込む高等悪魔だ。

しかも、かなりタフネスが高く、ほとんど攻撃が通用しない。いくら攻撃をしてもオドロのように分裂していく。しかも、成長が早く、一日で大型になる。顔中が晴れ上がる。リンパ球を攻撃してくる。周囲が馬鹿にする。もはや究極の寄生型悪魔にランクインさせてもいい。ちなみに結論から言うと、『プロアクティブ』という破壊力抜群の兵器を導入して、ようやく撃退に成功した。成功しても、用意が遅すぎたため、跡は消えない。

そのにきびというのはアクネ菌が原因なので、アクネ菌さえ、倒すことが出来れば、にきびは出来ない。しかし、アクネ菌は皮脂が大好物なので、即行で分裂を始める。しかもけっこう強い。皮脂の分泌はコントロールできないから、皮脂腺が発達した人はもはやにきびにとって最も住みやすい要塞となる。

周囲は馬鹿しかいなかったので、よくも調べないで、

「エイリアン」

みたいなことを連呼していた。腹が立つが、なぜか言い返せないのが、今の日本社会である。

にきびの奮闘記録だけを一気に書くとこうなる。

中二　にきびが出来る。

中二・五月　なぜか、１０円玉級にでかくなったので皮膚科へ。抗生物質を貰う。飲んで、ちょっと治る。これで安心だと思っていると、数日のうちに増殖。進化を重ねて、肥大化。

中二・Ｘ月　にきびが信じられないほどでかくなる。「お前それ、にきびじゃなくて、ガンだろ」と某生徒から言われる。大きな皮膚科へ行く。

中三　検査異常なし。極めて健康。にきび、悪化を続ける。切開や塗り薬による治療開始。効果はあるが、新しいところに卵を産み付けるかのように増殖。肥大が続く。

「お前、おたふくかよ」みたいなことを言われる。はだしのげんに出てくる原爆被害者の顔みたいだとか言われる。顔洗えとか言われ

る。
一応洗顔はしていた、皮膚科の先生に言われたとおりに洗う。効果なし。肥大が止まらず、５００円玉クラスになる。肩にまで出来る。胸や背中にも例外なく出来る。
罵倒されるのが嫌になるが、学校は通う。根性を見せ続ける。
「人間じゃねえ」とか「やばいぞ、お前、死ぬぞ」とか言われる。言われて、さらに悪化する。教師が心配する。心配がうざくなる。
高一　底辺の進学校に入る。にきび治らない。教室で孤立する。何もしないと虚しいので、休み時間に教科書を見たふりとかする。がり勉に思われる。
孤立が続いて、辛いので、とことん勉強してやろうと思う。頭が悪いので、うまく理解できない。部活の先輩がうざい。部員が基本的にうざい。
高二　腰痛を機に部活をやめる。にきびまったく治らない。市販の薬を親が買ってくる。効果なし。むしろ、にきびの栄養になった。でかくなる。痛くて眠れない。硬いものをかむと鼻のにきびが破裂する。
なぜか、頭にもにきびができる。なぜか、頭ににきびができるとそこから毛が抜ける。周囲がおかしなものを見るように笑い始める。
毛が七割消えた。はげる。頭に出来るにきびも例外なく大きくなる。誰かが呪っているのではないかと心配した優しいクラスメートが「除霊してもらえ」とか言ってくれる。
「にきびなんて全然気にならないぞ。はげなんて問題なし」というクラスメートがいて励まされる。
いい加減、周囲がうざいので、Ｔ大学を目指す。英語の配点が１２０点もある。やめる。後期なら数学が４００点だと思えば、センター足きりが４５０以上しかも英語が配点２００を占める。やめる。
高三　どうでもよくなる。完全自殺マニュアルとか見る。けど、死なずに頑張る。足を怪我する。不幸が連鎖する。発狂しそうになって、夜中に公園を走り回る。

ＤＱＮの下級生が馬鹿にしてくる。いい加減うざいので、通学路を変える。永遠に独りになりたくなる。

にきびのことは言ってほしくないと思う。言わない人もいてくれたが、けっこう言ってくる奴が多い。無責任なことを言いまくる奴が多発。

「伝染病が移る」みたいなことを言う輩がいる。いい加減うざいので、無視する。アニメにはまる。家に帰って、ほぼずっと見る。

受験？　どうでもよくなる。Ｔ大受ける気力もない。もはや精神を維持することで精一杯だった。誰にも相談せず、大学に行く。

大一　猫と恋人関係になる。一月で破局。（後に解説）発狂する。自殺するか、引きこもりになるかどちらかを選ばせてくれと親にメールを送る。引きこもりになれとメールが返ってくる。

無事戦場から帰還する。にきびは極限に達していた。極限のにきびはハンバーガーの大きさ。もはや誰も俺を止められない。

引きこもり時代　帰宅後、皮膚科にかよう。発狂した精神では外に出るのも厳しい。家に閉じこもる。このままでは俺の人生が崩壊するからと精神科へ行けと親が言う。外に出られず、あきらめる。

時間だけが経過する。父親が２０歳までだと脅す。ああ、もう死のうと思う。心臓病と闘うドキュメントを見て、感動する。生きようと思った。生きているうちに罪悪感が募ってくる。にきび治らず、俺を殺そうとする。

強い。これほど強い生命体と闘ったことは今までにないと思う。この強さに１００回泣かされる。折れなかった俺の気力に自分で感動する。

人知れず憎悪が爆発する。自殺未遂二回。悔しくて死に切れない。しかし、外に出ることは叶わず。俺のことも知らず、親は無責任なことを言う。仕事を考えろ。無理だからここにいると主張しても親は理解しようとしない。

ひきこもりから一年　親が酒を飲むと注意。俺に殴りかかってくる。恐怖が増すばかり。死のう。楽に死のうと思いながら、結局死

にきれない。
躁鬱じゃないのか？　と言われるが、精神科に行ける能力も損なわれる。家から一歩も出られなくなる。
アニメを見ると、自殺する気がわずかに緩和される。昼からインターネットをしていると、親が文句を言う。
自分の部屋に引きこもる。どうすることも出来ず、何かに手をつける。もう一回、T大学を目指そうと、参考書を引っ張ってくる。何もやる気が出ない。やっぱり死のうと思って、死ににいく。死に切れず、帰ってくる。
憎悪を何とかしないと本当に死んでしまうかもしれない。こうなれば、超有名になって死んでやるとか危ない方向に思考が進む。
結局、勇気や行動力が湧かず、消沈。二日に一度は死にたくなる。悔しくて死ねない。
引きこもり二年　ヤバイことに気付き始める。もう、どうでもよくなる。このときになって初めて、親がプロアクティブを手に入れてきた。
すごい効果で、５００円玉にきびが消えていく。しかし、跡が残る。
「にきびが緩和しても、もはや手遅れだった」と言っても、後の祭りだ。

A1（後書き）

まだまだ日本一には遠いよ。

A2（前書き）

日本一まで、あと、６２８７話！！

A2

一

示したとおり、にきびという悪魔はもはやドラゴン級の悪魔だ。これほど恐ろしいものと俺は出会ってしまったわけだが、一番きついのは周囲の反応なのだ。

つまり、にきびができていても、周囲が普通なら問題ない。しかし悪人が0，0001パーセントの現実ではそれは願望でしかない。

それから、頭に出来るにきびは痛恨の一撃だ。コンボ攻撃を仕掛けてくる。にきびができる。それで終わらない。髪の毛を引っこ抜きやがる。さらには後頭部に出来るといたくて眠れない。もはや地獄絵図だ。

ここまで行くと、もはや人間の風貌としては見られなくなる。つまり、早期対策が必要な悪魔で骨折などよりもたちが悪い。骨折なんて可愛いものだ。

このにきびのせいですべてを壊されたような気がするが、このにきびに感謝しているところも今となってはある。

恐らく、ここまで堕落した人間は自分ぐらいだろうと思う。金も時間もすべて持っていかれた観がある。それでも、その代償にくれたものは大きい。痛恨の一撃が精神に打ち込まれる感触というものを知ったような気がする。そして神になれるチャンスも与えてくれた。プライスレス。お金では買えない究極の機会だ。

二

だが、俺にとって、にきびは補助的なものでしかない。俺にとって一番大きかったのは、思想のおかしさだ。俺の思想はかなりおかしい。

だが、俺の思想は神をも凌駕する可能性を持っている。キリストなど俺にとっては通過点に過ぎない。聖書が何千億部も発行される意味が分からない。本当の神は精神世界に眠っているのに、あたかも神を崇拝しようなど、俺の思想からすれば甚だおかしい。もちろん、それは俺の馬鹿げた勘違いであるかもしれない。だが、神が現在の数学的、科学的解釈によって理解できるはずがない。精神世界ではファンタジーそのものが現実になってくる恐ろしき世界だ。この世界にいる神は単なる現実では話にならない。これはもはや超次元のレベルだ。

俺の目指す神は恐らくだが、精神世界である条件を満たしたときに出現するものだ。その条件は伏せられているので、無限空間に物質を落下させるような確率的な話になる。それは能力に関わらず、すべての人間が均等に持つ確率だと思う。

俺の思想によれば、まず次のことがいえることになる。

1、人間の配下にいるものは人間の配下にあるものでしか、自らを表現できない。

2、神の配下にいるものは神の配下にあるもの、人間の配下にあるものを用いて、自らを表現することが出来る。

これを簡略化すると、神を得るための条件は、精神世界つまり妄想より得た事実と、経験つまり現実より得た事実を掛け合わせることによってしか神を表現できないのだ。数学的に、科学的に考えて、どうしてもつじつまの合わないものがあるとすれば、それは神の配下にあるものなのだ。

俺は神の配下にあるものこそ、すべてだと思っている。人がどう生きるべきかなど、そんなものは必要ない。なぜなら、俺からすれば、神の配下にあるもののうち、神を手に入れることが、人生における目標だからだ。

どう生きればいいのか？　神を得ればいいのだ。途方もないことだ。1兆円手に入れようとか、宇宙旅行をしようとか、太陽を粉砕しようなんていうちっぽけでくだらないものを夢に持っている暇は

ない。ましてや地球の低級レベルの夢なの早くから捨てて、神のみを目指せばいいのだ。
俺は神だけを見ている。程度の低いものは何も求めたくはない。しかし、人間自体、程度が低いから、人間の肉体が生き続けるために、恐るべき妥協をしなければならないのだ。
それに人間の配下にあるものも必ず、神を得るために必要になってくるはずだ。そうでなければ肉体の存在意義がない。
俺が小説を書いていることはこの小説が存在する時点で自明なのだが、俺は最初、小説というのを誤解していた。
俺が小説を読み始めたのは高校生になる頃で、それまでは小説というものを読んでこなかった。活字を目で追うというものが億劫だったからという単純な理由だ。
しかし、俺が小説にはまったのは、単に面白いと思ったからではない。
まず、言うと、面白いものなんてない。俺は楽しめない人だ。俺を楽しませることが出来るのは自分だけだ。だが、小説に恐るべきものを見出したのだ。
これは作家を馬鹿にするものではないと最初に述べておく。これはあくまで、俺が思うものでしかない。
俺は、ほとんどの作家より作家として格上だと思っている。つまり、俺は書き手としてトップクラスの実力を誇っていると自分で言える。自惚れといわれればそれまでだが、俺の作る作品が、他作家の作る作品より劣っているのであれば、俺はそう思うものを節穴だと思う。ただ、ひとつ言っておくと、俺の初期作品は、俺の思想に反するものもあるから、他作家に負けている場合も多いかもしれない。
俺の初期作品は全部で27作品だ。これらはいかにも考えて作った作品だ。つまり、数学の答案を作るかのように作った作品だ。俺はそれらの作品を読み返して腹を立てることが多分にある。「なんてことだ、オーマイガー」となる。理由は簡単。俺の思想に忠実で

ない、俺の魂より生じた作品でない。出来れば消したい。消し去って、俺から切り離したい。だが、神は恐らく読んでしまっている。

もう引き返せない。俺はこの２７作品によって、魂を汚された気分に陥る。読者のものには何とお詫びをすればいいものかと考えてしまう。そして、それがわずかでも残ってしまうことに俺は怒りと憎悪を感じるのだ。

だが、真の俺が作り出す作品は恐ろしいものである。これらはもう人間の読むべきものではないのだ。

俺は、夏目漱石にも三島由紀夫にも志賀直哉にも谷川流にも作家として劣っていることは１００パーセントないと断言出来るのだが、芥山龍之介と太宰治の二名だけは、どうしても勝てるという絶対的根拠をもてないでいる。

俺がこの二名を知ったのは、高校生になってからだ。俺は魂より生じる作品というものだけを欲した。精神世界とはすなわち、魂が体験する世界だ。

ここから湧き上がってくる小説とは、はっきり言って、恐るべきものだ。エンターテインメントなど必要ない。俺は小説を楽しいと思って読んだことなどない。文章がすごいなんて思って読んだことはない。

俺はただただ、小説より作者の魂を読み取りたかった。俺の勝てないと述べた二名の作品は読むとそれだけで恐怖を感じることすらある。作ったのではなく産まれた作品なのだ。俺の思うに、羞恥心、恐怖心を持ちながら、産まれたものだと思う。その羞恥心には恐るべきものがあると思う。

俺も同じだ。小説を生み出すことほど恥ずかしいものはない。肉体をさらけ出すような次元とは桁が違う。精神をさらけ出すことほど羞恥なことはない。もう、精神異常者でなければ出来ることではない。そう、それが小説だ。売春というレベルのものではない。これは危険を含むものだ。

だから小説を書くためにはまず真の小説を書かないようにしなけ

ればならない。何が何でも精神をさらけ出さずに作品を書かなければならない。

だが、俺は真の小説を書かなければ神には決して届かないと思うのだ。だから、俺の27作品はまさに抜け落ちた作品だ。そんなものはいらないのだ。神に捧げるまでもないものだ。

俺が小説を書き始めたのは神を得るためだ。だが、神をおびき出すためには驚くほどの羞恥と恐怖を超えなければならない。重なる憎悪と日々闘い続けなければならない。

真の作家はまさにその連続だったに違いない。もはや、精神が破壊されるのを待つばかりの生活に自棄になってしまったに違いない。

小説を書く場合、書こうと思えば、1日あたり原稿用紙240枚は書ける。俺の初期作品は2日で完成していたものばかりだ。

だが、書いても書いても神に近づかないのはなぜか。脈絡を意識しすぎたのかもしれない。神のいる精神世界では脈絡のない世界だ。そこで生きているのに、現実というレベルの低いものを投影させすぎた結果、精神世界の道を閉ざしてしまっていたのかもしれない。小説で最も大切なことは、常にありえないことでなければならないことだ。現実から抜け出したひとつの恐怖、または羞恥の塊でなければならない。キャラクターが平気で恥ずかしいことを言ったり、それに対して、真面目に反応する奴がいたり、痛い香具師が平気で意味不明な思想をまともな国民に聞かせて、納得を得たり、それらは要するに願望の固まりでもある。作者の考える願望が小説にて、叶えられているのだ。真の小説を読むと、その作者の必死の嘆きや苦しみ、憎悪すべてを感じることが出来る。それは魂より生じた作品だからだ。これらを得てこそ、初めて、作者と読者はひとつのコミュニケーションを得ることが出来るのだ。そして、このとき初めて、読者は小説より、人生において最も有意義なものを得ることが出来るのだ。

俺の精神世界は、恐らくだが、世界で一番恐ろしい作品群だ。ここまで怖い作品はない。別に幽霊が出たとか、そういう意味ではもち

ろんない。
俺の作品は恐ろしい。会話を追うだけでもその恐ろしさが分かる。俺の憎悪や恐怖、嫉妬、憤怒さまざまなものが次々と繰り出されてくるのだ。
これらはもはや安易に子供に読ませることが出来ない。
そんな作品群で構成されていく精神世界の存在意義はもちろん、神を追うためだ。だが、俺の作品が行き着く場所は恐らく、恐ろしい場所だ。読者の精神を破壊してしまうかもしれない。子供には絶対に読ませられない。作品が次々に完結していくと、世界がわずかに顔を出す。その世界は恐ろしくて、一目見た瞬間、読者は俺の憎悪や哀しみによって、その精神は支配され、俺の絶対的信者へと成り下がってしまう。だが、その世界を見るためには鍵が必要だ。世界を開く鍵がなければ世界は開かない。そして、その鍵は俺の憎悪や哀しみそのものなのだ。それらを拾い集めたものが見る恐怖のありようは神そのものであり、俺もそのとき初めて、神となる。
だが、これらは俺の羞恥心、恐怖心が抑制してしまうかもしれない。俺はその作品において、ただの物にしたくない。
俺の野心は他作家と桁が違う。他作家が金儲けに小説を書くというのなら、俺は読者を俺の信者にして、俺という神を心で信仰し続けるような状態にさせるように作品を書くのだ。つまり、俺は全世界の人間を配下に置くのだ。そんな野心を持つ作家が他にいれば、とことんまで争おうではないか。どちらが多くの信者を手に入れることが出来るか。しかし、読者を跪かせるのは容易なことではないのだ。
読者も馬鹿ではない。作者が本気になっていないと振り向きもしない。小手先のプロットに頼って、閉鎖的に読者を操り人形のごとく操ろうとしても無駄だ。ここで頭の悪いものは簡単に操られてしまうが、真の読者というものはダメだ。
真の読者を跪かせるためには、まず作者が馬鹿にならなければならない。読者が読者の意思によって、俺に跪かせるがごとくだ。強

制的に跪かせるのは作家としてどうかしている。真の読者を支配するためには本気で読者の精神を支配してしまわなければならない。人の肉体は支配できても、精神は決して支配できない。

俺の文学はそこから発したのだ。つまり、俺は精神世界そのものを提示することで、信じられない作品群を生み出し、神そのものを構築しようとしたのだ。

精神世界を提示することほど愚かで恥ずかしいことはない。こんなことは他に出来るものがいたら、ぜひ、その作者の作品をお目にかかりたい。だが、これを実行したとき、作品は単なる文字を飛躍して、パズルのワンピースとなって、神の一部となるのだ。それはもはや娯楽の域ではない。生きる目的そのものだ。つまり、俺の作品そのものが人類の完結になるのだ。全人類は俺のために存在し、俺を認めることで、そのものの人生を完結させることが出来るのだ。まさに、それが神の姿だ。

俺は神になる。全人類の迷いをすべて取り去って、全人類に安らぎを与える。全人類は俺を信仰することを人生の目的とすればいいのだ。俺を認めることが人生の完結となるということは、それだけ、俺の作品群が桁外れのものでなければならない。つまり、明確に神を捉えていなければならない。そこに難しいものは存在しない。なぜなら、精神世界とはいかなる難しいものも容易なものに置き換えられてしまう理想的な世界だからだ。精神世界が俺のテリトリーとなる。そして、人類の救済者として、俺は神となり、これまで神と名乗っていたものに戦いを挑む。精神世界での戦いだ。俺の精神世界で戦えば、俺の勝ち。相手の精神世界で戦えば、相手の勝ち。そういう単純な戦いになるのだ。

三

俺は今、部屋にいる。何をしているのかと言うと、精神世界にいる神に祈りを捧げているのだ。俺が将来、お前を越えて新たな神に

なると。神をXとすると、X＋1は存在しないといったが、それは現実だけ。精神世界ではいかなることも起こりえるのだ。
俺には深いエピソードがいくつかあるのだが、それらは俺がいかに現実世界で多くの憎悪を得たのかを示すものだ。
新しいところから見ると、俺は大学時代、一度だけ恋人を得たことがある。それが猫だったことから、人間に対する憎悪がうかがい知れるだろう。
俺はその猫を永遠に愛し続けるつもりだった。この悲しい話は涙なしには語れない。

俺が大学に行ったのには何の理由もない。進学校だったから、就職が厳しい。だから適当に大学へ行けということで、受ければ受かる大学に行くことになった。
俺に友人はいなかったから、一人寂しく入学式に望んだ。サークルに入るつもりも何かをするつもりもなかった。ただ、適当にことが進めばいいと思っていた。
だが、俺にとって、人間と時間を共に過ごすことは苦痛そのものでしかなかった。大学へ行き続けることが苦痛になりつつあった。友人はもちろんいない。
そんな俺はいつも独りで昼食を取っていた。パンであったり、プロテインバーであったりはしたが、一日の食費は５００円を切っている。
ボーっと食事を取るのだが、場所は講義の開かれる某号館の後ろで、そこは警備が厳しい場所だった。警備員が何度も通る。
そんな場所には野良猫が多く生息していた。高校が隣にあって、体育の授業などが見えたりした。景色はいい。近くに山があったし、都会景色も見えた。
俺は恋人など今まで一度もいたことがなかった。
ある日のことだ。そこに一匹の白猫が通りかかった。その猫は可愛らしい容姿をしていた。可愛い目を持っているだけでなく、ニャ

ーニャーと可愛い声で鳴く。そして、大人しく非常に家庭的な猫と見えた。俺はパンを齧っていた。
猫は恐る恐る俺のほうへ接近してきた。しかし、途中で止まる。怖がっているのか、なかなか接近してこない。
「これがほしいのか？」
と聞くと、ニャーと可愛らしく鳴いた。俺と猫はしばらく見つめ合った。猫の潤んだ目を見ていると胸が熱くなった。
俺はパンを地面に置いてみた。すると、恐る恐るだが、猫がこっちを目指し始めた。そしてパンを捉えて、可愛らしく噛み付き始めた。
ここで関節的なキスは完了した。そして、半分ほど齧り終わると、鳴きながら、俺のところへ寄ってきてくれた。今まで誰も来てくれなかったのにその猫は来てくれたのだ。お腹をひっくり返して、観察すると、雌だと分かって、さらに俺の関心は高まった。
俺は猫の頭や首もとを撫でたり、お腹をさすったりして、講義をサボって、遊ぶことにした。猫は俺の膝に乗っかったまま、動かず、くすぐったそうに鳴いていた。講義は９０分ごとで、午後に最大で２７０分の授業があるのだが、さすがにさぼれない講義もあって、俺は途中で猫と別れた。
「また明日な」
こうして、猫と別れた。次の日も猫は来てくれた。例によって、体をさすって、楽しむのだが、猫はいつまでもそこにいてくれた。いつまでも、俺が底にいる限り、彼女は俺の傍にいてくれたのだ。
だから、ずっと猫と遊んでいた。最大で夜に十一時までだ。猫は夜に弱いらしく（その猫は例外なのかもしれないが）夜になると、眠そうにする。あくびみたいなこともしていたし、それが可愛らしかった。猫の耳は外側をくすぐると、ぴくぴくと震えた。あまり触られるのは嫌らしく、ニャーニャーと鳴いたので、あまりしてはいない。ひげを引っ張るのはあまり嫌ではないらしい。尻尾はかなり嫌がる。女性で言う性感帯になるのだろうか。よくは分からないが、

尻尾を触ろうとすると、けっこう暴れた。
俺のファーストキスはそれから七日目に訪れることになった。猫はいつも、俺より早く到着しているのだが、その日はいつも以上に、甘えてきた。膝に乗っかって、顔を擦り合わせてくるのは、二日も前からあったことだが、それが顕著だった。ずいぶん、親しくなったので、俺は告白をする決意をした。
「僕と付き合ってくれませんか」
とけっこう緊張しながら言ったと思う。すると、少し遅れて、猫はニャーと鳴いた。俺はそれを肯定だと受け取った。抵抗しなかったし、可愛い顔をしていたからだ。
唇を重ねようとするのだが、猫の口は思った以上に分かりにくい。しかも噛み付かれる危険性があったので、慎重に舌でなぞる。しかし、毛が舌にあたるばかりで、喉が渇くばかりだった。ちなみに、動物と接吻するのは、病気が移るからあまりよくないと一般に言われている。だが、病気程度で引き換えに出来る俺の恋ではなかったので、俺は舌で口元をペロペロと舐めた。犬よりは暴れないから、猫とキスをするのはやりやすい。ただ、顎の力は強いので、気をつけないと、かまれるかもしれない。俺はかまれなかった。
人生で一番興奮したときだった。もう彼女に人生を捧げるつもりだったし、その日木曜日で大して重要な授業がなかったので、ずっとキスをしていた。だが、警備員が何度も通るから、そのたびに、びびった。
名前は付けなかった。つけるという発想もなかった。ただ毎日、愛し合うことだけを考えていたからだろう。
さすがに猫と性交渉はしなかった。だが、破局せずに関係が続いていれば、していたかもしれない。それは分からない。
俺とその猫との関係は突然終わりを迎えることになった。あまりに悲しい別れとなった。その日は別に嫌な予感がしたわけではなかった。だが、その日、嫌な連中と出会った。同じ大学に通う集団だ。話したことはないし、名前も知らない。

確か、実習で一緒になったことのある連中だと思う。髪を染めていたし、7人ぐらいでゲラゲラしていたから、俺とは対極にあるものたちだ。
俺が猫と会っていた場所は聖域である。というのは、その場所は警備員は通るが、それ以外の人間は通らない。まあ、通らないから昼食場として利用していたわけだ。
その聖域をその7人は侵した。俺が猫と愛し合っていた愛の巣に堂々と侵入していたのだ。俺が遅れて、そこへ行くと、なんと猫がそいつらに弄ばれていた。
「猫がおったんよ」
「ほら、ニャーニャー」
そんな感じか、嫌、もっと雑談の中に紛れていたから、もっと近代的な会話だったと思う。そいつらは猫を引っ張りあげてどこかへ連れて行ってしまった。
もちろん、追いかけたさ。しかし、俺に話しかける勇気があると思うか？　俺に猫を救える勇気はなかった。俺は俺が許せなかった。
俺の彼女だ。死んでも助けたい。だから追いかけた。せめて猫に飽きて、どこかに捨てたら俺が後で抱きしめに行くつもりだった。しかし、その不良は猫を連れて、どこかへ消えてしまった。
近代の不良だ。猫なんかに興味はないはずだ。どこかに捨てているだろう。そうしたら、明日また会える。そう信じていた。
眠れない夜だった。ただ、猫の無事を祈った。俺のすべてだ。なくしたりはしない。
「頼む無事でいてくれ」
しかし、そこに猫は着てくれなかった。次の日も。次の日も……。
「君がいなくなって、ガランとしちゃった。でもすぐに慣れると思うんだ。だから心配するな」
なんて言ってみたが、俺は放心状態を抜け出せなかった。何度も泣いた。会いたくて探し回ったさ。
探している途中、たくさんの集団に出会った。ぺちゃくちゃと楽

しそうに話している。それがすごく煩わしかった。涙が出た。もうすべてが嫌になった。

猫がいなくなり、俺はたそがれに身を沈めていた。だが、その猫とは再会できた。しかしすでに手遅れだった。

俺の大学には文型君もいる。環境何とか科みたいなところの文型君五名ぐらいがいた。すごく怖そうな格好をしている。その文型君が猫を飼い馴らしていた。

俺はその猫の楽しそうな顔を見て、自殺しようと思ったさ。分かってるさ。猫に悪気はない。猫は人間みたいに考えて行動なんかしていない。でも、なら、あの思い出はなんだったんだ。俺は俺は……。文型たちと楽しそうにする猫に背を向けた俺は一度だけ振り返った。目が合うことはなかった。文型のぺちゃくちゃとした話し声だけが聞こえてくる。

「さよなら、そしてありがとう」

涙ながらに俺はその場を去った。それが俺を壊した。数日後、発狂した俺は大学を辞めた。俺にとって、最初で最後の恋愛は終わり、混沌の渦巻く引きこもりへと転じていく。だが、俺はその猫と出会えたことを後悔などしていない。こんな冴えない俺が恋愛の楽しさというものを味わえたのだから……。もし、俺が死んだら、また会えるだろうか。

四

俺の次のエピソードだが、これはかなりおかしな話だ。俺にとって、不良というものや校則などを守らないものというのは校則を守るが人の悪いものよりずいぶん人間としていいと思った。

俺が高校三年生のときのことだ。俺のクラスは格差社会だった。成績優秀で校則もよく守って、教師の信頼のあつい者、成績は底辺で校則も破って、教師から注意ばかり受けているもの、この二種類がいた。

結論から言おう。本当に善意に満ちている人が多かったのは後者だ。しかも、すごく優しい人がたくさんいた。

何でこんなことになったのか？　俺が思うに、それは人間の見方にあると思う。社会人というのは悪人である。悪人から評価を得られるのは悪人だけだ。すると、教師の信頼があついというのは悪人の証拠だ。

どこから話していこうか……まず名言から。

『自分の狡猾さを社会のせいにする奴にいい奴はいない』

この名言は実にぴしゃりと当てはまる。社会は厳しいというふうに自分に善意がなくて、悪者だということを社会に責任転嫁する奴にいい奴はいない。

これは長年の鋭い観察より得られた事実なので、かなりの割合で正しいと思う。本当にいい教師はそんなことは絶対に言わない。

『社会は厳しいけど、自分だけは善意を持ち続けたい』

と教えてくれた魅力的な先生がいた。もちろん、今の社会、善意は役に立たない。悪意が正義だ。狡猾さが正義だ。だから、その先生の言い分は、人間の配下ではいい指導方法ではない。でも、神の配下から見れば、すごいいい指導だと思う。俺はそれに感動した。

それ以来、たとえ、俺独りでも、俺は困った人の力に極力なれる人になりたいと思った。それで損をしてもだ。

そこで、最初考えたように成績優秀で校則もよく守って、教師の信頼のあつい者というのは狡猾さの度合いを示すものだ。

それは俺が三年間色々なことと接して身に付けてきたものだ。ちなみに俺の高校ではそれは１００パーセント当てはまる。

ここでは匿名にするが、俺の身近にはA君、B君、C君、D君、E君、T君、Y君、T２君、A２君、W君、Xさん、Yさん、Zさん、X２さん、Y２さん、Z２さんがいた。

ちなみに俺は基本的に席を立たない。誰とも会話をしない。それは人と接するのが、苦手だからだ。だが、この中で、T君、Y君、T２君、A２君、W君、Xさんは６大神人間として捉えてもいい。

Xさんがすごい。なぜなら、Xさんは女子だ。女子なのに、同姓ですら、ほとんど友人のいない俺と話をしてくれたのだ。まさに神だ。

で、共通点。彼らは特に成績が言いわけではない。教師に一目置かれているわけでもないし、真面目かというとそうでもない。

だが、だがしかし、素晴らしいと表彰されるような程度のクズ人間とは一線を画す。それは何か、それはですね、つまり善意を持っている人間だということだと俺は理解した。

まず、俺はすごくネガティブな人間だった。そんな俺を徹底的に気にかけてくれたのが、この6人だった。この6人がいないと高校生活も途中でリタイヤしていたことだっただろう。

まずその1．これは俺が足を怪我していたときのことだ。体育の時間に、球技選択があるのだが、そのときに倉庫の鍵や道具の後始末を当番がやるのだが、俺がその当番が回ってきた。俺は倉庫の鍵を閉めることになった。相方（成績はまずまず、かなりまともと評判の人）が道具をしまうことになったのだが、相方がボールを閉まった後に、しまい忘れのボールがいくつか残った。俺は歩くのもやっとの状態だ。

まともな奴は悪戦苦闘している俺を見ても目もくれず、去っていく。たいがい、仲のいい友人と話しながら、着替えに向かう。理由は恐らく、俺を手伝うメリットがないからだ。そんな仲がいいわけでもないのに手伝う暇なんかないというわけだろう。

しかし、不良のT君とすれ違ったとき、ボールを持ってくれた。決して、もてないボールの数というわけではない。俺が言いたいのは、手伝ってくれたという事実だ。もちろん、不良にはそんな深い意味があったわけではないだろう。ドリブルしながら、遊んでいたし、しかし鍵をかけるまで、俺のことを待ってくれていた。一人というのはやはりどこか不安だ。最後まで不良は付き添ってくれた。

些細なことだが、俺は、「善意のある人だ」と思った。今でもすごく感謝している。もっと些細なことでは、例えば職員室に行くとき、Y君はいつも付き添ってくれた。独りで職員室へ行くというの

はネガティブな人間には辛いことだ。それをY君はよく知っていてくれた。まともな人間は絶対にしてくれないことだ。

善意といえば、普段の会話などでも顕著に現れる。

女子の話をすると、正直、教室の席からゆっくり観察していると、みんな同じに見えた。仲のいいもの同士で集まって、ぺちゃくちゃと話をしている。いつも同じ光景がずっと続く。そういう女子に俺はあまりよい印象はもてなかった。

しかし、ある二人組の女子がクラスは違うがいた。だいたい、女子というのは4人も5人も集まって昼食を食べている。俺などは独りで食べる。I君や後、挙げ忘れていたけどK君もすごくいい人だ。すごい善意の持ち主。もうオーラで分かる。こういう人が増えたら、日本はよくなるんだろうなと思いながら見ていたのだが、二次元のキャラより、I君とK君はいい人だ。驚くほどだ。

で、ここでは二人組の女子がいたんだけど、その二人組はルックスがいいかといわれると、恐らくそれほどでもない。だがしかし、俺が今から恋人にしたいと思うなら、その二人組のどちらか以外にありえない。その二人は普通の女子から外れていた。観察していると、オーラだけで分かる。

その二人組というのは、恐らく、俺が人生これまでで、一番言葉を多く交わした女子（家族は除く）になる。そんなたいそうな話はしていない。個人的な話などはなかったよ。だがだが、それでも、あんなに善意のある女の子が三次元にいることに俺は甚だ感動した。

女＝悪魔の方程式が掲示板で上がっていたが、俺はけっこうな割合で当てはまると思う。実際、俺の高校時代の女ははっきり言って、打算とかそういうので生きていたと思う。もちろん上辺だけど。でも上辺ってけっこう重要だ。

その女子二人は他の女子とはまったく違った。すごく可愛いといわれる女子が俺のクラスには五名もいた。でも、もし俺はその五名から選んで恋人に出来ると言われても、取らないね。俺はリア充じゃないから、女をインスタントみたく扱えない。俺にとって、女は

性格がすべてなんだ。なんなら、恋人が祖母や母親でもいい。
それを俺は高校時代に教わった。その二人組の特に片方は、本気で惚れた。可愛い女の子ではない。でも、その女子より魅力的な女子が校内にいたかというと、ノーだ。
俺が言いたいのは、髪を染めたとかそういう意味の分からないことで人を判断している日本社会がある限り、狡猾な人間は増えるばかりだし、善人がニートになるばかり。善意があればあるほどニートになりやすい日本社会は少し怖いね。不良でも本当にいい人はたくさんいる。むしろ、まともな奴のほうがすごく怖い。俺は少なくとも、いい先生に教わった、『社会は厳しいけど、自分だけは善意を持ち続けたい』で行くつもりさ。死ぬまでね。
こうして考えると、ニートの構造がよく見えてくる。労働者の思い上がりでクズ扱いされているけど、こんな欲に塗れた世の中だからこそ、生産性のないニートが必要なんじゃないだろうか。労働者は悪人だから、何を言っても聞かないのは分かっているけどね。

五

最後のエピソードになる。
今でこそ、ニートだが、俺はけっこう色々なものに挑戦してきた。その挫折の過程を追ってみよう。注目してほしいのは、挫折の決め手になったもの。もちろん、心の弱さが決め手なんだけど……。
1、部活動　2、受験　3、ボクシング　4、受験2
まず1から
高校入学　ハンドボール部に入る。経験はない。
第一回　三年生がけっこういい人だったので、好感がもてる。
五月　割と頑張る。なかなか。
7月　三年生引退。二年生の性格の悪さは異常。（キーパーだけがずば抜けて性格がよかった）
8月　理論もクソもないのに、二年生は権力で一年生を支配。全力

を出すと、ディフェンスのさい手が顔に当たったと言って切れだす。手を抜く。
数ヵ月後　プロの試合と比較して、そもそも根本のやり方から間違っているが、それを指摘しても無駄。ボールを回さないからと切れだす。
　ボール回すことだけに専念する。とにかく個人競技でないものは低能の集まりの場合、打算とかそういうものだけで決まる。やってられない。こっちは正しいやり方を提示しているだけなのに、権力で支配するだけ。くだらないので腰痛を機にやめる。俺はままごとをやりたいわけではないのだ。結局、国体にすら出られず終わっていたみたいだ。ままごとだから当然だが……。

２、受験

高３　いい加減、にきびがうざいので、Ｔ大学を目指し始める。受験科目を調べる。国８０、英１２０、数１２０、理科１２０と分かる。高得点を取れるのは、数と理科なので、この２つで合計１８０を取ろうと思う。
　社会の時間に理科をやると、教師が切れだす。
「関係ないだろ」
　と言っても、意味が無いので、仕方なく受ける。しかし、社会は現社と決めている俺に世界史は意味なし。しかも国語も、漢文は漢文道場で短気決戦をするつもりだったので、必要ない。授業時間が浪費されていく。しかも、分かりやすい授業が出来る教師かというとそうでもない。むしろ下手糞。河合塾の参考書のほうがよっぽど分かりやすい。
「授業のときに、河合塾の参考書読んだほうがいいじゃん」と言ったら、教師は傷つくのかと思うと、言えず、意味もない授業を受ける。
　英語が危ないので、後期試験を目指すようになる。ここでは数学３００、総合２００なので、数学者志望にはやりやすい。しかもセンターは４科目。しかし……。

国語の時間に数学をすると、教師が切れだす。
結局数学が出来ず。しかも意味のない授業を受けさせられる。こっちは1年しかないから厳しいのに……。
結局、教師や周囲の生徒がうざくなって、投げ出す。予備校に通っていれば、こんなこともなかったんだろうな。
3は即行で終わった。
ボクシングスタート　にきびがひどくてプロテストは受けられません。終わり。また治ったら頑張ろう。しかし、治らない。治らないけど、ボクシングは続けよう。このごろ、マイクタイソンにピーカーブーにはまる。ティム・S・グローバー氏からヒントを貰って、トレーニング理論を作り上げる。ダンベルベンチ25キロ時にダンベルを落として、怪我。思いのほか長引く。治ったと思って、スクワット開始。肩が破壊される。踏ん張ったときに立ち上がれず、後ろに転倒。手首をかなり損傷。ベンチプレス（85キロ）が挙がらず、胸が圧迫され、死にそうになる。火事場の力が出たのか、何とか挙げて、脱出。それ以来、高重量ベンチに恐怖心が。サイドレイズで腕の付け根が痛くなる。数日かかる。リアレイズで首がおかしいことに。上腕三頭筋が効いている気がしなくて、重量を上げる。フレンチプレス時に腕が壊れる。リストカール時に手首に激痛が走る。ランジのときに膝を地面に激突させて、激痛が走る。スクワットよりジャンピングスクワットのほうがいいのではないかと思ってやる。スクワットのままの重量でやってしまい、転倒。体が前に仰け反る。ヤバイほど背中が痛む。パワークリーンで勢いよくやりすぎて、バーが顎に激突。死ぬほど激痛が走る。デッドリフトで腰を痛める。
にきびが治らないので、やめる。最近治りだしたが、トレーニング機器がなくなっていた。クレアチンを飲んでいると、ドーピングだと親が言って、切れだす。（本当はドーピングではない）高いのに全部捨てやがった。
4もけっこう早く終わった。

東大を目指す。後期理科一類。東大のホームページを見る。『後期一本化』『安易に科目を捨てる人ではなく応用力のある多彩な人に来てほしい』とか言い出している。即行やめる。数学者志望が源氏物語を読めても仕方がありませんので。

こうして挫折を繰り返したが、俺はよかったと思っている。もし続けていたら、それはそれでよかったこともあったと思うけど、今のひとつの幸せを得ることは出来なかったと思う。挫折はいけないとかよく言うが、

『挫折をしても、人は幸せになるチャンスを得ることが出来る』

と俺は言いたい。何かを頑張るのは大事。でも、挫折しても、幸せにはなれる。挫折したときにこそ、チャンスだと思うことが、人生で重要だと思う。

六

俺が思うに、人間は馬鹿と天才に二極化していると思う。簡単に言うと、社会でまともに生きていけるのは、とてつもない天才かとてつもない馬鹿だけだということ。

馬鹿というのは社会人の多くの凡人だ。能力がなく、

「ぼくちんを犬小屋にいれてくだちゃい。べろべろー」

と言う犬のことだ。汚らわしいが、生きるためには仕方がない。天才というのは犬小屋のオーナーだ。馬鹿を使う側。考えてもみれば、社会というのは、

『天才が上に立ち、そこに人がついていく』

ように出来ている。だから、天才が人を選ぶのだ。天才の立場からすると、馬鹿に来て欲しいとと思うだろ？

頭のいい奴より従順な奴に入って欲しいだろ？　天才は自分が地に落ちるのが嫌なのだ。だから、馬鹿な従順人間を集める。これによって、馬鹿と天才の社会が出来上がった。

考えてもみれば、天才が頭のいいものを取ると思うか？　優秀な

企業スパイをわざわざ入れたりしない。
「革命を起こしてやる。この会社をどん底まで落としてやる」
みたいな野心家を大企業が入れるだろうか？　答えは否。企業のトップに立つ天才からすれば、限りない馬鹿だけが欲しいのだ。
ニートというのはどういう人種か。それは馬鹿ではないが、天才でもない。つまり、人間を偏差値で示すと、５５～６０に位置するものだ。
社会で必要なクラスというのは４５～５４、６１～７０だ。４４以下だと、さすがに使えないし。７１～は頭がよすぎて、とんでもない革命を起こそうとして、自滅する。
ニートというのは社会大半の馬鹿より優秀だが、それゆえにどっちにもいけず。社会から淘汰されたものたちだ。
ニートに必要なのは、馬鹿になるか、天才になるかのどちらか。どちらかに行けば、社会にはめ込まれる。
日本という国は少なくとも、頭のいい人間は必要ない。だから、ゆとりだろうとそうでなかろうとあまり関係ない。必要なのは個性のない従順馬鹿だ。社会のいうことに何の疑問も感じず従えるもの。はっきり言うと、思考力が欠如しているとしか思えない。
ニートはやや頭がいいので、選択権が生じている状態だ。馬鹿になるか天才になるか。決められず、労働していないものだ。
そこで、磁石だと考えよう。馬鹿と天才に磁石があって、社会人の多くがどちらかにくっついている図。ニートは引き合う力が均衡している中心にいると思えばいい。力は相対的にゼロだ。
磁石にくっつくと、一生そこで飼い殺されると考えよう。
「ぼくちん、馬鹿でーす」
と言っている犬が下を見れば、見える。そんな状態だ。そこから、神の配下にはいけない。すると、ニートは神の配下にいける唯一の人間だ。
ニートが社会復帰するにはどうすればいいのか？　まず馬鹿になるか天才になるかを決めなければならない。人が怖いというのは多

くの場合、中間で浮遊している状態で、不安定な体に怯えているだけだ。馬鹿になれば、大抵、対人恐怖症は治る。どうやって、馬鹿になるのか。簡単だ。思考力を封殺してしまえばいい。頭が中途半端にいいがために、多くの思考を展開してしまう。数学でもすれば、あっという間に成績が伸びるだろう。だが、頭がいいために、数学の必要性を考えてしまう。よって、長続きしない。大学は一部を除いて、馬鹿が行くところだ。意味もない（少しはあるが、無駄も多い）学問を何時間も勉強するからだ。高学歴が偉いのは、天性で大学に入ったものだけだ。それはつまり、桁外れの知能を持っているもの。

努力で入ったものは馬鹿だ。なぜなら、大学は所詮研究所の下にある教育機関。研究して、大発見をしたり、学者になるために行く場所だ。就職するために行くのではない。大学に理由付けをしていない。だから馬鹿だ。

大学とは努力して、いいところにいくためにあるのではない。自分の能力に合ったところに行けばいい。つまり、受験勉強など、普通にちょくちょくとやればいい。それ以上やっていいところにいくぐらいなら、P≠NPでも解くための準備をしておけ。くだらない受験勉強に何時間も費やすのは馬鹿な証拠だ。

要するに、数学をやるときに、数学を教えるために数学をやるという練習のための練習というものに近い。大学とはそもそも高等学問を習う場所だ。本来受験勉強というのは、せいぜい、直前に一時間ほど勉強して、受けるところだと思う。いいところへ行こうと行かないと同じ学科であれば、同じように高等学問を習う。違うのは入学試験で点が取れたか否かの違いでしかない。入学試験を分析してみると、数学であれば、もはや数学パズルで天才が解くべき問題と化している。つまり、努力して、典型問題をマスターするような極めて遠回りなことをしていても時間だけがもったいなくなるだけだ。

こうして、無理して高学歴を目指すものは総じて馬鹿な可能性が

ある。もちろん、学歴に命を賭けているような人はそれで構わないが、将来、研究をしたり、優秀な医師を目指したりと本来の意図を完全に見失ったものだといえよう。

ニートは頭がいいので、本気で大学を受ければ、偏差値６５（全国レベルの模試の偏差値）までなら、楽に入るものがほとんどだろう。しかし、そういう人材は社会には必要ない。東大卒の凡人社会人など必要ないのだ。東大卒が欲しいのはもう少し上の天才の領域であって、そこいらの雑用とは違う。こうして、学歴を目指していると、たちまち、本質を見失ってしまう。ところで、受験に受からせようとするための本はたくさんあるが、世界一の数学者になるための本とか、世界一の工学者になるための本というのはほとんどない。これが日本社会なのだ。要するに、多くの受験生が馬鹿で、ただ学歴だけを重視してしまっているのだ。

よく考えれば、世界一の工学者になろうとして、受験する受験生なんてほとんどいない。俺は真におかしいと思うのだ。もちろん、日本社会の多くは馬鹿の集団だから、こういう野心家が増えるのはいいことではない。

野心家が増えれば、馬鹿が減って、天才が増えてしまう。すると、たちまち社会はおかしなことになる。馬鹿が多いからこそ、天才がうまく社会を作り上げていたのだ。

そして、天才が増えることは革命になる。馬鹿の多くが天才となっていくと、社会は激しい競争に捕らわれる。それはもう怖いほどだ。

こうして、天才が増えることは決していいことではないと思う。しかし、俺は少なくとも天才になりたいので、馬鹿のやるように、学歴を求めたりしない。なぜなら、俺の目標は神だ。学歴など程度の低いものは求めていないのだ。

馬鹿は程度の低い目標しか持てない。だから、高学歴だけを目指して、世界一の工学者になろうとか、宇宙を解明しようとか、そういう発想が出てこない。

そして、馬鹿が多いからこそ、ニートは増えるのだ。ニートは天才と馬鹿の間に揺れるものたちだ。能力さえ続けば、ニートはすぐにでも天才になれる。しかし、天才を目指すことすら、程度の低いことと思うのだ。

つまり、タイムマシンを作るとか、未解決定理をすべて解くとか、そういうことすら、俺には程度の低い目標なのだ。俺は神になること。万物の創造主にて、すべてを司るもの。まさに俺に勝てる人間はいない。

七

馬鹿と天才について考え始めたのはニートになってからだ。馬鹿と天才を決めるのは、学力だとか、運動能力だとか、そういう物差しで計ることの出来る能力の差ではないと思うのだ。天才とうのは、最も扱いにくい人種だ。そして、馬鹿というのは最も扱いやすい人種だ。俺がどこかの社長になったとすれば、俺は真っ先に馬鹿を募集する。扱いやすい馬鹿はまさに有能な人材である。

扱いやすいということはつまり、言ったことを素直に受け止めると言う意味だ。そういう面だけを考えれば、俺は馬鹿ではなく、天才だ。俺は人の話を素直に受け入れない。

単純なところからいくと、ｐｕｔ　ｏｆｆ　が計画などを先延ばしにする。延期するという意味があると学校では学んだ。しかし、ｐｕｔは物を置くという意味だと学んだ。どうして、それが延期するという意味になるのか。馬鹿は丸暗記して納得してしまうのだろう。そして、大学受験ではそれさえ知っておけば解ける。馬鹿でも解ける問題だ。だが、天才はその中身にこだわるのだ。『置く』にｏｆｆをつけるだけで、『延期する』という意味になる。これはなぜだと常に疑いを持つ。英語だけでなく、日本語でもそうだ。ブタに真珠がどうして、価値の分からないものに高価なものを与えても意味が無いという意味になるのか。だいたい、ブタでなくても、犬

や猫に真珠を与えても、同じだ。どうしてブタにこだわるのか。それを知らなければ気がすまないのだ。

そんな奴だから、精神論というものに対しては、納得いかないのだ。頭の悪い教師は精神論で子供を言い聞かせるらしい。俺には通用しない。たとえば、やれば出来る。という精神論。これは元気付けようという意味で言った単純なことではあるのだろうが。俺はその意味を考えてしまうのだ。やれば出来る。出来ない確率をまったく考慮していない。

そんな俺は恐らく、親や教師からすれば扱いにくいと思っただろう。馬鹿は何でも「そうなんだ」と言える。だが。天才はそうではない。納得できないものを精神論で納得させようとしても無駄だ。天才と馬鹿はそこが違うと思うのだ。

天才は上下関係などもすべて、納得しない。だから。日本社会は天才が住みにくいのだ。馬鹿が日本社会では安定する。天才は安定しない。

だが、天才だけが使う側に回ることが出来る。馬鹿はすぐ一般常識とか目上の意見に納得してしまう。自らの思想に忠実でないというより、思想すら持ち合わせてないのだ。馬鹿でないと社会で安定しない日本を俺はいいと思っている。

ちなみに俺は決して馬鹿にはなりたくないと思っているが、天才になりたいとも思わない。そういう人間の配下に属したくないのだ。

八

ところで、日本の教育機関というのは従順な馬鹿を育てる機関である。学校が楽しいと思った瞬間、「ああ、私ったら、馬鹿になったのね」ということだ。学校が嫌になればなるほど、天才に近づいている。不登校になると、ほぼ天才だ。いじめられる者の多くが天才だ。だから、いじめにあって辛いときは、馬鹿がうじゃうじゃいる中で自分だけが天才だと思えばいい。ＩＱに差があると、話のつ

じつまがあわなくなる。馬鹿と天才というのはこれと同じ。格差がありすぎて、話のつじつまがあわなくなる。馬鹿はすぐに外見の欠陥を見つけて、馬鹿にし始める。だから、いじめを受けるものというのは、馬鹿多数のような外見を持ち合わせていない。ブスかイケメンかを決める指標は流行だ。要するに周囲との比較。エイリアンがイケメンという流行が発生すれば、それが土台となる。

つまり、外見とは極めて相対的なものだ。それに対して、内面は絶対的なものがいくつかあるように思う。

学校というのはいかに馬鹿になるかで楽しいか辛いかが決定される。優等生ともてはやされたいなら、馬鹿になることだ。だが、一度馬鹿になると、そこから、飛躍するのが難しくなる。馬鹿は結局馬鹿なのだ。論理的でもない言葉を納得し、思想も築けないまま、死んでいく。もはや、国民は量産型馬鹿と化している。その中で、νガンダムクラスの天才になりたければ、天才になることだ。

量産型馬鹿というのは斬られ役だ。人工知能を植えつけられて、天才の意のままに動かされる。支配された操り人形というわけだ。神に操られるならまだしも、人間に操られる人形は総じて、醜い。ひどい有様に映る。

俺は神そのもの。俺の操り人形は世界そのものなのだ。

どうして、日本が量産型馬鹿製造所なのかと言うと、まず、宿題だ。これが量産型馬鹿を造り出す制度のひとつ。もうひとつは教師の有様。

教師はまさにいい教師と悪い教師に二極化している。馬鹿教師か天才教師かという意味だ。馬鹿教師というのは、

生徒を洗脳しようとする、論理ではなく精神論で解決する、教師権力を行使する、給料泥棒。生徒をさんざん懲らしめておいて、給料を奪っていく最低な奴らだ。

天才教師というのは、

自らの思想を提示するが、それを生徒に強制しない、生徒の個人問題に一切介入しない、自由度の高い、かつ分かりやすい授業を展

開する。
俺は天才教師を数名知っている。すごい奴は本当にすごい。だが、最低な奴はまさに最低。
まず授業だけでもわかる。授業で、生徒に課題を指名する教師は馬鹿が多い。
「出席番号●●の人、前で問題を解いてください」
馬鹿のやることだ。なぜなら、生徒の中には内職をしているものもいるからだ。つまり、すでに目標が決まっていて、授業が不要なものが別の課題をその授業でやるのだ。わざわざ当てられるのでは集中できない。自らで考え行動しているものがいるのだ。それを考慮できない馬鹿教師は即刻給料を全額返して、ホームレスになることを勧める。逆に発表制にしている教師は頭がいい。
「これ分かる人、手を挙げて」
といった感じだ。そういう教師は頭がいい。生徒の自主性を尊重し、なおかつ内職の妨害をしない。天才生徒からすれば、いい教師だ。
だが、当てるまではいい。だが、問題はその先にある。当てられて、
「わかりません」と答えたときに、
「そうですか、それでは、次の人」
となる教師はまだ天才に入る。
「何でだ？」とか「予習しているのか？」とか「授業を聞いているのか？」という教師は馬鹿である。
後は授業のやり方だ。まず、教科書の内容を黒板に書く教師は頭が悪い。教科書を読めばいいだけのことだ。独自の理論をしっかりと提示できない授業しか展開できない教師は即刻ホームレスになることを勧めたい。
教師は「生徒を東大に入れてやる」とか「偏差値３０の奴を７０にしてやる」というふうな野心を持っていなければならない。
どこか忘れたが、予備校の講師を馬鹿にする馬鹿教師がいた。そ

の教師はろくに説明も出来ないくせに、わけの分からない御託を並べる。予備校の講師というのは教えるプロだ。毎日のように努力をして、独自の授業を確立してきている。だから、受験生は金を払ってでも、授業を受けにいく。それを何の努力もせず、マニュアルに沿っている給料泥棒がとやかく言える次元ではない。教師が悪ければ、生徒の発展はない。生徒は分かりやすい参考書でも手に入れて、本腰据えて取り組んだほうが有意義だ。

授業だけではない。教師は生徒に対する接し方も学ばなければならない。まず、教師は原則として、生徒間の動きには介入してはいけない。

いじめが起こる原因は馬鹿にイージー、天才にハードな環境を作っているからだ。これらを平均化させないから、いじめが起きて、自殺者が出る。

イージー・ハード、これらをすべてイージーにしながら、独自の思想を生徒が持つようにするのが、教師の役目だ。これが出来ない教師はホームレスになればいい。

イージーにするのは簡単だ。特に馬鹿が九割の日本社会では。

一部の天才を除いて、生徒を操るのは簡単だ。だが、操り状態にしたあと、それを放り投げると、生徒は爆発してしまう。

いじめをする生徒は「いじめられるほうにも問題がある」と指摘するようだ。だが、その多くは天性によるもので、各人の努力では解決しにくい。それにどうして、馬鹿にあわせるために努力をしなければいけないのか。天才は馬鹿と馴れ合うのが嫌だから、馬鹿にいじめられるのは当然だ。

そして、これは当然だが、天才はいじめには屈しない。

いじめ問題で厄介なことは馬鹿と天才の間にいるニート予備軍がいじめられると言う点だ。そして、これに気付いていないものが多すぎる。

天才はいじめられていても、馬鹿を見下しているから、問題ない。問題はその間に揺れているものだ。馬鹿でもない天才でもない。中

間の人間。この人間がいじめられるときそこにいじめの大きな問題が浮上してくる。

いじめを解決させるためには、早い話、中間を馬鹿に引きずり込むか、天才に引きずり込むかする必要がある。

天才教師はいじめを直に触ったりはしない。抗がん剤を入れまくるような治療はしない。自然治癒が可能でないかを最後まで検討する。

馬鹿教師はいじめが出たら、いじめている生徒を呼び出す。意味が無い。それで解決するのは馬鹿の馬鹿だけだ。少しでも馬鹿から浮遊していたり、沈み込んでいる奴らには無駄。逆効果。

いじめは自然治癒。これが一番いいのだ。頭のいい教師はいじめが分かっても、生徒には介入しない。まずは分析、それから、解決への筋道を立てる。いじめを直接問題にせず、日常の中で解決させる。難しいことだが、それが出来なければ教師失格なのである。

馬鹿教師は感情的な言動や精神論でしか、解決する術を知らない。論理を持たない馬鹿教師はホームレスになればいい。

論理と言っても特別な論理は必要ない。

「なぜ勉強するのか？」と生徒が聞いてきて、「そう決まっているから」と答える教師がいたが、こういう教師が馬鹿教師の典型である。そう答えられると、生徒の多くは質問を切ってしまう。「なぜそう決まったのか？」という質問を切ってしまうことで、生徒は疑問を抱いたまま、授業に臨む。

「なぜ、勉強するのか？」「その真理を追究するためさ」と答えた教師はなかなかすごい。「社会のため」はダメだ。なぜなら、「どうして社会のためになるのか？」と返される。そうすると、数学をはじめ、さまざまな学問の社会貢献の塩梅を提示しないといけなくなる。生徒が退屈してしまうだけだ。

「なぜ、学校に行かないと行けないのか？」「義務教育だ」馬鹿教師の典型である。「学校に行く真理を追究するためさ」希望に満ちた答えである。

「なぜ、人を殺してはいけないのか？」「ダメに決まっているだろ。何でそんな質問をするんだ！」馬鹿教師の典型である。「生死の調和を図るためさ」「死に対する答えが見つかっていないからさ」

A2（後書き）

ピーちゃんが来た……。

A３（前書き）

日本一まで、あと６２８６話！！

A3

一

なぜ人を殺してはいけないのか？　この問に対する答えに精神論を持ち込んでいる限りは、凶悪犯罪は収まらない。また、車や電車など死に関係するすべてを廃止しないと殺人は収まらない。

それはやや哲学要素を含みながらだが、論理的に説明することが出来る。

俺は今、部屋でボーっとしているのだが、殺人事件はまったく減らない。人の憎悪がある限り殺人はなくならない。殺人を無くすには憎悪の量を偏差値で表し、高い位置づけにいるものを治療することだが、それがなかなか出来ない。

理由は馬鹿が９９パーセントだからだ。これを覆すことが、犯罪を消滅させるための方法だ。凶悪犯罪をするのは天才か馬鹿と天才の間にいるものたちだ。多くは理由がある。金のため、憎悪を消滅させるため、などなど。頭の悪いものが、ゲームの影響を受けてというが、そんなものはない。人を殺したり、重罪を犯すのには、ゲームなど微々たる影響しかない。多くは欲と憎悪からくるものだ。欲があっても、憎悪がなければ犯罪にはならない。憎悪がすべてである。

これに気付かない頭の悪いものは規制を連呼する。けれど、車だとか電車だとか、殺人兵器は便利だからと決して、規制しない。

社会に与える打撃を考慮すれば、車を規制するなど無理だが、事実として、昔は車がなくとも、それなりに生活していたのだ。要するに環境が問題なわけだ。

社会のために殺人兵器を規制しないから、重罪は消えない。もし、明日から、すべての殺人兵器を規制すれば、ＰＣも携帯電話もすべてなくなる。

すべてが消えた後、人々はそれらを復活させようと、大きな運動を起こす。死者が出るほどになるだろう。
分かるとおり、規制は解決に繋がらない。そこで、いかにして、憎悪を駆逐するかが鍵ということになる。
神を目指す俺は人間の生死など興味はない。俺は人とあまり関わらず、生きていくことに決めている。だから、俺は人を傷つけたりはしない。殺人とかとは無縁だ。神が人間程度にそんな労力を費やしたりはしないのだ。
そんな奴ばかりなら、殺人など起きない。それから、憎悪と言ったが、あるステータスが低いうちは決して、殺人など犯さない。憎悪だけでは人は殺人を犯さない。
あるステータスとは劣等感である。劣等感とはプライドによって、基準値が変わってくる厄介な代物だ。憎悪が高くても、劣等感が低いと、自らの地位を上げて、憎悪を晴らそうとするから、人に危害を加えない。劣等感はプライド修正を受ける。プライドが高いほど、危険ラインが低くなってくる。プライドが１００だと、ラインが５０だが、プライドが２００だとラインが２５といった感じだ。
劣等感だけでは殺人はない。憎悪だけでもない。劣等感と憎悪が共にラインを超えてきたとき、人は狂気を得る。
だから、憎悪だけなら、「活力」となって、集中力が増す。憎悪は役に立つ場合が多い。だが、これに劣等感が付くと、狂気がついてくる。劣等感がないと、自らの出世で解決しようとするのが、劣等感が募ると、「俺にはそんな力はない。だったら」となるわけだ。憎悪だけなら、活力なのだから、劣等感をいかに抱かせないかが問題になる。劣等感を溜める言葉を列挙すると、
「お前には才能がないんだよ」「頑張ったって無理だ」「お前はこれが限界だ」と言った言葉だ。何かをあきらめることは大切だ。しかし、憎悪の強いものに、このような言葉を連呼すると、一辺に劣等感が上がって、狂気を覚える。
信じられないことに、教育機関で、当たり前に使われているらし

い。憎悪が低い人にだったら、言っても、構わない。だが、プライドが高く、憎悪が強いものは、その些細な言葉が一気に狂気を作り上げることになってしまう。

ニートは憎悪も劣等感も溜まりやすい。それにプライドも高い。だが、引きこもりのステータスが行動を抑制している場合がある。そういう場合、精神病になる可能性が高い。

ちなみに、これらは厳正に論理的ではない。ただ、これらの多くは当たっていると思う。人の劣等感なんて見分けがつかない。

「お前には才能がないんだよ」「頑張ったって無理だ」「お前はこれが限界だ」などと頭の悪い発言を軽い気持ちで言っている限りは、劣等感は溜まる一方だ。

「お前に才能があるかないかは知ることが出来ない。やるかやらないかはお前次第。ただし、リスクがあるのは事実だ。決して後悔しないようによく考えたまえ」「頑張ったって無理な奴はいる。だが、やり方次第では可能性はある。問題は無理だったときの答えを受け止めることが出来るかどうかだ」「お前はこれが限界だが、限界はいくらでも上げることは出来る。どうするんだ？」言い方次第では、何とかなる。論理的であるかどうかが重要なのだ。馬鹿が相手なら、精神論でもやっとけばいいが、頭が少しいいと、精神論など、何の意味もない。

二

道徳が備わっていれば、ニートにならないわけではない。というのは、道徳を思考すると、答えがないからだ。ニートを肯定する道徳を考えることも出来るし、否定の道徳もある。だから、まず、道徳に数学的定義を与えることが必要不可欠だ。人間の配下としての道徳を絶対的に作り上げる。これが出来ていないから、法律を無視して、事件を起こすものが増える。だが、頭のいい者には不可能だ。なぜなら、頭のいい者は道徳が絶対的でないことに気付くからだ。

だが、道徳で憎悪や劣等感はコントロールできないから、やはり周囲の環境がすべてを決めることになる。馬鹿に絶対的道徳を与えて、やや頭のいいものにちょっかいを出さないようになれば、劣等感も憎悪も減らすことは出来る。

だが、絶対的でない道徳を数学的に定義することは不可能に近い。だが、出来ることはある。それが定理公式を覚えさせることだ。本を次のように書くわけである。

『乞食がいる場合、あなたの持ち金をXとして、X／１００００を乞食に与える。ただし、金銭はすべて切り上げる。また、正確な金額を払えないのなら、支払うことが出来、支払い金額に最も近い自然数だけを支払う。（１－１）

いじめの行為を行ったものはその保護者が、罰金３６０万円～７２０万円を国に支払い、選挙権を剥奪される。いじめの該当者が大きな障害を得た場合は１５００万円～３０００万円を国に支払い、自殺の場合は、さらに懲役１８年から３６年に処される。（１－２）

万引きは見つかり次第、その保護者が罰金７５万円～１５０万円を国に支払う。（１－３）

器物破損は破損費用の６倍を国に支払う。（１－４）』

こうすれば、明確である。現在では、いじめをしても注意で終わるし、ばれないから、いくらでもいじめが起こる。未成年が相手でも、数学的に決めておかなければならない。

三

これに関係することなのだけれども、犯罪に起因するとして、何かを規制する頭の悪いものが非常に多い。論理と理論の観点から考える。例えば、殺人は憎悪と劣等感が共に、ラインを超えたときに起こりうるもので、何かのゲームなどの影響はほとんどない。あったとしても、もはや狂気を持っている人物であり、それらはゲームの影響がなくても殺人を犯していた。要するに、架空のものがいか

に影響力が弱いかを考えることだ。とはいえ、これらは理論の観点からは絶対に評価できない。論理のしかも不十分なもので判断するほかない。

だいたい、犯罪というのは現実に向けられる憎悪や劣等感がだいたいを占めている。もし、占めていないとすると、二次元の創作物はしているが、現実にはほとんど関わっていない人と、二次元の創作物はしていないが、現実に関わっている人との犯罪件数を比較して、後者が少ないはずである。また、時代と共に、創作物は進歩したが、それ以外のものも進歩した。だから、それ以外の進歩が影響を及ぼしている可能性のほうが高いといえる。故に、規制は別の影響が強い場合を考慮出来ていないため、頭の悪い方法である。

性犯罪の増加からポルノ法を改善するらしい。性犯罪の増加が、創作物の進歩だけではなく、女性の魅力の進歩とか、ファッションの進歩とか、そういったものを考慮せず、二つの場合分けをしないで、創作物進歩だけに原因があるとするのは、解答として不十分である。不十分なものを正当だという政治は頭の悪い政治である。そしてそれを支持するものも頭が悪い。

現在の社会は馬鹿と天才で構成されているので、馬鹿が勝って仕方がないが、論理的におかしいものを許しておくいい加減な政治はこの問題に関わらず、他の犯罪増加にも繋がる可能性があるし、色々な点で不安が大きくなる。

創作物でワニに襲われるシーンを見ても怖くはない。実体験して初めて、恐怖がわかる。故に、創作物より、現実の体験に影響力が強いのは明らかである。。

四

俺の思想のおかしさはよく分かったと思う。このような思想を持っているがために、俺は社会不適合者なのだ。普通の人はやや頭が悪いから、何かに完全な論理を当てはめようとしない。深くは考え

ないし、特異な考えはもたない。
俺と会話をすると疲れるというのが、家の者の評価だ。だが、俺はやや頭のいいものとはつじつまが合う。俺のＩＱは平均よりかなり高いので、低いものとは会話が出来ない。合わせるつもりもない。神の配下に身を置いている俺は人間の配下にいるものに合わせたりはしない。会話でつじつまが合わないということは話の次元が違うということ。
だいたいの人はある情報に対して、分析という手段を取らない。分析をせずに、会話を始めるから、
「昨日、ドラマ見た？」「見た見た」「悲しかったよね」「チョー泣いた」という会話が普通に出来るし、会話が進む。俺の場合は、第一文で終わる。
「昨日、ドラマ見た？」「昨日だけで、複数のドラマがやっている。どのドラマか明確に示してくれなければ、その質問に答えることが出来ない」
ここで、大抵、終わってしまうだろう。たかだか、世間話に、どんだけ突っ込んでいるのだと言われる。だが、もう癖になってしまった。そんな俺が人間の配下で生きるのはもう不可能なのだ。流れを汲み取れないということで、ＫＹなどと言われることもある。
ニートの多くは、同じく会話のつじつまを合わせることが出来なかったものだ。言えば、被害者である。それなのに、罵られる側に立つのだ。被害の上に被害では、もはや精神をおかしくしてしまっても仕方が無い。それに気付く労働者などいない。馬鹿は何かを気付くことが出来ない。
格差が激しいと、やはり仲間を探すのも難しいし、環境についていけないものが多数出てくる。これらを改善しないと、ニートは減らない。そして、思想を完成に近づけた者は、何をしてもニートを脱出しない。脱出する気もないだろう。

五

俺は自殺を考えたことがあった。今は自殺をしようとも思わない。俺はまず死を考えるに当たって、生物を極めた。やはりまずは科学である。科学の段階から死を思考する。だが、現時点の生物学では、死の定義が生命活動を行っていないことであり、そこに物理学を当てはめても、やはり理解出来るものではなかった。死後の世界があるか否か。それは分からない。というのは、生が思考・想像を支えているのであって、死によって、その機能を奪うのであれば、精神世界は消滅することになる。ところが、概念として、精神世界は確実に存在する。ということは生死に関わらず、精神世界は存在する。存在するということは、それを再思考出来るということである。

生死はあくまで、相対的、つまり自ら見て、生であるから、生のものが見え、死体、つまり死を見ることが出来るのである。死の観点に立てば、死や生の見方がまったくことなるものになる可能性がある。幽霊は実在するが、それらが生死といかに密接かが重要だ。だが、やはり、死の後、肉体は確実に生の世界に残っている。問題は、人間が肉体だけで成り立っているか、精神を切り離しているかであるが、肉体だけであるなら、死の後、脳から、情報を取り出すことが可能であり、死体を生き返らせることも不可能ではない。なぜなら、死はあくまで、機能の停止であるから、機能を復活させることが出来れば、再び動き出すはずである。だが、実際は、死を生に切り替えることに成功出来ていない。（死から帰ってきた人はいるが、明確な死体から生に戻ったものはたぶんいない。オカルトは除いてであるが）

これは物理学的にどういうかはわからないが、死と同時に精神が切り離されることを意味しているのではないだろうか。精神は不可視で、実は幽霊のことなのかもしれない。だが、精神を思考するというのは、いかにもファンタジーである。

精神が切り離された場合、その精神は死後の世界の自分となるわけだ。だが、肉体が無い限り、思考出来るかは疑問である。意志は

あるが、記憶出来ない状態かもしれない。とはいえ、死は死んでみなければ分からない。単に機能の停止というのであれば、復活というのが可能であることを意味し、精神が切り離されるとすれば、復活は不可能である。そして、後者の場合、精神は死後の世界の自分ということになる。肉体が切り離されて、精神はどうなるのか。それはやはり逝ってみなければ分からない。

死は、俺にとってはひとつの楽しみであるが、恐怖でもある。ワクワクはしても、やはり生を実感できる限りは実感していたいと思う。死は怖い。それに生にも重要なものが溢れているから、すべてを手に入れるまでは死にたくない。機能の停止であるなら、けっこう救われる。なぜなら、それでその人は永久欠番だからだ。だが、しかし、アイデンティティがあるように、精神は区別できるものであり、肉体とは別であると思う。

どうして、自分の肉体を自分が動かせるのか。どうして、相手の体を動かせないのか。精神が存在して、それが自らの肉体に宿っているからではないか。これらはいずれ科学が解き明かすかもしれないが、肉体を選択的に分別しているところを見ると、肉体以外に何らかの作用があるのは言うまでも無い。自分を失うということは、分別から自らの肉体すら失うことである。ということは、精神の存在率は高い。

自殺とは自らの意志で肉体を捨てることだ。そして、精神があるときとないときを場合分けすると、あるときは、死の世界となり、精神が自分になる。何となく神秘的である。

理論的に言って、供養とか、自殺は成仏できないとかはおかしい。どんな死を遂げても、肉体が機能を失う点では同じだ。それに死体は機能を失ったもので、精神すら、もはや存在しない。それを焼いたからいいというのはおかしなことである。それに自殺ならダメだというシステムは少なくとも、科学の点からはおかしい。

自殺であろうと、何であろうと、肉体を失うのは同じ。それならば、人や病魔に殺されるぐらいなら、自らの意志（精神が決めたこ

と）で死んだほうがいいと言う者もけっこういる。ちょっと、論理から背を向けた話になるが、

「自らの精神によって死を遂げた場合と、精神が拒絶を以って、死を告げた場合、精神に意志があるとすれば、前者は肉体から抜け出したいと考えるはずだ。そして、後者は抜け出したいと考えるはずだ。すると、後者の死は精神が肉体に残ろうとするのではないだろうか。逆に前者は肉体から離れたいと思うのではないか」

ファンタジーな話だが、死が機能の停止ではなく、精神の分離であるとすれば、これらは面白い題材でもある。

俺は死について色々と考えた。死は怖い。それは俺も同じだ。そのうえで、

「あくまで死が肉体の機能の停止の意味だけでなく、精神の分離の意味があるとして、自殺かそれ以外の死かで精神の行方が決まる」

と考えた。自殺のとき、死に何かを求めていくわけである。つまり、精神が生より死を望んだ死だ。この場合、死に「生まれ変わりたい」と願いを託した場合、精神は自分の理想的な肉体に宿ろうと考えるかもしれない。とはいえ、生きた人間には宿れない。精神は肉体を選択的に決めている。ということは、まだ精神を持っていない、例えば、膣の中で生まれた新しい命に宿るかもしれない。だが、精神には意志はあっても、記憶力も情報もないから、以前の世界にのことは知らない。そして、精神が宿った命が新しい自分になり、自らのアイデンティティとなる。その場合、命は連続的である。

逆に、自殺でないとき、自分はもっと生きたいと思うはずだ。死んでからは情報がないから思考できない。ただ、生きたいと思う意志だけが残り、もしかしたら、機能を失った肉体にずっと居座るのではないか。そして、人に宿るということを忘れはしないか。しかし、これはまずない。というのは、生まれてくる赤ん坊の数に、生まれ変わりたいと思う人の死が綺麗に数字が合っていなければならないが、そんなことはないだろう。やはり精神は選択的に、自動的に肉体に宿ると考えるのが自然だ。

このようなことも考慮して、俺が下したひとつの考えは、
「どのような死に関わらず、精神は選択的、自動的に肉体に宿り、生命が連続する」
というものである。つまり、自殺だろうが、他の死だろうが、同じ赤ん坊になる。どうせ同じなら、生が長いほうがいいに決まっている。死に急ぐ必要はないということになる。
ここで、やはり考えるのが、精神に情報を持たせて、自由に操作出来ないかというものである。つまり、生きている間に何らかの仕掛けを施して、死んだときに精神をうまく操る。そうすれば、精神のままの自分を感じることが出来るかもしれない。そして、そういうものが幽霊なのかもしれない。
話がファンタジーっぽくなってしまったが、精神が存在する限り、否定できないことである。

六

自殺するかしないか、これは精神状態で決定されるものである。死の恐怖を打ち破る劣等感ないし、怒り・悲しみは恐るべきものだと思う。
自殺せずに生きていくためには、死を易化して、いつでも死ねるから、もう一度だけ頑張ってみようと考える（劣等感を抑えることに同義）か、自殺に対して、圧倒的恐怖を植えつけるかの二点である。他にもあるだろうが、とりあえず二つだ。
前者の場合だと、劣等感が抑えられて、活力が上がってくるが、そう思えるまでが難しい。完全自殺マニュアルを手に入れるか、新しい自殺の方法を考えるかする必要がある。後者の場合、未遂で終われば、いいわけだが、これは精神を破壊する行為でもあるので、やはり前者のほうがいい。自殺は楽であるとして、自殺をする前に、頑張るというのが基本になる。これが最も重要だ。これは繰り返し使える。例えば、自殺は楽だからと、頑張った場合、かなりの挫折

にも耐えられる。
とは言え、自殺を考えるほど、思考力が高いものはそういないだろう。自殺を考えるには思考力がいる。または劣等感が恐るべき数字に達するか、精神病か。悲しみか。怒りで自殺はまずないだろう。
自殺に思考力がいるというのは、死に対して、思考しなければ、自殺を試みようとは思わない。だが、自殺を思考対象に上げるためには、死に絶対的論理を持たないことを見抜いている必要がある。馬鹿は自殺はダメだと絶対的な大人の主張に素直に従っているから、思考しない。だから、思考力がいるのだが、死を考えると、一度、死にたくなくなる。つまり、1度目の自殺願望はその恐怖であっという間になくなる。怖いのが二回目以降だ。それからは恐怖のフィルターを抜けてくる。
俺は自殺を否定しないが、可能な限り躊躇するべきだと思っている。まあ、これは死に関わらず、精神への作用は同じという考えに基づいているからであって、それが、正しいかどうかは分からない。最終的には各人の判断に任されるだろう。

七

自殺願望が圧倒的レベルまで上がってきたら、まず冷静になって、高い思考力を発揮するべきだ。ニートだと、しょっちゅう、高いレベルまで上がってくるから、そのたびに、死を否定する論拠を用意して、防ぎ留めたい。また、辛さを感じたときは自殺願望が上がりやすい。このときは論理的な思考を心がけて、辛さを噛み砕くほうがいい。
例えば、親と喧嘩したとき、
「まず程度のレベルではこちらが上である。そして、程度の差による軋轢は普遍的に起こりうるものである。この喧嘩は必然的に起こるものであった」とでも考えて、辛さを感情のレベルで感じないことだ。

だが、真の辛さには論理的破綻がほとんどない。辛さを紛らわせる論理を得るためには恐るべき、思考力と思い込みの力が必要になる。

俺はこういった場合に備えるフリーソフトをダウンロードしておく必要があると思う。抽象的な言い回しだが、フリーソフトというのは能力のことで、ダウンロードは身に付けることだ。

フリーソフトは何も教養などだけではない。例えば、憎悪を純粋な活力に変えるフリーソフト、劣等感を緩和させるフリーソフト、辛さを半減させるフリーソフト。こういったものもすべて能力だ。これらは一朝一夕では身に付かない。日ごろから思考し、想像し、徐々に身についていくものだし、狙って身に付けるものではない。

俺は憎悪を活力に変えるフリーソフトのダウンロードに成功した。とはいえ、精度は高くない。いつでも出来ないし、出来ても、一回あたり、1パーセントを活力に変えられる程度だ。だが、高度なソフトなら、例えば、不幸を幸せに切り替えることも出来るかもしれない。能天気な人間はこういうソフトを持っている可能性がある。だが、性格は変えられない。性格とは、俺が考えるに、他人が決めるものだと思っている。自分にとっての性格というものはいい数字が出る。小説も同じだ。自らの感性で最も良きものが自分の作品で、他の作品を凌駕している。性格も自らから見ると、いい評価が出る。だが、性格とは他人と接して初めて、効果が出る。だから、他人から見て、初めて、性格の良し割るしが意味を持つ。だが、これは例外もある。それが、自らの内部に存在する憎悪や劣等感の見方である。ここでは性格が自らに適応される。ここでは自らの性格を良きものとして捕らえておくと、憎悪や劣等感を抑えることが出来る。性格によって、手に入るフリーソフトは種類が違う。自分特有の性格から、特有のソフトを作ってしまいたい。

ソフトは馬鹿にはなかなか作れないし、馬鹿は作る必要はない。馬鹿は資格を取って、それをソフトにすればいい。

ソフトをダウンロードするには思考力が必要だ。

「いかに胸に秘めたる憎悪を発散させるか。自分で自分を励ますにはどうすればいいか」

難しい内容に答えを与えなければならない。しかし、これらは自らに暗示するものであり、客観的論理とは違う。あくまで主観的論理。自らに対してのみ、筋道が通っていればいい。それだけで、憎悪を駆逐することは可能だ。ただ、プライドが高いと、自らを暗示させることが難しくなる。高度なソフトが必要になり、ソフトをダウンロードするまでは憎悪と劣等感に耐えなければならない。ちなみにプライドは意図的に下げられない。

プライドは、決して、悪いものではない。低いと馬鹿のまま抜け出せない。（社会では十分生きていけるが）ただ、高すぎると、上昇志向は強くなるが、憎悪も劣等感も高くなりすぎる。それは危険なことである。

八

俺が高校のとき、俺はよく周囲を観察していた。人間の特性を見出すためには、ありのままを観察することが重要だが、俺はありのままをはっきりと観察することが出来た。

人間の性質は型にはめられないが、かなり強引に分類出来ると思う。俺が一年生のときは、ずっと椅子に座って、会話を聞き、友人関係を見て、独りで楽しんでいた。分かったことがたくさんある。例えば、四人グループだと、例外なく、一人はただの数合わせで、他の三人から、明らかに浮いているし、八人グループになると、リーダーが存在するようになっているし、二人のところは、中睦まじく話をしている。なお、三人のところは、うまく言っているところと、明らかに浮いている人がいるところに分かれた。

俺が思うに、理想的なのはやはり二人グループか、調和の取れた三人グループだと思う。ちなみにアニメを見ていても、二人だと、調和しているが、三人だと調和が取りにくくなり、四人になると、

必ず、一人、二人浮く。これは現実でも同じだ。
二人グループは四つほどあった。他のクラスからやってきて、仲良くしていた女子グループがいたのだが、その人たちは調和が取れていた。ある日、その他のクラスの人が欠席したときがあった。そのとき、その人はある3人組に入っていった。だが、その人は3人からは明らかに浮いていた。そして、そのクラスの人が戻ると、もとの二人に戻った。
つまり、対象の女子は仲が良かったのは、他のクラスの女子であって、他の生徒とは調和できなかった。だが、その二人は仲がよく、ある日、どんな会話をしているのか、聞きたくなった。いきなり聞く勇気などない。俺は昼休みのとき、黒板消し係りだったので、黒板を消したのだが、そのときに会話を少しだけ聞いた。すると、
「飼っていた犬がトカゲの死体に噛み付いていた」というようなことが聞こえてきて、「犬って肉食動物だっけ？」と聞き返していた。噴出しそうになった。俺はもっとすごいことを話していると予想していた。俺でも付いていけそうな話題だったので、
「そうか、別に特別な会話をしているわけではないのか」と納得して、少しだけ、その二人に興味を持ったが、結局、一度も話すことはなかった。その二人のルックスはたぶん、普通ぐらいだ。
三人グループの女子は大きな声で笑う女子がいるところで、そこは調和が取れた三人グループだった。何というか、全員が話題についていっていたようだったし、携帯電話をいじりまくっていた。
雰囲気的にも、俺の苦手なタイプなので、特別興味はもたなかった。
そういえば、ある二人グループの女子の一人は容姿が優れていて、雑誌のモデルなどを遥か凌駕するものだった。その二人の会話はうまく聞き取れなかったが、けっこう真面目な生徒で、好感が持てた。話は一度もしなかったが。
八人グループはクラスの代表的グループだった。男のグループだ。そこでは、代表的なイケメンが引っ張っている集団だった。よく女

子が入り込んでいた。紙飛行機を作って飛ばしたりしていたが、俺を馬鹿にする連中が数名いたから、興味は持たなかった。

四人グループというと、2年生のときに面白いグループがいた。そのうち三人は仲がいいのだが、一人がひどく浮いている。俺は一人だったが、あれは一人以上に悲しい感じだった。ちなみにその人、別のクラスに仲のいい人がいたらしく、二学期以降は別のクラスに移動するようになり、四人グループは三人グループになって、問題なく、調和するようになっていた。2年生のときは、女子にいい生徒はいなかった。誰もが、いかにも自分の嫌いなタイプだった。

三年生のときは、昼食を外で食べるようにした（雨の日も雪の日も）から、食事風景はわからないが、すごく好感のもてる女子が二人いた。会話も何度かした。恐らく絶滅に近いタイプの女子だと思う。本来、女子というのは付き合いにくいものだ。孤独な男子生徒と会話をする女子など、いるはずがない。ゲームの世界ではそれが普通なのだが……。要するに、ゲームのようにはことが運ばないのだが、その二人は実に大人しくて、話し方も女の子っぽくて、丁寧で、他の女子とは桁が違う。

再現してみると、これは数学の自主学習のときなのだが……。

自習で、教室が騒がしくなっていた。遊びまわる生徒もたくさんいて、教師が怒鳴りにきたほどだった。俺は黙々とプリントを進めていた。対数関数の分野だった。詳しく覚えている。対数関数を平行移動させる問題と2次関数に置きかえる問題だった。けっこう簡単だったが、最後の問題が難しめだった。例の女子二人組は向かい合って、プリントをしているのだが、分からなくなったらしく、誰かに訊こうとした。だが、その二人は明らかに他の女子と種族が違う。だから、女子に訊けそうな人がいなかった。異性となると、それだけで、聞きづらい。だが、なぜか、俺のところに二人はやってきて、

「一緒にしませんか？」と訊いてきた。俺は別の人に言ったものかと思っていたが、どうも俺の様子だった。俺は「いいよ」とはっき

りしない声で言ったような気がする。
二人は椅子を持ってきて、なぜか、俺の机にやってきた。なぜ、俺なのか理解できなかったが、周囲の男子は全員、騒いでいた。静かな俺のところに来たとすると、納得できるのだが、今時、こんな女子が生き残っていることに感心した。
まず、平行移動する際の変形について尋ねられたのだが、俺はどもってしまって、うまく答えることが出来なかった。だが、少女二人は解答を埋めていった。最後の難しい問題は整数問題っぽい奴（常用対数を使う問題だった。）だったので、けっこうてこずっていた。だが、マスターオブ整数で勉強していた俺は、数学にけっこう強く、その問題を解いていたんだ。
「私、数学全然出来ないんだよ」と可愛い声で言ってくるものだから、
「女の子だから……」仕方ないとまでつなげることが出来ず、終わっていると、
「でも、女の子はお料理とか得意なんだよ」とまた可愛い声で言われた。どもっていなかったら、意外と会話が続いたかもしれないが、緊張とどもりが重なって、これで終了した。もはや、これが三次元に対して、会話出来る俺の限度だった。ちなみに、この年代を終えると、もう女の子と会話をすることはなかった。これからももうないだろうから、大切にしておこう。
高校生活と言うと、特によかった思い出は見当たらないが、何となく、一番重要な時期だったと思う。この高校生活があったからこそ、今がある。感謝している。

九

六月に入ったときだった。ちょうど、ニートになって、三年が経過した。三年も経つとニートとしての自覚も芽生え、それなりの活動を精力的に行うようになっていた。

当時、インターネットサービスに不登校や引きこもりの人々を対象にしたものがあった。その場所は精神科医の先生が作ったものらしく、プロフィールが載っていた。E先生というのだが、大阪医科大学を卒業して、それ以来、二十年以上も精神科医をされていた。カウンセリングの教室も受け持っておられ、講演会もすでに各地で四回もされている。

この場所の掲示板で、俺は数ヶ月も前から書き込みをしている。俺のやっていたことは人に勇気の出る言葉を送ったりといった、人を立ち直らせるための記述を残すことではなく、専ら、頭の悪い連中に論理的な記述を残すことだった。

頭の悪い連中がこういった場所に迷い込んでくることは、掲示板利用者のためにならないと思い、二度とやって来ないような記述を残し続けた。忍耐力のあるものはそれでもやってくるのだが。

一番多いのが、解決策を提示できない発言だ。『お前らは甘えてんだよ』と言うものがけっこう多かった。頭が悪いうちは論理を知らないから、それに対する解決策を提示できず、誰もが知っている問題点をただ示していく。

それが、一方的で不適切な場合が多いから、俺は論理で返したわけだ。大抵は『問題に対する自らの解決策を書かなければ、問題は未解決のままである』で終わるが、『解決も糞もねえよ。外に出ればいいだけのことだろ』と言ってくるわけだ。『外に出る方法を知らないから引きこもりである。外に出ることは出来ないというのは常人では想像出来ないものであるから、想像力が必要不可欠である。その想像力がなければ、客観的に適切な解を示すことが出来ない。解を見出してから、書き込むのが適切である』などと述べている。

こういう問題を常人が思考しようと思うと、恐るべき想像力が必要だ。外に出られないとか学校に行けないというのは理解が難しいからだ。外に出たくない、学校に行きたくないであれば、楽に想像は出来るだろうが、それとは全く異質のところにあるのが、外に出られないとか学校に行けないというものである。

この問題を思考出来る能力を持つ常人は、全人類でも数パーセントに留まるだろう。やはり経験者で、その想像を尋常に扱えるものがその問題に向かわなければならない。

俺は経験者で、学校に行けない、外に出られない心理を知っているし、その状態から現れる防衛能力や思考、感性なども幅広く知っている。だから、程度の高いアドバイスを与えることが出来る。だが、程度が高いだけにその人物の鋭い調査が必要になる。

頭が悪いものは、すべての引きこもりを同じ場で統一して考えようとする。頭が悪すぎると、問題をひとまとめにして、解決策を提示していくから、それが当てはまる者以外には効果がないし、策はそれぞれ、●●のとき、といった感じに複雑な場合分けが必要である。状態を鋭く観察しなければならない。これほど難易度の高い問題をたった一通りで解決しようとするなんて、浅はかである。もちろん、たったひとつの言葉で治るものもいる。だが、治らないものが多い。だから『現在はそう言った人が何万人もいる』

たったひとつの言葉で治るのは思考力の程度が低かったり、後一押しで治る状態にいる場合で、深層部にいるものにはほぼ効果がない。

六月に入って、俺はアドバイスをする側に回って、色々と解決策を示し始めた。だが、これを直接本人に伝えるよりかは、その本人に最も密接な人間に見て欲しいという要求から、アドバイスはすべて本人でないものが見ることとして書いた。

それを書き始めて、一ヶ月が経つと、E先生からメールで『興味を持ったから、個人的に話が聞きたい』ということを言われた。『メールであれば、たいていなことに答えることが出来る』と返すと、『メールでも構わない。返事を書ける機会が限られているから、間隔があくかもしれない』『それはこちらも同じだから、問題はない』と返した。それからE先生は俺個人のことを聞いてきた。俺は自分が引きこもりであることを述べた。その後、『僕の教室に来てみないか。特別公演として』と来た。『外に出るのは気が引ける』『無

理にとは言わないよ』そういうわけで、E先生が引きこもりや不登校の生徒を対象にした教室で働いていることを知った。聞くと、『不登校の小学生を受け持っている』ということだった。範囲が小学生というところに難しさを覚えた。『苦労していると推測する』と言うと、『なかなか復帰に向かわない』というようなことを言っていた。当然だが、そう言った教室に来るものは、『軽度の不登校』なわけである。重度であれば、その教室にすら行けない。だから、治しやすいとは言える。だが、最後の一歩に頓挫してしまうことは自然なことだ。つまり、幻想と現実の境界は紙一重だが、環境を大きく変えるものだから、越えるのが難しいのだ。

俺はその教室の生徒のことが知りたかったから、『子供の分析は完全に行き届いているのか』と聞くと、『プライバシーの問題だから、書けないけど、教室に来てくれるのなら、ゆっくり話し合いたいね』ということだった。

何となく興味は持ったが、やはり外に出るのは極めて難しいことだった。俺はしばらくメールでやり取りをしたのだが、E先生はかなり優秀だと思った。

観察やその場の咄嗟の判断が特に優秀だと思った。『教室には、いつも浮いた子がいる』というのだが、頭が悪いものは『何とか輪に入れるようにする』という。俺は『その対象の状態によって、複数の場合分けが生じる。輪に対する拒絶の度合いが重要で、極めて高い場合、さらにそこで、その対象のプライドを思考し、場合分けが生じる。場合分けが生じるから対象の観察なくして、解決は不可能。そこで、俺が課題にしているのが、分析が終わるまでの時間をどう処理するか』であった。E先生は『孤立している子が一人の場合、先生を二人用意して、一方の先生を孤立させるのだ』という。なるほどと最初は思ったが、典型的な心理学の規則にあるものだ。仲間がいれば、人間は安心感を得る。忘れ物をしても、忘れ物をした仲間がいると、安心し、忘れた人の数に比例して、安心感が増す。

これは頭が悪くても、理解できるものであるが、適切な応用は極

めて難しいのである。先生を二人にして、一人はずっと隅で座っていてもらうというのだ。その先生はいかなる生徒とも会話をせずにいてもらう。

『その方法で実際、心を開いてくれた子がいた』と言っていた。孤立している生徒が二人だと、『その二人を何とか親しくしたいが、これが難しい』とE先生は言っていた。

こういったことを話していたのだが、俺がH県に在住していることを話したのがきっかけで、『N市に行くんだ』とE先生が言ってきたので、『自宅の近くであれば、会うことは不可能でないかもしれない。だが、会うと失望させる可能性は高い』と述べた。

『それはこっちのほうかもしれない』と笑いマークが最後についていたので、『失望を前提にしよう』として、会うことになったわけだ。

俺は正直かなり躊躇っていた。メールで『もしかしたら、行かないかもしれない』と言った。『無理はしなくてもいい』と言うふうに返ってきた。俺は犬を連れて、夕方、川に出かけたのだが、白い車が止まっていて、メール通りだったので、俺は一旦家に帰った。会うことを躊躇うこの意味を疑うものも多いだろう。だが、引きこもりにとって、「よう、来たぜ。酒でも飲んで語り合おうぜ」などと言えるわけがなく、俺は帰ってしまった。

『程度を逸脱するほどの恐怖を感じた』と言うと、『仕方がない』と言って、結局、E先生は帰っていってしまった。

その後もメールを続けていたが、7月と8月にかけて、インターネットを繋ぐ回線が調子を落とし、電話を切り替えるために使えなくなった。

10月に入って、初めて、見たのだけれど、たくさんのメールが来ていた。『電話線の不備で、最後にメールをしてから、メールを見ることが出来なかった』と述べると、『納得した』と返ってきた。

掲示板のほうにはほとんど行っていなかったのだが、そこで解決策を披露しても、多くは無駄に終わるから、俺はしなかった。子供

の深層心理を得る必要があるから、徹底的にその対象者と向き合わなければならないからだ。

俺はE先生が言っていた教室の件について、『興味深いから訪れてみたいが、さすがに遠すぎる』とメールを出した。『N市にもひとつあるんだけどねえ』と残念がっていた。とは言え、行けない場所ではない。ただ、引きこもりが電車に乗るのは難しいことだ。人の視線におけるダメージは極めて高い。

俺はしばらくメールのやり取りだけにした。『学校の先生が嫌いという子供が多い』とメールが来た。それについて、『思考力や想像力がない先生の場合、無意識に生徒を傷つけることもあるし、平等でも、不平等になってしまう事実を知っていないことが多い』と答えた。『特に厳しすぎる先生は苦手とよく聞く』『厳しいをクラスに対して、絶対的にではなく、相対的に扱えないと、そういう先生は生徒を傷つけてしまう』『この子にはこう、あの子にはこうと言った感じだね』E先生も相対的な考えには積極的で、生徒一人一人にイメージを作っているそうだった。

『ますます興味深いが、外に出ることは出来そうにない』と俺はメールを送るようになっていた。

俺の築いた論理を使えば、ほとんどの者を社会復帰に導くことは出来るという自信はあるが、俺は社会復帰を目指すために、対象に『矯正』という言い方はしたくない。というのは、俺自身、『矯正』されれば社会復帰は可能だ。俺の場合、『矯正』を意思で拒んだわけだ。だから、『社会復帰のすべは知っているが、それが対象の幸せに結びつくかは疑問である』と思っている。だから、『社会復帰をするときに、普通の子と同じになるように』とはしたくないと思っている。というのは、社会的なことにおいては、不登校の子供<登校している子供が明確に現れるが、本来、人間を不等号で示すのは不可能に近い。不等号をつける場合、必ず、基準が必要で、例えば、テストの得点でA君<B君と言った感じだ。

頭の悪い教師が多く、教師はいい点を取った子を前に出して、『

立派な子だ』というらしい。しかし、それは点数において、『程度が高い』だけであって、『人間としては他者と同じである』これを分けられないことで、不登校になる生徒の中には『褒められない自分は優秀でない』と思うらしい。だが、それは『限られた条件下で優秀でないだけであって、環境が変わると、優秀になる可能性は高い』坂本竜馬の『人間、好きな道によって世界を切り拓いていく』という言葉はこの条件下の自由化に則っている可能性はある。

そういうわけで、俺は『矯正』によって、社会復帰はしたくない。『ある条件下で、もとから標準のものと、努力をして標準のものでは、もとから標準のもののほうが有利である』だから、『矯正』はハンディを上乗せするものなのだ。『社会の犬とするなら、矯正は適切だが、それが対象にとって、良いことかはわからない。最終的には対象が思考力を発揮するべき場面を作らなければならない。そして、思考が不可能であれば、受身的な生き方になってしまう』

考え始めると、『適切な方法』は相対的にその適切な度合いが変わってくる。だから、これらをひとつの物差しで考えるは、『頭の悪いこと』である。

何かためになることが書いてある本の多くは『絶対的ものさしより、主張している』感じがするものでいっぱいである。売れているものもあるが、『絶対的なものでは考えていると、まるでその読者がそれを絶対的に考えてしまい、思考力そのものを奪うことになる』だがそれが意図的なのかもしれない。『思考力を低くして、社会の絶対的な規則に従い、疑うことなく暮らしていけると、ニートも引きこもりもかなり減るだろうから』

だから、世に出回っている本は社会的である。だから、それが『駄目な本』であるわけではない。だが、『相対的であり、それらを考慮させる本』を優秀と見る俺の考えに反しているのだ。

俺は不登校や引きこもりについて書かれた本を多く知っていて、それらはそれでいいものだとは思うが、『相対的なものを絶対的に述べている本』を俺は『頭の悪いものが書いた本』と認識してしま

う。そして、そのようなものにとって、そういう本は『不快感を与え、効果がないだけでなく、怒りを覚えることもある』そういう人は少ないとは言えるが。

俺はE先生に『普通の子と同じになれるように矯正はしたくない』と述べた。E先生にはその意味が分かったらしく、『矯正しても、また転ぶだろうしね。七転八倒を肯定するにはある程度恐怖心を取り除かないといけないと思う。不登校の生徒は嫌でも、次、不登校になれないと思うから。転べない』『その通りだと思う』と返した。

転んでも立ち上がればいいと頭がやや悪いものはよく言うのだけれど、『立ち上がる活力が、転んだとき、ある基準より下がると立てない。転んでも『立て』が逆効果に現れる状態も存在するから、場合分けによって対処しなければならない』と考えている。思考するときりがないが、何度でも立ち上がれるのは『活力があるもの』あるいは『あと少しの活力で立てるもの』だけで、活力が著しく低い状態では『転んでも立つんだ』と言っても、効果はないどころか、逆に現れることもあるわけだ。せめて、『転んでも立ち上がればいいだけだよ』のほうがいいだろう。

とはいえ、活力が損なわれたものに必要なのは『治療』であり、『立つ』ことではない。治療というのは『優しさ』なのだが、頭の悪いものが活力の測定もせずに『本当の優しさとは厳しさなのだ。立て、立て』と小学生低学年でも論理的に破綻しているところを見抜ける馬鹿な発言をしまくっている。

はっきり言って、怖いほど考慮の出来ない教師が多いから『不登校の生徒』『自殺する生徒』などを食い止められない。止めることは至難の業かもしれないが、せめて姿勢を見せて欲しいものだと思う。『教師になってみれば分かる。忙しくて手が回らない』と言うものがいれば、『教師を辞めてホームレスになることを薦める』と返したくなる。大切なものを預かる限り、『常に、真剣に物事を考えなければならない』

ところで、冬に入る頃、E先生と会うことになるのだが、そのと

きは、病院側にE先生に訪問を依頼した。病院のサービスのひとつで市内限定だったところを許可してもらえたのだ。

A3（後書き）

マシュマロを口に入れながら……。

Ａ４（前書き）

日本一まで、あと６２８５話

A4

一

俺は心理学は相対的なものと考えているので、精神医学というものも、ほとんど相対的で基準を変えれば全く違ってくると思っている。

E先生もその認識があって、『治療するには、患者自身の観点から障害を取り除かなければならない』というようなことを言っておられた。「多くの患者について、治療と言う考え方は不適切」とも言い、治療や矯正ではなく、共に特殊化された道を歩むことを基本とするE先生の考え方では『普遍的な道から外れている』という考えを一切放擲している。

だから、俺はE先生に対しては親愛感を覚えた。会話が苦痛にならなかったのだが、会った当初は俺も緊張しており、早く終わらせたいと思っていた。

会った瞬間のことだが、まず、親が頭を下げて、E先生も頭を下げて、自己紹介した。それから、俺のことをよく知っていたためか、E先生は、相手を見下すような質問、たとえ、見下さなくても、いかにもおかしい人間を扱うような傲岸さは一切なく、「現在、このような治療法があるのだが、これについてはどう思うか？」という話を持ち出してくれた。だいたい、患者というのは、相手が見下していないと思っても、わずかな態度で見下しているかいなかを悟ってしまう。多くの精神病をわずらっているものは悟りを開いているような感がある。『普遍から脱落した者を矯正する』とかかっては、重度の患者には効果がまるでない。重度の患者は思考力が極めて高くなっているケースがあるから、小手先の技術ではまず操作出来ない。

E先生の場合、そのようなことがなかった。打ち解けやすかった

ので、会話が続いた。一時間もすると、「英語がダメだった。もう少し英語が出来ていたら国立の医学部を受けていたかもしれない」などと他愛もない話をするようになっていたのだが、「僕は文系科目の一切を勉強したくない」などと、俺も返すようになっていた。

自分の場合、人の前では『僕』と自分を称する。最も和平的な呼び方だと思うからだ。ちなみに治療と言っても、「その能力をぜひほしいと思っている」ということから始まった。

「やってみたいとは思うが、人前に出られるか分からないし、マニュアルには従いたくない。自分が間違っていると思うことにわざわざ従いたくない」と俺は言った。

「アドバイザーから始めるのはどうか？」「どのような仕事なのか？」「事務のようなものだ」とE先生は言う。だが、俺にとって、外に出ること自体が難しく、「なかなか決心がつけられない」「それほど慌てる必要はない」ということで、治療が終わったのだけれども、俺はほとんど腹を立てることもなく、魅力的な治療法だと思った。以前、ネットで言っていた患者の記録では『見下されている感じで激しい怒りを覚えた』とかそういうものがあったが、E先生の場合、そういうものとは違っていた。

それから、定期的に治療を受けたのだが、行うことは会話そのものである。「今、教室で不安な子がいる。小学四年生の女の子だけれども、自殺未遂を何度も繰り返していた」とE先生が言ったとき、俺はその子のことが詳しく知りたくなった。小学生時代に自殺を実行しようとすること自体、異常だが、教室には来ているという点が非常に複雑な事情を表現している。

「どんな感じなのか？」と訊くと、「家庭はごく普通だが、教室では一人でいることが多い。自分が担当ではないので、詳しいことはよく分からない」「ぜひ、お目にかかってみたい」「一度見に来てほしい」という話になった。

結局、それからしばらくは行くことがなかったのだが、年が変わった頃に、その場所を訪れることになった。

E先生が送ってくれることになったのだが、「車や乗り物が苦手だ」と俺は言った。
「電車はどうだろう」「あまり気は進まない」「歩いていくには遠いね。自転車でも半日仕事だよ」「日がかかっても、自らの運転で行きたい」と俺は自転車を持ち出した。A市まで自転車で行こうと思えば、約五十キロの道のりを進まなければならない。それでも、俺は自転車でそこを訪れることにした。
E先生も自転車を積んでやってきたので、俺はわずかに苦笑した。「これでも、若い頃は陸上部で１００００メートル走をやっていた」と言っていた。
田舎から一転して、都会に変わるまで、自転車をこいだ。ところで、そこですれ違った人はやはり俺に恐怖を与えた。ただすれ違うだけで恐怖を与えられる。俺の立場に立ったとき、ほぼすべての人間が『人間を苦しめている』ことになる。人間の罪は絶対的ではなく相対的だと思う。ある罪がある人を不幸にしても、ある人にとっては幸福かもしれない。すべての行動は『罪のレベルで対等』だと思う。素晴らしいと称される行為も犯罪も『等価で、人間の価値を決定するレベルの話ではない』ということになる。とはいえ、『人間の配下』では法律が絶対的定義なので、それに従う必要がある。おれ自身、『ほとんどの法律には納得できる』ただし、納得できない法律がわずかながら存在する。俺が最も好むのは『和平』であり、俺の辞書的意味は『すべての人間が生きるうえで、チャンスが失われない』ことだ。つまり、人を傷つけたりする行為は明らかにチャンスを失わせる行為なので、和平に反する。逆に、自ら選んだ道で怪我をしても、チャンスを損なったのではない。だから、自ら「この会社の入社を志願する」と言っておいて、後になって、残業手当を出す出さないなどで、裁判を起こすのは馬鹿げている。残業には手当てを出さなければならないという法律は馬鹿げている。なぜなら、これは自らが志願して入った会社だから、与えるエサやノルマはすべて会社側が決めてもいいはずだ。つまり、十六時間勤務など

を会社が決めてもいいわけだ。ただし、そういうことをすると、会社に入る人が少なくなるから、会社側もある程度は考えなければならない。要するに、会社の仕組みは創立者が好きに決めればいい。そこに志願者はその仕組みを見て、入るか否かを決めればいい。

それを、残業手当は出さなければならない。労働は八時間までなどと、勝手なことを法律で決めなくてもいいわけだ。とはいえ、社会の安定化の観点からすれば、それもやむを得ないとは思うが。労働を義務付ける点もおかしい。労働をしなければお金が入らない。そのあたり前の論理で問題ないわけだ。

例の教室があるのはかなり高地で、そこは農家がたくさん広がっていた。俺はどんなところかと思ったが、旧型の幼稚園のような場所だった。グラウンドもあるが、かなり小さい。

E先生は「話を通すので、来てほしい」と言い、そこに勤めている人たちに紹介された。七人ほどいたので、俺はかなり緊張してしまい、「見学をさせていただきたい」と答えるだけに留まった。だが、そこにいたM先生も非常にいい人だった。五十四になるという。M先生は女性で、不登校の子供、引きこもりの息子を抱えているという。俺の見学の付き人になってくださった。

「不登校などは意図的に立ち直らせることは不可能」とM先生は言っておられた。「僕もそう思います」「どれだけ深く観察しても、子供のことは分からない」と弱音を吐いておられたが、それが現実だということなのだろう。

こういう場に出された子供はだいたい自我を封印させようとする。そして、大人の観点から見れば、よくなってきたように見える。だが、実際、心の中ではとても大きな憎悪や怒りを溜め込んでいるかもしれない。

そういうことが怖いとM先生は言っていた。「こういう場では外面と内面は全然違ってくる」「生徒はどんな感じですか？」と訊くと、「最初だから」と言って、ニワトリ小屋に連れていってもらった。三人の子供がニワトリを世話していた。

『社会の色々なものと関わっていく』ことを主眼にしているらしい。ニワトリの飼育はその一貫らしい。このニワトリは家畜業者から授かったもので、実際、その家畜業者に言って、アドバイスを受けてくるらしい。それが社会とのコミュニケーションになるのだろう。それが社会見学の一貫らしい。

肝心な子供たちだが、俺はかなり会いづらかった。

「何となく帰りたい気持ちになってきました」と言うと、「見るだけでも」と言われ、ついていくことにした。

俺としては顔は合わせたくなかった。一昔前は『エイリアン』とも言われた顔だ。この時点では強力な特効薬を手に入れていたので、にきびはかなり癒えていたが、数年に渡って、世界でもトップクラスのにきびを患っていたので、痕はまず消えない。いたいけな子供が見たら逃げ出すかもしれない。

そういう心配も一瞬にして消えた。というのは、三人の子供のうち二人は女の子で、頬から鼻の下にかけて、火傷が闡明な少女、目に消えることのないアザを作っていた少女だったからだ。後で、M先生に聞いた話では「火鉢で火傷を負った。アザは犬の引掻き傷だ」という。引掻き傷は大きく化膿して、命に関わったほどだという。

そのような少女が二人もいたので、俺は驚きのほうが強くなった。少年もいた。その少年はとても痩せていた。「顎が動かしにくい障害があって、食べ物もほとんど食べられない」とM先生は後で教えてくれた。

この三人は違う学校の生徒で、『不登校生徒を持つ親の集い』を経由して、ここに入ったらしい。恐らく、傷や障害のコンプレックスからの不登校だろうと推察した。

俺自身、経験があるので、こういう場合の苦痛はよくわかる。こういう者たちを相手にするには、例えば顔に傷がある者に対しては、『まるで傷がないかのように接する』ことが最も重要だが、俺の経験上、それを認識しているものは『全体の約二割しかいない』。当然なことだが、傷は『傷そのものがダメージなのではなく、傷を見

る側、すなわち、外部からの評価が苦痛なのである』だいたい、どれだけ辛いかは本人が一番よく知っている。触れてほしくない点だ。それをわざわざ、指摘する者は馬鹿だ。頭がおかしいとしかいいようがない。本人は最大限の治療をしているつもりだし、少なくとも、馬鹿な奴らより、問題に関する知識もあって、実践もしている。それをわざわざ指摘するのは『他人を傷つける』ことに同じで、立派な『傷害の罪』だ。だが、目に見えるダメージは障害になても、精神的ダメージは無視される。だから、『精神的ダメージは恐ろしい』のだ。

数々の傷害を受け続け、それでも耐えなければならないのだ。それだけで立派な『チャンスの妨害』になる。

このようなことで、恐らくは学校はもちろん人間社会自体を敬遠するようになり、かなり厭世的になるのは自然なことだ。

俺はニワトリ小屋の前で彼らと出会ったので、かなり意表をつかれた。何とか出来る論理は持っているつもりだったが、実践と机上では全く異なることを思い知らされた。実際に人を相手にして、俺はかける言葉を失っていた。M先生は簡単に話しかけている。

少女たちに悲壮感とかは全くなく普通にしていた。俺はようやく言葉を考えて、

「ニワトリの飼育方法を知りたくて来たんだ。一通り教えてくれないか」と言った。少女たちは突然の訪問者に驚く風もなく、エサを与えるところを実践してくれた。

「ほうきで掃除をするんだよ」と言って、ほうきを持ってきて、俺にも渡してくれた。

「勝手に入っては鶏が怒らないか」と言うと、「さっちゃんは優しいから大丈夫」だと言う。何となく冗談で言ったのだが、少女は十分についてきたので、俺は感心していた。さっちゃんというのはニワトリの名前らしい。とさかがどこか変わったニワトリだった。

「おじさんはだあれ？」と訊いて来るので、「見習いに来たんだ」と答えた。しかし、俺はまだ二十代前半だ。おじさんということは、

俺はかなり老けているのかもしれない。だが、俺をごく平凡に扱っている。俺からすれば「俺が高校生だった頃の他の連中よりしっかりしている」ように思えた。社会的な能力では俺より十分程度が高いだろう。

俺も負けじと、ユニークな言葉を考えたのだけれども、それを少しも言うことが出来ず、ほとんどM先生に任せていた。

俺にとって、人と接することはたとえ、子供であっても、とてつもない難問題だった。俺は結局何も言わなかった。少女などは実によく働き、実によく発言している。すごいと思ったが、このような子が不登校になる日本がとてつもなく恐ろしいところに見えた。戦争はないが、全体を総合して、和平のレベルを考えると、どの国にも勝るとも劣らないほど平和ではない。人間とはそういうものなのだろうか。そう思うと、悲しくなって、社会に絶望してしまった。

ニワトリ小屋の掃除が終わったら、俺はM先生と職員の部屋に戻ったのだが、用事に出ていて、二人しかいなかった。俺は話をすることになったのだが、

「色々な話を聞きたい」と言われて、俺は何を話せばいいのかわからなくなった。メールで文字を打つのなら、かなり話が出来るが、人前では言葉がうまく紡げない。抽象的な言葉でしか話せなかった。『子供は外面と内面で異なる』ことなどを言ったが、要領を得ることが出来なかった。正直帰りたかった。

例の四年生の生徒に会いたかったが、俺は逃げ出すように帰ってしまった。道が分からないので、校門のところで、E先生を待っていた。

人を前にすると、自分は何も出来なかった。特に子供より、しっかり出来ていないことがよく分かって、俺はショックを受けていた。実践では机上の論理は一切通用せず、場の空気を考慮しながら、子供と会話をするにはかなりの技術が必要だと思った。

俺には到底出来ず、E先生に「この仕事は自分には向いていない」と言った。PCの前でしか、冷静になれないのだから仕方がない。

「最初は誰もそんなもの」だとE先生は言っていたが、子供と向き合う場でそのようなことは許されないと思う。

それからの俺は家に篭っていたのだが、また来てほしいという依頼をメールで受けた。「とても無理だ」と言うと、「算数の授業をやってみないか」と言われた。多くの教師より教える技術はあるつもりだったから、興味はあったが、「教員の免許がない」「教員としてではないので大丈夫」と言われた。だが、論理を重視する俺の教え方が子供にも対応出来るかどうかは不明だ。それ以前に、外に出ることがかなり難しくなっていた。

「授業中は必要なこと以外は話さなくてもいい」ということなので、俺は「考えておく」と言った。

十九日の算数で、『四年生に分数を教えてほしい。特に通分して計算する方法が苦手な者が多い』と言われた。通分の論理はしっかり確立していたので、ぜひやってみたかったが、

『唐突で返事に時間がほしい』と言った。

俺は結局その話に乗ることにした。また自転車をこぐことになった。

「お手伝いとして生徒には伝えてある」ということだった。俺は通分や分数の分野を完璧にノートにまとめていたのだが、はたして、それを教室で披露出来るかは疑問だった。高校数学を教えるのであれば、俺の右に出るものは予備校の講師ぐらいしかいないだろうというぐらいの自信はあるが、算数はどうだろうか。それ以前に教室に向かうことがかなり厳しかった。

教室に着くと、担当の先生が「お願いします」と頭を下げてきた。俺も頭を下げて、「予習をしてきました。おかしなところや計算ミスはありませんか」とあらかじめ、授業で使うプリントを渡した。俺が小学生の頃は『通分とは分母を揃えて計算すること』とだけ習った。論理を重視する俺は「どうして、分母が一緒でないと足せないのか」と疑問に思っていた。理屈がないと納得できない人だった。

そこを突っ込んでいる俺のノートはその先生には「丁寧ですね」と映ったようだった。
授業の打ち合わせをしたのだけれど、生徒名簿をまず見せられた。全部で八人もいるのだが、そのうち五人が女の子というクラスだった。
「麻衣子ちゃんは数学が得意で、美咲ちゃんは苦手だ」ということを聞いて、『佐伯美咲』という子が、例の自殺未遂を繰り返していた四年生ということが分かった。
先生の理想では「特別授業だから笑えるようにしたい」ということだった。「自信はないですが頑張ってみます」と答えた。笑いなどは全く自信がなかった。

教室に向かったのだが、入るなり、かなり教室が広く見えた。人数が八人だと、二人ずつ四列で済むわけで、後ろのほうが広い。しかし、子供の目は嫌でも俺に向くわけで、俺は子供の顔はほとんど見なかった。ほとんど何を言ったのか今では、もうわからなくなっているが、
「名乗るほどでもない旅人」と答えたのを覚えている。元気な少年――小山康平という名前だと後で知るのだが、その少年が「ドラゴンクエスト」だと言っていたのを覚えている。それでけっこう笑っていたのだが、俺は緊張していたので、それを言うのが限度だった。
担当の先生がプリントを渡すのだが、俺はノートを凝視して、『分数をアメで教えるんだ』と心で繰り返していた。というのは、俺は飴玉を黒板に書いて、1／2＝2／4＝3／6などの論理を教えようと思ったわけだ。
俺は下手糞な絵でアメを十二個書いたのだが、それだけで、けっこう笑っていた。
「十二個は一ダースというんだ」と言うと、「知っている」などと返ってきた。
俺は子供に難しくならない言葉を考えたが、難しいことに気付く。

分数は個数など分数表示できないものを扱うときは分母と総数に倍数的な規則がないといけないのだ。だから例えば十二個を五等分は出来ない。つまり、個数は整数でなければならないことをまず、生徒に示そうとしたのだが、生徒に分かるだろうか。アメの後にニンジンを例に出そうと考えていたが、ニンジンを先に出したほうが言いと考えて、

「アメは賞味期限が切れていた。ごめん」と言って消した。生徒は何となく笑っていた。ニンジンを書くと、また下手で、「先生、それ、大根」と言ってきた。俺は咄嗟に、

「僕は先生ではなく旅人」と答えて、「これはニンジン。今日の夕飯なんだ」と馬鹿げていると思いながら答えたのだが、意外と熱心に聞いてくれて、笑っていたので、俺は少し感動した。掲示板などでこんなことを書くと、呆れられるところだ。

にんじんを書いたのだが、少し小さかったので、書き直した。

「あっ、大きくなった」と例の康平君が言って、また笑うことになった。

「これは明日用の高級品なんだ」と言うと、また笑いが起こった。それで、まず1／2の意味を示した。分母が1を何分割したものかを示すために、熱心に説明をしたのだが、康平君などはすぐに分かったのだが、他の者は何か難しい顔をしていた。1／3や1／4も示して、分母が分割して出来たニンジンの個数を言うことを力説した。

「だから、1／2＝2／4なんだ」と、分割したニンジンが確かに同じ長さになっていることを力説した。どうしても分からない人がいた。恐らく、1／2と1／4の大きさをうまく理解していないのだろう。だから、1／4は1／2のちょうど半分だということを繰り返し教えた。

ちなみにこれだけで二十七分ほどが経過してしまった。だが、どれだけ時間がかかっても、算数を感覚ではなく論理として捉えてほしかった。算数や数学を暗記にしたくなかった。大学受験ですら、

標準程度と呼ばれる典型問題をマスターするだけで、私大ならどのレベルでも楽に合格点が取れるようになっているけれど、俺はそれが大嫌いだった。

それで、ようやく論理的に5／7とか9／13の長さを捉えることが出来るようになった。もちろん、まだ納得のいかないものもいたのだが……。ところで、例の美咲ちゃんは一番前の二列目にいたのだけれど、あまりよく分かっていない様子だった。見た目は普通の可愛い子で自殺とは程遠いように見えた。たぶん、これ以上にないぐらい丁寧に教えたつもりで、これで無理なら世界最大の教える天才でも無理だと思った。

算数の授業が終わって、「いつもより面白くてよく分かった」と意外と好評だった。その後、先生と話をしたのだけれど、「数学は得意だったのか？」と訊かれて、「得意ではないが、好きだった。問題を解くのは苦手だけれど、問題を作るのは好き」と答えた。俺は問題をてきぱきと解くのは苦手で、一問を長く考える。二時間ぐらい一問にかける。だから、簡易的なパズルのような問題を考えるのは苦手だった。

それで、「定期的に算数を教えてくれないか」と言われたので、「構わない」と答えた。その後、子供たちを社会復帰させたいので、協力してほしいと言われたが、俺は人前に出るのはかなり厳しいので、「それは躊躇ってしまう」と答えた。

たいしたことはしていないが、日当をいただいた。

定期的に算数を教えると言っても、週に四時間もあって、全時間に出向くのは無理なので、二週に一度と言うことになった。

俺は仕事をしたことになったのだが、そういう実感がなかった。仕事というのはつまらないものだと思っていたからだ。

だが、俺は四年生の算数の教科書を取り出してきて、ノートにまとめ始めた。新課程になっているらしく、E先生に新課程の教科書を授かった。教科書はあまりに分かりづらい。これでは生まれつき

頭のいいもの以外は、論理的に本質を生徒に教えられないと思った。別に社会で特に必要になる能力ではないのだが、せめて、感覚以上の理解を得て、少しぐらいは数学の深さを教えたいと思った。読み書き計算以外はまず使わない。分数なども社会ではまず使わない。面積などもまず使わないだろう。だから、意味がないのなら面白いほうがマシだ。

今思えば、学問の大半は一部の者を除いて、あまり必要ではない気がする。必要だと言う者の論理を前に見たことがあるが、疑わしいものだった。

そういうわけで、俺は『整数分野を教えたい』と思ったので、ガウスやフェルマーやオイラーの本を取り出してきて、それを算数に結び付けようと思った。ブルーバックスから出ている本を使って、うまく噛み砕くと、分数より簡単になったので、それをノートにまとめた。

E先生とのメールも続いていた。「本格的にやりたい」というようなことを言うと、履歴書などを提出しなければならず、そうなった場合、県の者が俺に面接と筆記試験を課してくるらしい。また普通自動車免許が必要で、俺はあきらめていたのだが、E先生の計らいで、県のほうで、面接と筆記試験をして、その場で判定するという流れになった。

「教室は教育機関に属していないから、正式な免許は必要ない」らしい。そこで、俺は公民館で、面接と筆記試験をしたのだが、筆記試験は常識的な問題だった。

問　夏の平均気温が４０℃になると、どのような問題が起こると考えられるか、ひとつの問題を挙げて、４行程度で対策等を答えなさい

問　死刑制度について、あなたの考えを４行程度で答えなさい。

などで、他に三つぐらいあった。後三つは教育倫理に関することだった。

選択問題では数学を選択したけれど、易しめの問題だった。

問　三角形ＡＢＣがあり、ＡＢ＝ＢＣである。ＡＢとＢＣをそれぞ

れ二等分する点をｓ（１）、ｔ（１）とする。ｓ（１）、ｔ（１）を結び、ｓ（１）とｔ（１）からそれぞれＡＣに向かって垂線を下ろす。その点をｘ（１）、ｘ（２）とする。すると、頂点を含めて、辺が交わっている点は７つになる。Ａｓ（１）とｓ（１）Ｃの中点をそれぞれ、ｓ（２）、ｓ（３）とし、Ｂｔ（１）、Ｂｔ（２）の中点をｔ（２）、ｔ（３）とする。ｓ（２）とｔ（２）、ｓ（３）、ｔ（３）を結び、またそれらの点からＡＣに垂線を下ろす。それらの点をｘ（３）、ｘ（４）、ｘ（５）、ｘ（６）とする。これらを操作といい、一回目の操作では、辺の交わる点は７個、二回目の操作では辺の交わる点は２２個となる。操作をｎ回繰り返したとき、以下の問に答えよ。（ｎ＝１、２、３・・・）

（１）ｘの個数を求めよ。

（２）辺の交わる点の個数を求めよ。

問　√（ｋ＾｛２｝＋ｋ）／１００００が自然数となる偶数ｋを考えてみよう。

（１）ｋが１６を因数に持つことを示しなさい。

（２）そのようなｋのうち、最も小さい数を求めなさい。

と言った感じで、他にも二つあった。

面接は、面接官が三人もいて、いきなり「公務員の面接試験がある日で、午後からも続きがある」と言ってきた。俺の面接はついでだった。ついでだから、精神鑑定のような質問ばかりだった。「学校の目的」とか「いじめをどう思うか」とかそんな感じの質問だった。

その場で採点されたのだが、筆記面接共に問題がないと判断されたらしい。それで、就職が決まったのだが、それでも、俺は実感がわかなかった。

さて、就職が決まったといっても、最初は算数を教えることと、四年生の担当の先生の手伝いをすることだった。家にいることが出

来ないので、E先生とA市の不動産をいくつも回り始めた。お金がないので、手頃なところが一日では決まらず、次の日にも及んだ。「自動車の免許を取らなくても大丈夫なのか？」と訊くと、E先生は「資格や経験は不問だから」と答えた。それで、俺は結局取らなかった。

ようやく物件が決まったのだけれど、とても面倒な契約書を書かされてうんざりした。家賃が１８８００円で、手持ちの物件では一番安いということだった。

引越しをすることになったが、親は何も言わなかった。アパートから三十分も歩けば、つくので、けっこう理想的とは言えた。電車が走ると、揺れるそうだが、そんなに気にならなかった。

電気屋が来て、インターネットを繋いでもらった。メールアドレスを変更したことをE先生に伝えてから、俺は算数の予習を始めていた。すべての生徒に論理的に理解してもらえて、興味をひきつける算数を確立しようと、教科書以外に、有名著者の参考書やブルーバックスの本をたくさん集めた。分かりやすいと銘打っている参考書は教科書と大差がなかった。「これでは分からないだろうな」と思いながら、ユニークな絵が良かったので、それは参考にした。ブルーバックスの本は面白いものがたくさんあった。自然科学に応用される数学は興味をひくので、それらをノートにまとめた。

少し後に、「カリキュラムに空き時間が週に一コマ出来たので、何か授業を取り入れたい」という話が出た。普通の学校とこの教室の違いは生活のしやすさにあると思う。この教室ではテストはないし、クラスが少人数だ。それに、厳密なスケジュールで動いていない。普通の小学校では４５分授業がここでは４０分だし、科目の勉強も少ない。給食もない。とはいえ、小学校に復帰するための場所なのだから、当初は「勉強は必要ない」という見方が強かったらしい。それが、不登校の生徒でも初等教育を受けられるようにという見方に変わり、ほとんど学校と変わらなくなったと見える。普通の小学校より少人数なだけましかもしれない。集められている人材も、

知識、経験が豊富な人なので、普通の学校に行けなくなった人も、行きやすい環境になっている。
俺も考え始めたが、次の日、健康診断書を提出しなければならなかったので、E先生に連れられて、国立病院に向かった。軽く驚くほど広い病院だった。
視力が悪かったので、眼科でメガネを作ってもらったが、ほとんどかける機会がなかった。
四年生クラスを担当する先生から名簿を借りて、各人の特徴を掴んでおきたいと思い、特徴を聞いたのだが、八人は、
足立将太　N小学校
井上美恵　S小学校
小山康平　O小学校
佐伯美咲　A小学校
鈴木みそら　M小学校
津瀬大地　O小学校
西崎洋子　Y小学校
古田千代　H小学校
で、小学校はすべて異なる。（O小学校は二種類ある）その特徴もはっきりしている。全員が不登校で、例の美咲ちゃんは一年生のときに四回登校しただけで、不登校になって、三年生のときに一回、四年生に一回登校しているだけだという。
元気の良かった康平君も三年生は一度も学校に行っていないということだった。洋子ちゃんは三年生までは普通に通っていて、欠席も一度しかなかったという。四年生から学校に行かなくなったらしい。
不登校の直接の原因は分からないらしいが、それは当たり前だ。人間の感情を理解するのは不可能に近い。
そこで、俺はまず、俺が来たことで、彼らがここに来づらくなるということを避けるために、丁寧に発言の練習を重ねた。
まず、～を持ってきなさいとは言わないことにしようと決めた。

「コンパスを持ってきなさい」と言って、忘れたら、かなりの苦痛になるから、俺は自分で八個コンパスを購入しに行った。他にも気をつけないといけないことはたくさんある。ほんの些細な言動ひとつで致命傷を負わせることになる。まず一方的な物言いはすべて封印した。授業は興味深い内容を扱うが、最も簡単な内容にするべく、初等教育の範囲をすべて網羅して、それをまとめあげた。

E先生の知り合いの先生から、「転びやすいのが立体の体積と比」ということを知った。しかし教室のカリキュラムに立体の体積はない。立体の面積までだった。だから比（2；3とかそういうところ）を徹底的に分かりやすく纏め上げた。

参考書には、1を1；2に分けるとは、1＋2を分母とし、1／3と2／3に分けることで、それらを足すと、もとの1になる。と書かれていた。しかし、これでは、どうして分母が1＋2になるのか分からない。そういうところを分かりやすくした。けっこう時間がかかってしまった。

算数以外は、担当の先生の手伝いをすることで、色々と経験の中で吸収して下さいということだった。

俺は二学期から入るのだが、それまでに何度も教室に行って、図工で使う粘土をそろえたり、話し合いをした。ここの先生たちは非常に生徒を観察しているから、かなり深いところまで議論が進んだ。

四年生を担当しているK先生は男の教師で、自身小学校高学年、中学時代に不登校だったと言っておられた。今では信じられないほど、しっかりしておられる。

M先生からは印刷機の使い方を教えてもらった。

「かなりたくさんプリントを作らないといけなくなりそうです」と言うと、再生紙を山ほど持ってきてくれた。

最初、俺の作ったプリントを見て、先生たちは関心しておられた。問題点もかなり指摘されて、「子供には難しいのではないか」と言う意見もあったけれど、「難しい計算のほうが難しいし、実用性に乏しい」と主張した。

１００マス計算のプリントがたくさん用意してあったけれど、「集中力をつけるためなら、僕は思考力を要する問題に向かうことのほうが重要」と主張して、二つを組み合わせることになった。俺はそのために、算数パズルの問題集を買ってきて、アレンジを加えて、たくさん用意した。

夏の間に用意しなければならないことがたくさんあって、かなり疲れた。けれど、問題はこれが実践で受け入れられるかが問題であった。

俺は八人の親と夏休みの間に話をしたと言っても、担当の先生の隣で話を聞いているに過ぎなかった。観察していると、美咲ちゃんの親は思った以上に、子供には無関心だ。全く関心がないわけではないが、雰囲気的なものにそういう無関心なものがにじみ出ていた。親にも特徴があって、共通点はやはりかなり心配しているというところだった。普通から逸脱している子供への不安というものだ。洋子ちゃんのお母さんが「うちの子は劣っていて」と言っていたので、俺は「劣っているわけではない」ということを黙って聞いていられなくなって言った。基準を極端に固定すれば、優劣はつくが、不登校になることが、人間として劣っているとは言えない。

俺はもともとこういうことに『矯正』という言葉を使いたくない。いじめなどが原因だった場合、悪いのは周囲のほうだ。どうして、矯正しなければならないのか。矯正するのはいじめているほうだ。

そのことを主張して、「不登校などは生活環境を基準にして成り立っている。現に環境を変えれば、八人の生徒はここに通っている」とも言った。後で分かったことだが、彼らの小学校には他にも不登校の生徒がいるらしい。ここに来ている八人は一部でしかないらしい。「環境によって左右されるなら、あえて、悪い環境に戻さなくてもいい」という方針が認められた。そのときに、魚は陸では生きられないという極端な例も出した。要するに、環境には人によって、得意不得意がある。陸ではホオジロザメも子犬にも敵わない。（勝てる場合もあるが）海ではライオンはくらげにも敵わない。（勝て

る場合もあるが）

論理的に言うと、自らの得意な地形で、力を磨けばいいわけだ。社会にも得意不得意の環境があるから、得意な環境を選択出来る力が必要だとして、その力を伸ばす方針で二学期の空き時間の使い道は決まった。

二学期が始まっても、八人は一向に学校には復帰しなかった。復帰する必要はないと俺は思っている。学校は『決して平等ではない。むしろ、不平等が最も著しい場所』だ。だから『学校の環境に馴染めるものだけが学校で生きていける』ということになる。不得意なものは熾烈な我慢が課せられる。教師はそんなことも知らず、『全員を平等に扱ったつもりになる』相対的に力が６０のものにも２０のものにも３０を与える。「能力に見合った教育なんて全く実現されていない」というのが現状だ。

俺は早朝から学校に来ていて、「体育館で始業式があるので、挨拶をお願いします」と言われていた。ここでも始業式はするらしいのだ。挨拶の文を考えながら、やはり、八人の生徒とどう向き合うかが問題になっていたので、そのことも考えていた。

算数のことも考えないといけないから、かなり大変だった。

始業式が始まったのだけれど、六年生は極端に少なかった。教室に来ている中にも来なくなる生徒はかなり多いらしい。ただ単に「両方で環境に馴染めなかっただけだ。現にそういう人は家では生活をしているわけだ」本当にすべての環境で馴染めなかったら、死を選ぶ。家で馴染めている以上、まだその生徒は大丈夫だ。不登校になると、親はかなり狼狽するけれど、環境に馴染めるのが現時点で、家しかないと考えればいいのだ。家以外に馴染める場所を見つければいい。要は、将来『文化的に生きていいければいい』のだ。たかだか小学校で馴染めなかったからと言って、幸せになれないとかそういうのはない。

よく馴染める環境で誰にも気遣いをせずに生きていけたら、さほ

どお金がなくても、人は幸せになれると思う。そういう意味で、不登校の生徒は思いつめてはいけない。特に親が落ち着いていないといけない。

俺がステージ（と言っても、体育館は小さい）に上がったら、「ドラゴンクエストの人だ」と康平君などが声をあげていた。それから、俺は一部でドラゴンクエストの人という愛称で定着するようになる。

「自分は旅人で行く当てはない」などと答えていた。けっこう多数の生徒が笑っていた。後のことであるが、六年生に人生哲学を延々と話したりもした。

挨拶が終わって、四年生の教室に向かった。K先生が俺を紹介して、「どこに旅したいですか？」と康平君が訊いてきたので、「心の中」と言った。

さて、始業式があって、教室を掃除することになるのだが、俺は雑巾を取りにいかされたり、バケツの水を汲みに行かされるなど、K先生にこき使われた。

康平君と将太君とは馴染めたのだが、それ以外の子とは馴染めなかった。だが、安易に接近するつもりもなかった。何度も言うが、こういうところで、馴染んでいないものを無理に輪に入れてもダメだ。苦痛になることのほうが多い。だが、完全に孤立して、時間の経過をただ待っている、いること自体が苦痛になっているような場合は、義務的で、非常に達成しやすい用事を与えたほうがいい場合もある。そのあたりの見極めは出来るつもりだったが、俺も緊張が解けなかったし、康平君がバケツに足を引っ掛けて、何度も水を汲みに行かなければならなかったので、八人を観察することが出来なかった。

大地君、美咲ちゃん、それから、みそらちゃんが馴染めない様子だった。だが、三人を一度に相手にするのは難しいし、間接的にしないと、いかにも孤立しているから、何とかしようとしたという下心を読み取られる。

だから、俺はまず一人に的を絞ることにした。それをK先生に報告して、美咲ちゃんに的を絞ることにした。

だが、接近の方法を考えるのにはかなり苦労した。子供と言っても、異性を相手にするわけで、恐らくガードは硬いだろうし、一方的に接触するのは俺自身、気がひけた。別にロリコンというわけではない。四年生の少女を相手にするのは、誰もが、神経を遣うはずだ。俺は色々と考えて、

「黒板消しを手伝ってもらってもいいか」と声をかけた。無言で、美咲ちゃんは手伝ってくれたが、意識すると、ぎこちなかったかもしれないと思った。

掃除が終わると、K先生が俺に何か話をしてくれと言ってきた。何を話せばいいのか分からない。趣味は広範で、話のネタはあるが、宇宙論の話をしても分からないだろうし、意外と難しいことに気付いた。俺は適当に考えて、自分の体験などを話した。意外と笑いが取れたが、どうも女子には不評で、特に美咲ちゃんは全く笑わない。

現時点では、笑わせるのは無理だとは思うが、出来るだけ早く何とかしなければならないと思って、カブト虫を採りに行って、遭難したことなどを話した。カブト虫の卵を育てないかなどと言ってみた。康平君が賛成したので、後々、卵を買うことになった。美咲ちゃんは笑わないので、美咲ちゃんに接近することは出来なかった。

八人がいる学校で初日から、しかも女子に接近するのはかなり難しかった。とはいえ、俺が全否定されたわけではなかったらしく、その女子の親から聞いた限りでは、比較的高評価を得ていたらしい。

その日、生徒の帰宅を見守るために、俺は外へ出たのだが、みな、帰る方向がさまざまだ。徒歩一時間の六年生もいた。俺はその子を連れて帰った。

その後も仕事は続く。俺に日誌が与えられていて、それを書かなければならなかった。とは言え、どのレベルで書き込めばいいのか分からなかった。

「生徒一人一人の一日を詳しく書けばいいのでしょうか？」と聞く

と、「そんなに詳しく書く必要はない」ということだった。
俺は比較的詳しく書いた。授業は明々後日からなので、家に帰ってからしばらくは美咲ちゃんを何とかする方針で、考えをまとめた。
歳の差が１２もあるとしても、相手にするのは異性だから、小手先の方法では全く意味をなさない。本人が一人でも納得しているのならそれで構わないのだが、自殺未遂が三回もあると聞いている以上、放ってはおけない。
俺は自炊の生活だが、主食を海外のＭＲＰにしていたので、水に混ぜて飲むだけで夕食は完了する。栄養素は炭水化物以外はほぼ完全に揃うので、後は、生野菜をかじって食べ、安くで売っているパンをかじって食べる。
そのため、食事にかかる時間は支度も合わせて、二十分程度。後はほとんど色々なことを考えるために費やされた。
俺は美咲ちゃんに何とか接近しなければならないと思い、Ｋ先生に「明日、粘土を使おう」と言った。
早朝、粘土を用意したのだけれど、ただ、粘土で遊ぶだけだ。そのために一時間を使わせてもらった。どうせ、始業式から三日は暇を潰す時間になっている。ほとんど問題にならなかった。紙粘土を用意してきて、粘土遊びが始まった。創造的な遊びの一貫として、取り入れられたものだ。しかし、粘土は優れているとは言い難い。絵画より馴染みがないし、小説や漫画より規模が小さい。とは言え、せっかく用意したものだ。粘土を一時間使って遊んでもらった。
康平君などは色々なものを創っては見せびらかせていた。美咲ちゃんはただ丸めて、団子のようなものを並べるだけで、特に楽しそうにはしていない。俺もさりげなく始めたのだが、想定していたことと違ったのは、みんな机に向かって集中しているところだった。
もう少し騒がしくなるものと思っていた。Ｋ先生は粘土が上手で、プラモデルの電車のようなものを創っていた。
騒がしくなっている最中に美咲ちゃんに接近するつもりだったのだ。しかし、康平君以外はほとんど喋らないから、粘土遊びは失敗

に終わった。
三時間目のときに、班を決めることになった。この班は二人ずつ、四班で、掃除の時や授業でグループを結成するときに利用されるものだ。
K先生が「何か調べ物をさせて、そこで何とか出来ませんか」と言うので、「それはすごくいいです」と答えた。
だが、班を結成するときに、女子や男子が一人にならないように、二人、三人、三人に分ける。
美咲ちゃんと洋子ちゃんが班になった。洋子ちゃんは美咲ちゃんとは仲があまりよくない。だから、俺が間を受け持とうと思った。三人グループは康平君と将太君が分かれて、引っ張ってくれるだろうから、K先生に担ってもらった。康平君はクラスの全員に話しかけることが出来るし、将太君も、それなりに打ち解けることが出来ている。
それで、K先生が環境についての発表会を開くことを告げて、三時間目の残りの時間で調べることになった。
図書室と言っても、規模は小さいが、俺は二人を連れて行った。なかなか会話が進まないので、
「宇宙人の環境破壊について調べよう」と言った。洋子ちゃんは何となくといった感じに笑ってくれたが、美咲ちゃんは笑わない。椅子に座ってからも、指先をずっと見つめたままで、洋子ちゃんもきまづそうにしている。
こういう雰囲気を破壊することが俺の役割だ。それなりの論理を用意していたつもりだったが、全く通用する気がしなかった。何とでも出来ると思っていたが、現実は厳しく、かなり苦戦を強いられていた。
俺は宇宙の図鑑を持ってきて、興味深い話をした。火星に川が流れていた。宇宙人がいるかもしれないぞとけっこう盛り上がるように話したのだけれど、美咲ちゃんは退屈そうにしたままで、洋子ちゃんだけが耳を傾けてくれている状況だった。

やはり、１対１で対応しないといけないのかもしれない。美咲ちゃんは他人との関わりを完全に拒絶している感じだった。
俺自身も詰めが甘すぎたと反省した。ごくごく当たり前のことすら忘れていた。入って間もない緊張が致命的なミスを生んでしまった。
それから、木製の話をして、木星人の想像図を紙に書いたりしたが、洋子ちゃんばかりが笑って、美咲ちゃんはぼんやり見つめているだけだった。
これをきっかけに洋子ちゃんとは仲良くなれたが、肝心の美咲ちゃんには効果がいまひとつだった。
二人きりになるきっかけを作るにはやはり、もっと踏み込んだ方法を取り入れなければならない。
この頃、俺はドラゴンクエストの人として、放課後になると、五年生のサッカーに混ざることになった。俺は一切手加減をしなかった。
５０メートル走が、６，７８秒は小学生が相手だと、かなり速い数値だったので、一旦、中央より奥にボールが落ちると、後は一人で独走して、ゴールを決めていた。
俺は運動生理学にはある程度精通していたので、
「修行をすれば、僕なんて、楽に超えられるよ」と言った。そのため、夜遅くまで、特訓が行われた。
「修行にはオーバーワークというものがあるんだ」と色々説明して、何とか下校時間は守ってもらった。これが有名になって、六年生や幸平君、三年生なども集まってきて、
「どうやったら足が速くなるの？」
としきりに訊かれるようになった。対象がまだ子供だったので、たいしたアドバイスは出来なかったが、「たくさん練習しすぎると、中間の筋肉が遅い筋肉になるんだ」と言って、あまり無理をさせないようにして、下校時間は守ってもらった。

美咲ちゃんの件は全く解決していなかった。とは言え、あれ以来、洋子ちゃんは自分から話しかけてくれるようになった。
「怒らないし、優しい」から俺はいいらしい。後で、「学校の先生は頭を叩いたり、怒ったりする」と言っていた。俺は怒鳴り声を上げたりはしないつもりだ。そういうものは論理がなくて、権力に頼らざるを得ないものだけがすることだと思っている。しつけに恐怖は必要ない。納得させることだ。
そういうわけで、俺は全く怒らなかったのだが、これはあらかじめ決まっていることだった。厳しい言葉をかけたりすることはこの教室では禁止されていることだった。

授業が始まって、ようやく俺は手伝いから、メインの算数を教える人となった。俺の授業はかなり好評で、「算数なのに面白い」と言っていたと生徒の親からも言われた。
授業では、最も根源にあるものだけを教えた。後は興味をひく内容だけをプリントにまとめた。
「１＋２＋３＋４＋５……＋９９＋１００を十秒で答えてみよう」と言うと、康平君などは興味を持って、「できっこないと言っていた」
「絶対無理」と将太君なども言っていた。それらを工夫して計算することはみんなあまり馴染みがなかったらしく、からくりを教えると、さらに興味を持ってくれた。
とは言え、美咲ちゃんはそもそも計算の順序を変えること自体が不思議なことのように見ていた。１＋２＝２＋１という交換法則をまだ理解出来ていない状態で、でも、俺自身、交換法則の代数的証明はよく知らない。
具体例をたくさん挙げて、美咲ちゃんは頷いていたけれど、不安だ。
授業が終わって、総合学習の時間に、美咲ちゃんと洋子ちゃんを連れて、図書室に来たんだけれど、本当に宇宙人の環境破壊につい

て調べることになった。それで、宇宙人とかＵＦＯの本がいくつかあったからそれを引っ張り出してきて、読み始めた。
　美咲ちゃんは退屈そうにするばかりで、あまり話に興味を持ってくれない。確かに、ＵＦＯが出てきても、いきなり興味を持てるとは思えない。なかなか美咲ちゃんと１対１になれないので、何とか洋子ちゃんと仲良くなってほしいと思った。無理にではなく、最も自然な形で、そうしたかったので、まずは何とか美咲ちゃんを話に乗せないといけない。しかし、美咲ちゃんの心理が読めない。不適切な発言だけはしないように心がけて、最も答えやすいと思った質問をさりげなく飛ばしてみる。
「美咲ちゃんちの近くに広いところとかある？」と。なくても、ないで終わるし、あれば地名が返ってくる。美咲ちゃんは「うーん……」と考えていたから、意外と乗っていたかもしれない。「近くに川がある」と美咲ちゃんの声は甲高くてよく響く。
「ＵＦＯの着陸地点かもしれない。今度調べてみよう」
　と言うと、洋子ちゃんは笑ってくれて、美咲ちゃんは「タニシが転がっているだけ」と返してくれた。ようやく少しだけ会話が成立したので、俺は実に嬉しかった。
　それから、しばらくしてのことなのだが。サッカーはプレイヤーがかなり増えただけでなく、観戦者もだいぶ増えてきた。女子が大きな木の下あたりから、見るようになってきた。かなり全校規模になったのだが、美咲ちゃんも見に来ていた。それが一番大きいことだった。
　ただ、サッカーのプレイヤーが増えると、かなり喧嘩が多くなった。特に下級生が六年生の足を踏みつけて、六年生が叩くという喧嘩と言っても、六年生が一方的なのだが、それを止めるのが難しかった。下級生が泣いてしまって、どちらが悪いと決められなくなってしまうからだ。
　そこで、俺はルールブックを作って、踏んでしまったら、イエローカード。踏んだ相手を叩いてはいけない。などと決めた。

「プロの試合だと、人を叩いたら、退場だよ」と言って、言い聞かせたのだが、それでも、ひどいクロスプレーがあると、すごい喧嘩になってしまった。カッとなると、ルールも破ってしまう。そればっかりは止めることが出来なかった。幸い、大きな怪我はなかったけれど、お腹を蹴り飛ばしたり、とても恐ろしいことをするので、「ガンジーという偉い人がいて……」などと懸命に説得した。効果のあるものとないものに真っ二つだった。効果がないものは、「ハンドだ」「違う」でもめて、殴り合いになってしまった。このような生徒を権力を行使せず止めることの出来る人こそ、天才なのだ。俺には無理だった。

美咲ちゃんがサッカーを見に来てくれた日あたりから、何となく美咲ちゃんと会話をするようになって、体育の時間に、「すりむいた」と怪我をした際に俺のところにやってきてくれた。それから、保健室というには適切でない場所に連れていって、保険の先生に怪我の手当てをしてもらった。

「痛い？」「ヒリヒリする」と言った会話もするようになっていた。

運動会というものが十月四日にある。これは初の試みで、そのために時期が遅れたと、M先生は言っておられた。「運動会は個人競技はなしにしましょう」と俺は言った。明確に個人の順位が出るので、運動が苦手なものは辛い思いをすることになるからだ。運動は無数にあるものさしのひとつでしかないし、重要性は他分野より乏しい。それに明確な順位を示すことは不利益のほうが多いと考えていた。そこで、綱引きとかが採用された。けれど、一番大変だったのは、来賓の方々に電話を掛け捲ることだった。

別に重要ではない気もするが、俺はK先生が電話をしている傍ら、市の偉い方々の名簿にマルバツをつけていった。

二週間前に練習が始まった。リレーも足が速い人だけを選ぶのではなく、スポーツテストの記録で近いものを同じ順番にした。全校で四十七名の生徒しかいないから、同学年で割り振るのは難しかっ

た。最近の子供は足が速いことに気付く。五、六年生などは7，2秒とか7，4秒で走っている。女子でも速いものは8，0秒で走っている。俺などは、六年生の頃は8，7秒ぐらいだったから、近代の子供は運動能力が落ちてきていると言っても、十分に速いではないか。

棒引きの案が出ていたが、危険だから廃止になった。玉入れと応援合戦が取り入れられて、ムカデ競走は危険だから廃止になった。

練習が始まった頃、俺は色々なところに顔を出す機会を得ていた。E先生とは働き出してからはメールだけのやり取りになっていた。『集いに出てこないか』と言われたので、出ることにした。不登校の親が集まる会で、色々な人の話を聞くものだった。

「十五分間だけど、講演してほしい」と言われた。「僕に務まりますかね？」「まず大丈夫」

しかし、俺はかなり躊躇った。俺の持論を公に持ち出すなんてことは考えたこともなかった。そもそも正しいかどうかも分からない。

「みんな、勝手なことを言ってるよ、ここでは」

とE先生は言った。確かに出版されている本を見ると、当てはまらないものもたくさんある。絶対的に考えることが出来ない問題だ。

「自分の経験だけ話します」と答えた。事実を話すだけに留めれば、少なくとも、自分の立場においては成り立つ。それなら、当たり障りがない。

A４（後書き）

アニメでも見て、リラックスしよう……。

A５（前書き）

日本一まで、あと６２８４話！！

A5

講演を終えて、ようやく一息ついた。「仕事があるから」と俺はすぐに帰った。かなり遅くなっていた。かなりたくさんの行事を抱えているから、算数の予習をして、仕事を済ませると、午前二時になった。

クラスの子たちとはだいぶ馴染んできた。特に美咲ちゃんと会話が成り立つようになったのが大変な進歩だ。だが、まだ完全ではない。まだまだ躊躇いとかそういうものが強く心に残っている。それがなくなると、もっと楽になれるかもしれない。

九月ももうすぐ終わりに近づいていた。運動会のために毎日二時間も練習する。応援合戦の練習が大半を占めている。

赤と白の二つに分かれていて、俺は赤組の練習を見ているのだが、康平君の声は遠くにいても聞こえてくる。美咲ちゃんは声を出しているか分からないが、それとなく口は動いていた。休憩の時間になると、美咲ちゃんは席を外れて、学校の後ろ側に向かう。駐車場前の木材などが積んでいるところに腰を下ろしていた。

俺は美咲ちゃんの後を追っていって、その隣に座るのが日課になっていた。白組が教室の中で練習していて、その声が響いてくる。「熱くないか？」と尋ねると、「ちょうどいいぐらい」と美咲ちゃんは答えた。「動いていると熱くなっちゃう」とけっこう当たり前なことを言ってきて、「熱いのは嫌い？」と返すと、美咲ちゃんは「嫌い」と即答した。

そんな感じで、どうでもいいような会話をするようになっていた。授業も少しばかり熱心に聞いてくれるようになっていた。

約分の授業をしていたときだったと思う。素因数分解をして、大きな数の約分をするプリントで分からない問題があると、美咲ちゃんは洋子ちゃんと一緒に聞きに来たことがあった。二人が仲良くなっているかどうかは分からないが、いつ話をするようになっていた

か自分でも分からなかった。昨日の時点では二人は話をしていなかったから、今日、何かあったのだろうか。ともかく、人の関係は一日にして変わるから、いつまでも気が抜けないことを思い知った。

放課後になると、また運動会の練習が始まる。俺はM先生と倉庫に向かっていた。昨日、コートに白線を引いたのだけれど、サッカーをしたせいで、ほとんど消えていた。

「サッカーは禁止にしたほうがいいですね」と言うと、「真ん中やったらいいんだけどね」と言われたので、俺は応援団長でもあって、足が一番速い六年生に、「サッカーは中央でやるように」と言っておいた。しかし、次の日には、線がまた消えていた。

その日、算数の時間中、みそらちゃんの気分が悪くなったので、保健室に連れて行った。かなり苦しかったようで、保健室で嘔吐してしまった。気分が悪くなったことはみそらちゃんの自己申告だったが、かなり最初のほうからムカムカしていた様子だった。

言い出しにくかったそうで、俺は頭を抱えた。その点を全く考慮していなかった。何かあったときに言い出せるような雰囲気を作るか、俺自身が早くに気付かなければならなかった。完全な俺の手抜きが原因だった。

「気分が悪くなったら、僕に遠慮なく言ってくれて構わないよ。そうだ、何かがあったら、こうやって手を組むことにしよう。そうしたら、僕が気付くからね」と言うと、みそらちゃんはコクリと頷いて、手を組む練習をした。

それから、午後の授業が終わった後に、みそらちゃんが来て、「トイレ、一人で行くのが怖い」と言って、ついてきてほしいという。俺は困った。

「外までいいか？」と尋ねると、コクリと頷いていた。怖いテレビ番組でも見たのかもしれない。

そんな感じで全員が馴染んできたので、俺は予期もしないことを頼まれるようになった。サッカーに誘われることはよくあって、忙しくないときは出ていたのだが、PKのゴールキーパーをしてほし

いと言われて、行ってみると、一方的に俺がキーパーをして、子供達はただ蹴りまくるだけだった。五年生の女子がいきなりやってきて、破廉恥な質問をしたりした。曖昧に答えていると、満足したらしく帰っていった。

運動会が近づいて、かなり用意が忙しくなった。リレーで使うコーンが足りなくて、近くの小学校から借りてくるなど、使い走りをされた。

「予行演習は流れだけ」と言うことに決まった。

その頃になると、美咲ちゃんともかなり話をするようになっていた。これはちょうど運動会の数日前だったから、十月のことだ。

二日の日、予行演習で、つまりは運動会の予行をする日だ。目的は当日スムーズにプログラムを消化させるためで、俺は早朝からさまざまな用意に追われていた。

子供が登校してくる時間になって、M先生に花壇に水をやっておいてほしいと言われ、やることになった。康平君と将太君がやってきて、「今日、リレーは走るのか？」と訊いてきた。走ることを楽しみにしていて、走るという答えを期待していたのだろう。「今日は流れだけだな」と答えると、がっかりしていた。「放課後、走る練習をしていいのか？」という質問には「いいよ」と答えた。

リレーを楽しみにしている生徒はかなり多かったので、放課後などストップウォッチを借りに来て、５０メートル走で競い合っている生徒はたくさんいた。

俺も走らされた。六年生には速い生徒が多く、危うく負けそうになるほどだったが、何とか負けなかった。「速く走る方法を教えてくれ」と5年生や6年生がこぞって質問に来た。俺はとりあえず、以前本で読んだ正しいスプリントのフォームを教えた。走ることにはあまり詳しくなかったので、それしか出来なかった。

そんなわけで、放課後はリレーの練習で燃えていたというのがこの頃だった。十月二日も同じように行われていた様子だったが、俺

はその日美咲ちゃんと話をしていた。その日、ロング休み時間（二時間目の後の３０分の休み時間。ちょうど予行演習が終わった後だった）に美咲ちゃんが俺のところを訪れてきて、「一人はつまらないから、一緒にいてほしい」と言うので、「図書室で本でも読もう」と言って、連れて行った。「どんな本を読もうか」「面白いのがいい」と美咲ちゃんは言うのだが、面白いというのは人によってさまざまなので、俺は選択に迷った。選択にかなり時間をかけてしまったのだが、それでよかったのだ。美咲ちゃんは一人が嫌なわけだ。つまり、本を選んでいる間の、美咲ちゃんを待たせている時間というのは、苦痛というわけではないのだ。実際、美咲ちゃんと本棚を眺める時間が休み時間の半分が過ぎていたが、美咲ちゃんはずいぶん楽しそうだった。

結局、本は読まず、タイトルを眺めるだけに終わった。「漢字、読めるか？」と訊くと、「これとこれが分からない」と指を差していたので、俺はその漢字を教えた。それから「漢字のドリルをするのは嫌い」だと美咲ちゃんは言った。「計算と漢字はどっちがいい？」と聞くと、「どっちも嫌い」と答えた。「筆算の掛け算と小数点が嫌い」と具体的な話もしていた。

そういうことがあったので、俺と美咲ちゃんの関係は特別なものになっていた。ちなみに俺はものを頼みやすい先生らしく、五年生の生徒などが突然やってきて、「習字道具忘れた」と言ってきた。５年生の担任には言わず、俺のところへ来たところが面白かった。「鉛筆を筆だと思えばいいさ」と言うと、笑っていた。後で、「学校にいたときは習字道具を忘れて、ずっと立たされた」と大人しい五年生が泣きながら言ってくれた。それがとても苦痛で、今でも考えると、胸が痛むと言っている。その子は繊細な子なのだ。そういう生徒を考慮しない教師に俺はますます腹が立った。

それ以外にも、忘れ物をして、俺のところに言いに来る生徒がかなり多くなっていた。忘れ物をすると、相当苦痛を覚える。だから、俺は「ランドセルを忘れたこともあったな」と冗談気味に言って、

そういう苦痛を和らげてやることに専念した。忘れ物で苦痛を覚えるのは仲間がいないからだ。『自分だけ忘れる』これが一番苦痛で、それを苦痛にさせないように俺は心がけた。人間は完全な脳を持ち合わせていない。だから忘れる。それを許容できない教師は許せない。社会に出れば、確かに忘れてはならないことはたくさんあって、忘れない癖をつけておかなければならない。だが、それを苦痛という洗礼で覚えさせると、子供の精神に大打撃を残すこともあるのだ。

俺は精神に打撃を与えず、かつ、子供の力を引き出すそういう教育を目指したかった。精神的強さは打撃を受けると上がると思っている馬鹿が多いが、そんなことは決してない。なぜなら、精神的強さは環境によって、大きく左右される力だからだ。極めて、相対的でしかも、打撃が強すぎてはいけない。

精神的強さとは「この環境では強いがこの環境では弱い」という感じなのだ。だから精神的強さを得た人でその人が裕福なら、「お金をすべて放擲した環境」で強いままかと言うとそうではない。つまり、ある精神的強さが上がると、他の方面で下がる。精神的に強くなるとは環境が変わることを意味する。その方法が苦痛というのは間違っている。環境を変えるのは、自分の意志以上に周囲のサポートだ。

だから、精神的強さを鍛えようとするのではなく、苦痛を繰り返しながら、「自分に適した環境を見つける」ことが大切なのだ。

そこで、俺は子供のもっている最大の長所を見つけ出したいと思っていた。「長所こそがその人の適した環境」だからだ。今の日本では「基準が絶対的になる傾向にあり、ひとつの環境に縛り付けよう」とするので、「極めて不平等」なわけだ。

俺はここに来ている生徒のために「その生徒の適した環境」を見つけ出してやりたい。それは自分で見つけるものと頭の悪いことを言う者もいるが、「環境」とは数学的に存在するものだ。つまり、その適した環境という場は微分法を学ぶ、積分法を学ぶというようなプロセスを得ないと辿り着けない。そういう根本を得る手段を教

えなければならないのだ。
俺は精神的に打撃を与えず、論理的に物事を考えられるようになり、かつ、自分の適した環境を得られる、そんな教育を目指したかった。
ここに来ているものの多くは身体的ダメージではなく精神的ダメージで苦痛を覚えているものだ。だから、俺は精神的な傷を癒し、学校ではない別の環境を与えることを主眼に色々なことを考えた。
だが、十月二日という日は特別なものになった。
ロング休み時間に美咲ちゃんに一緒にいてほしいと言われて、その放課後、応援合戦の練習が終わった後、美咲ちゃんがやって来て、「家に帰りたくない」と言ってきたのだ。俺はけっこう戸惑ったが、どうしてとは聞かず、「図書室に行こうか」と言った。
図書室に行ったのだが、美咲ちゃんは、俺の膝の上に座りたいと言うので、仕方なく座らせて、図鑑を眺めていた。昆虫の図鑑で、世界一大きな蝶とかセミも載っていて、俺も夢中で読んでいた。しかし、美咲ちゃんの親が心配するし、そもそも下校の付き添いをさぼって、俺はここにいるので、「家まで送っていくよ」と言った。すると、美咲ちゃんは俺のところに泊まるとまた突飛なことを言ってきたので、訊かずにはいられなくなり、しかし答えにくいことは訊きたくないので、「家は嫌いか？」と訊いた。
美咲ちゃんはとてもたくさんの量の涙を流し始めたので、俺はただ抱きしめてあげることしか出来ず、適切な言葉を探した。美咲ちゃんは「家は嫌い。お母さんもお父さんも学校も大嫌い」と泣きながら答えてくれた。何度も繰り返して、親は嫌い、学校は嫌いと言い続けていた。かなり痛々しい光景で、先生が図書室に来たほどだった。俺は、
「解決しますので、下がって」と先生を下がらせて、美咲ちゃんを撫で続けた。それでいい。憎悪をすべて吐き出せばいいのだ。人はしきたりに縛られて、辛い思いをすることもある。人を悪く言ってはいけない。親には感謝しないといけない。そういうしきたりは何

が何でも守らないといけない。そう教えられる。だが、俺はそうは思わない。美咲ちゃんを見てそう思った。美咲ちゃんは本音をただ吐き出している状態だった。ただそれだけのことなのだ。それで楽になれるのなら、すべて吐き出してしまったほうがいい。美咲ちゃんは二十分以上も泣き続けていた。美咲ちゃんにとって、親は嫌い。学校は嫌い。というのは本音なのだ。それを隠して、苦痛を得ていたのなら、それを吐き出してしまえばいい。そしてそういうものが美咲ちゃんを苦しめているのなら、俺はひとつの決心をした。親も学校も嫌いでどこにも安らぎの場がないのなら、自分がその場になろうと思った。美咲ちゃんという一人の少女を助けるためだけに俺は全力を尽くそうと思った。

俺はすべてを切り替えた。すなわち、客観的な論理など、もはやすべて捨てていい。いや捨てなければならない。美咲ちゃんのためだけの自分を作ることにすべてをかけた。それが俺の役目なのだろう。たぶん、俺は感情移入しただけなのだろうが、美咲ちゃんという一個人を助けるためだけの人間になろうと決めた。それからの俺は普段とさほど変わらなかったと思うが、美咲ちゃんだけを見るようになった。最初は四年生全員を見ていた。とはいえ、そう決心しても、恐らく、そんなに変わらなかったはずだ。というのは、俺は自分からは話しかけない。滅多なことでは話しかけないのだ。美咲ちゃんにしても、それ以来、俺から話しかけたことはほとんどない。俺は生徒を中心に捉えたかった。だから、生徒が俺に話しかけやすいように、俺を相手にしたら、精神的苦痛が絶対にない。そんな状態を作りたかった。だから、俺は向こうが話しかけてくるのを待つという体勢はここに来た日から変わっていない。

ちなみにその日、俺は美咲ちゃんを家に送った。美咲ちゃんが親を嫌うなら、俺が親に代わって、愛情を注いでやれるように。それを主眼に置いた。

俺は弱者には意外に好意を持たれることに気付いた。弱者と強者の境界は紙一重ではなくかなりはっきりしている。

俺は生まれて、今まで、友人などろくにいなかった。周囲はみな強者だった。悩みがあったにせよ、強者に変わりはない。俺は美咲ちゃんを家に送った後、強者を犠牲にしてでも、弱者のためにありたいと思った。教室に来ている生徒はみな学校で馴染めなかった弱者で、非常に強い苦痛を持っている。俺はそういった子の味方だった。

その翌日、美咲ちゃんは普通に登校してきていた。算数の授業中も普通だった。その日、６年生が何人かやってきて、「ボールの空気が抜けた」と言ってきた。そこで、「空気を入れるから手伝ってくれ」と言って、空気入れをし始めた。俺は、「これで、風船を膨らませてみないか」と言って、九月初期から引き出しに入ったままになっていた風船を持ってきて、爆発させた。そういうことをしていたから、俺は「面白い」というイメージを持たれていたらしい。その日もサッカーがあったのだが、十月に入って、下校時間がまた絞られる結果となった。サッカーが終わるまで、美咲ちゃんはずっと待っていたので、「一緒にやってみるか？」と声をかけると、「見るのがいい」と答えた。けれど、下校時間になって、人がいなくなると、美咲ちゃんはサッカーボールを持ってきて、「一緒にしたい」と言ってきた。下校時間なので、俺はＭ先生に怒られてしまうが、美咲ちゃんのためにも、こっそりとリフティングのやり方を教えた。俺自身、６２回とか１０８回とかばらつきがあって、うまく出来るわけではないので、「四回やってつかめたらすごい」と言った。美咲ちゃんは二回目で前に飛ばしてしまって、うまく出来なかったのだが、何度も繰り返していると、ようやく前ではなく上に蹴り上げるコツを掴んで、六回や八回など、出来るようになっていた。

それから、美咲ちゃんを家に送っていった。美咲ちゃんの両親共に俺は話をしたことが何度かあるが、すごく丁寧だし、優しいししっかりした親だ。それでどうして美咲ちゃんがこんなふうになったのか。俺にはすぐ分かった。俺の場合とすごく似ていた。俺の親もすごくしっかりしている。だが、しつけをしっかりする。愛情を注

ぐ。そういったことが親の立場と、子供の立場ではまったく違う。ピーマンが好き、嫌いと同じで、親が愛情を注いだと思っても、子供は全く愛情を受け取っていないこともある。そのようなことが繰り返されたことと、後ひとつは、美咲ちゃんが言っていたことなのだが、「すぐ怒る」ということだった。俺の親もすごく怒る。しかも相当怖い。美咲ちゃんも「怒ったらすごく怖い」と言っていた。怖いと言っても、漫画的な怖さとは桁が違う。俺もよく知っている。ライオンを見ての怖さと親に怒られる怖さでは違う。幽霊を見ての怖さも違う。親の怖さとはまたすごく特別なものだ。だから、俺は「決して怒らない」親が絶対に必要だ。

頭がやや悪い段階のもの（ほとんどの日本人だが）は「怒らないと子供は甘える」と思うらしいのだが、それは全く違う。子供が甘えることと、怒るとは相互性はまるでない。なぜなら、そういうものは子供の観点で捉え方が異なるからだ。相対的だから、この子にとっては怒られるはこう映る。別の子にとっては怒られるはこう映る。そして、それが０から１００まで変わってくる。ある子には、希望に映るかも知れぬものが絶望に映ることもある。だから「怒らないと子供は甘える」のではなく、「怒らないと甘える子供も存在する」が論理的な言い方である。美咲ちゃんはそのタイプではない。美咲ちゃんは現時点では、人間や社会に対して強い恐怖を覚え始めている。「怒る」ことで、慢性的な恐怖を覚えるようになっていた。だから、俺は決して怒らないことにした。またすべてのタイプにかなり平等（誤差や例外はある）に効果が現れるのが『論理』なのだ。俺は、それを強調して、美咲ちゃんに当たっていた。「ご飯を食べる理由」「食べすぎが悪い理由」「カップラーメンばかりだと体に悪い理由」理由なしに理解している人が多いのが日本人だから、日本では『頭が悪いほうが社会では生きやすい』のだ。日本という国は『多数派が支持され、少数派は淘汰される』し『頭が悪い者のほうが多い』から賢くなることで、『淘汰される』。そういう国を瓦解させてしまいたいと俺は思っている。とはいえ、俺は美咲ちゃん

を守ることだけをただ考えていたので、そういうものは二の次だった。俺にとって、景気がよくなるとかそういうことはどうでもよく、ただ、絶望する人が少なくなってほしいと願っていた。そのためには、国民が『思考力、想像力、論理力』の底上げをしなければならず、教育制度の見直し、初頭教育を『具体例の暗記から論理的解釈』へ移行させることを最も急ぐべきものと考えた。頭が悪い者などはゆとり教育が『頭の悪い人間』を生産していると考えるらしいのだが、実はほとんど関係ない。ゆとりでなかった時代は学習内容で言うと、『高校数学ではBに確率分布、Aに数列を導入している』などで、残念ながらそれが『自然科学・数学の発展に貢献している』とは言えない。要するに環境が変わってしまったことが原因なのだ。『自然科学の発展、経済学の発展』などはゆとりか否かは関係ない。そういうものを発展させる者は、サヴァン症候群だったとか、一部の分野に情熱を注いだとか『ゆとり教育か否かとか、社会の犬を作るための制度』から切り離された部分にある。娯楽の質が上がり、若者の選択的集中力が上がったため『学力は下がった』が『頭が悪くなったわけではない』『学力が高くても、何かを進歩させられるわけではない』ゆとりだから、ゆとりでないからは『犬の質』に変化はあっても『天才』を増減させる効果はない。だから、ゆとり教育は『選択的集中力の上がってきた世代』にしてみれば、よい政策だった。逆に『初期から犬志望の者』にとってはゆとり教育は『弊害』だったというだけの話なのだ。『論理力』を身に付ける教育制度にしないと、『不平等な社会』は継続していくし、『戦争はないが和平のレベルでは戦争時代よりひどい』ことにもなりかねない。

　そういうことがあって、俺は美咲ちゃんだけを守るように務めた。美咲ちゃんも俺の前ではかなり色々なことを話してくれるようになったし、笑ってくれるようにもなった。
美咲ちゃんは感性の鋭い子で、「いい人以外からは褒められるのも嫌」と言っていた。親が怒るのも嫌で、優しくされるのも嫌だと言

っていた。つまり、美咲ちゃんにとって、それらは取り返しのつかないほどに怖いものになっていたのだ。育ててもらうことに、感謝の念は沸かず、恐怖だけが募るようになっていたのだ。こうなってしまっては、美咲ちゃんのように考え込む子に心を開かせることはまず無理だ。無理をして、さらにおかしなことになりかねない。俺は親が嫌いでもいいと考えていた。その代わりを自分が出来ればいい。少なくとも、安心を感じられる人間がこの世に一人いれば絶望は感じない。

運動会はイマイチ盛り上がることもなく終わった。これだけの少人数で、しかも、意欲的な子供が少なかったから仕方がないのだが。それからは、放課後、美咲ちゃんと過ごす時間が増えて、図書室で色々な本を読むようになったのだが、美咲ちゃんは俺にかなり特別な好意を持つようになっていて、「キスをしてみたい」と言ってきて、戸惑った俺は「それは成人式を迎えないと出来ないことで、それより早くすると、警察に捕まってしまう」ととてもおかしなことを言ってしまったのだが、その頃から、美咲ちゃんの好意が踏み込んだところにあることは分かった。

俺は対策を考えていたのだが、E先生に『キスを迫られたらどうすればいいか？』と相談することは出来ず、俺は悩んでいた。倫理的な干渉がなければ、別に減るものでもないし、身体にダメージを与えることもないので、してもいいのだが、それがエスカレートさせるスイッチになる可能性もあるから、俺は完全に避ける方法を考え始めた。

それと時を同じくして、康平君が風邪で休むようになっていた。俺は給料が入っていったから、何かをお見舞いに持っていこうとA市の果物専門店を見ていた。

「風邪のときに食べても問題がない果物でオススメはないか？」と俺は店員に聞いたので、店員は困って、「ちょっと専門外ですね。知り合いのかかりつけ医に聞いてみましょうか」と笑いながら言われたので、お願いしますと言うと、その店員（３０代前半ぐらいか

と思う）は本当に電話をして、「オレンジなどどうですか？　ナシは硬いから」と言って、オレンジを持ってきてくれたので、「もらいます。後、サプライズになる果物はないですか？」と言って、驚くほど大きなさくらんぼを買っていった。

康平君はほとんど元気になっていて、持ってきたさくらんぼに興味を持ったらしく、おいしく食べていた。

美咲ちゃんの件は解決策を手に入れないままで、しばらくはその話題から遠ざかっていた。とは言え、露骨に身体の接触を求めてくるようになっていたから、俺は解決策を見つける必要があると思って、M先生に相談したのだが、M先生も「そういう問題は難しい」と頭を悩ませて、「仮にキスをしたとしても、絶対秘密にしておかないといけない」と行為の後のアドバイスをもらった。それからさらに数日は、その話題から遠ざかっていた。ただ、俺がクラスにかなり馴染むと、かなり多くの生徒の要求を受け付けるようになっていて、ほとんど毎日、俺のところに生徒が来た。六年生に「スポーツ選手になりたいから、色々と教えてほしい」という子がいて、その子は足がかなり速い子で、運動会前は５０メートルは７，３秒で走っていた。それで、どんなスポーツがいいのかと聞くと、「なれたら、何でもいい」と言うので、俺はアドバイスに困った。やや昔は、運動生理学を学んでいて、どういったスポーツで、どのような力が必要で、どこを鍛えたら、これだけの力が発揮されて、というようなことを半ば知っているのだが、それらがスポーツの競技によって、異なるので、ひとつに決められなかった。

「どんなスポーツが好きか？」と訊くと、「走ること」と言うので、恐らく短い距離のことだと思い、「百メートル走の選手などはどうか？」と訊くと、「それがいい」と言うことになった。俺は「才能」という言葉を使うのが嫌いで、才能の問題なら、それを数学的に示されないと納得出来ない人だった。つまり、「あなたの神経の反応速度はこれだけで、努力でこれだけしか伸ばせない。すると、絶対に足りない」と言った感じだ。しかも「どすいて努力でこれだけし

か伸ばせないのか？」という質問にも答えてもらえないと納得出来なかったから、俺は「無理とも出来る」とも言わず、「将来、１００メートルを１０，５より速く走れるようになったら、十分チャンスがあるよ」とだけ言って、「今、何をすればいいか？」と訊かれたので、「長く走らないことと、短く、全力で走ること」とだけ言っておいて、「色々なことを勉強しないといけない。怪我のこと、練習のこと、栄養のこと。怪我のことを勉強するために、理科を勉強しないといけない。理科を勉強するために算数を勉強しないといけない」などとけっこう長いことを言った。その子は真剣に聞いて、深くお礼を言ってくれた。親に言っても、頑張れとしか言ってもらえなくて、不安だったとも言っていた。とはいえ、夢で人生を瓦解させるものもいるから、俺は正直、あまりその気にさせたくはなかった。ただ、夢で人生が瓦解したというのはひとつの見方に過ぎない。むしろ、夢で人生を過ごしたというほうが正しいかもしれない。

とにかく、俺がその子に何度も言ったのは「走るのは、一時間だけ。走りすぎると、逆に遅くなる」と言うことと、「毎日、練習しないで、休養を取る」ことだった。

四年生の中では、みそらちゃんと洋子ちゃんがよく俺のところに来て、洋子ちゃんなら「勉強を見てほしい」、みそらちゃんなら「将来が不安」などといった感じだった。

俺はみそらちゃんもかなり心配していた。というのは、みそらちゃんの親は小学校に戻ってくれるようにと願っていて、みそらちゃんから聞くには「早く小学校に行けるように」と言われ続けているようなのだ。「学校は嫌な人がたくさんいるから行きたくない」とみそらちゃんは俺に言ってくれた。みそらちゃんも涙を流していたので、俺はかなり痛切な思いになって、一度、親と話をしないといけないと思ったのだが、俺は正直、この面会ですごい体験をした。

これはちょっと先の話なのだが。みそらちゃんの親と会って、論理的に「小学校には無理して行かせなくてもいい」ことを述べたのだが、みそらちゃんのお父さんはなぜか、テレビのリモコンを持っ

てきて、俺に渡し、電池を取り出してみろと言う。かなり口調が怖いのだが、言うとおりにすると、「電池を貸せ」と言う。渡すと、投げつけられて、「学校に行かなくてもいいとは、馬鹿にしとんのか」と怒鳴られ、「落ち着いて話をしよう」と言っても聞かず、お母さんが何とか止めて、「今日は帰ってください」と言われ、俺は帰った。それから、みそらちゃんはかなり怒られた様子で、次の日、かなり元気がなかったが、それでも俺のところに来て、放課後にずっと泣いていた。ずっと泣くのを我慢していたみたいだった。

そんなことがあって、俺は美咲ちゃんだけでなく、みそらちゃんのことも考えなければならなくなって、かなり複雑なことになってしまった。

そんな感じで美咲ちゃん以外にも注意を向けていると、美咲ちゃんが、俺のことは嫌いだと言って、本を投げてきて、最後は川のほうまで走っていってしまって、俺は追いかけることになった。「ごめん」と謝っても、最初はほとんど聞いてくれなくて、五時を回った頃からようやく機嫌を取り戻してくれて、家まで送っていった。そんなことがあって、次の日は美咲ちゃんと洋子ちゃんが引っかき合いの喧嘩をしていて、K先生が止めたらしいのだが、俺はその頃、教室を出ていて、いなかった。原因が分からないとK先生は言っていた。俺のことだろうと思って、美咲ちゃんと放課後話をした。

俺が構ってくれないからと言うので、謝ると、「この前、待ってたけど、来なかった」と俺を非難してきた。いつのころだろうと、遡ると、１０日ほど前のことだった。俺はもう忘れていたけれど、美咲ちゃんは覚えていた。俺は美咲ちゃんを守ると言っていたが、傷つけてしまっていた。俺は反省し、放課後は美咲ちゃんと過ごすことにして、サッカーにも顔を出さず、相談も忙しいと言い、日誌も、K先生に「お願いします」と言って、美咲ちゃんに付き合うことにしたのだけれども、１１月になって、音楽会のことが決まり始めると、また例の話題が再発してしまった。

放課後、美咲ちゃんと本を読むのが日課になっていた。本を読むと言っても、美咲ちゃんは俺にもたれて、寝てしまうことが多くて、時間を俺と過ごすことに重要な点があったのだ。普段はほとんどどうでもいいことを話している。

「昨日の夜、家にキツネがいた」と美咲ちゃんが言って、「どのあたり？」と聞き返すと、「川のほうに走っていった」と言うので、「エサあげたら懐くかも」と言うと、「何を食べるの？」となって、「やっぱり肉かな」と答えて、「牛肉とか？」「そうそう」「生でもいいの？」「うーん、焼いてあげたほうがいいかも」「焼いてる間に行っちゃう」「そっか、じゃあ、最初から出来てるやつのほうがいいか」「冷凍？」「缶詰とか」「私、缶詰開けられない」「やっぱり生でもいいかな」とそんな感じで続くのだが、他には「蛇に噛まれた」とか「好きな食べ物」とかあまり難しくない会話をしていた。

その日も本を読みながら、英語の話になったのだが、その佳境あたりで、「漫画で、中学生でもキスをしていた」というので、俺は言葉に詰まって、「漫画だから」と言うと、「漫画はよくて本当（現実の世界のことだろう）はダメなの？」「そうなんだ」と答えるほかなくて、俺はあまりに露骨な回避をしているのではないかと思ったのだが、こういう状態ではうまく論理を組み立てられずにいた。「漫画になったら」と言ってきたので、俺も誤魔化すのが難しくなって、「絶対内緒。約束出来る？」と訊いて、美咲ちゃんは出来ると答えたので、俺は椅子を引いたのだが、椅子が摩擦力のせいで、なかなか引けなかったので、２５キロほどの美咲ちゃんを持ち上げて、机の上に座ってもらって、俺は低い体勢から、美咲ちゃんの後頭部を引き寄せて、ほんのわずかだけ、唇を重ねて、すぐに離した。驚くことでもないが、四年生になると、女の子としての機能は完成していて、フェロモンというものか、俺にはよく分からないが、そういう匂いを感じたので、俺はかなり興奮してしまい、顔も体も熱くなっているのを悟った。「家まで送っていく」と言って、俺は冷

静を装ったが、ほとんど興奮を覚ます効果がなくて、それが性的興奮だったことを罪に思いながら、美咲ちゃんを家に帰した。その間、会話はなくて、とてもぎこちなかった。

俺はもはや仕事が出来る状態ではなく、県に提出しなければならない書類も書かずに、家に帰ってしまった。体の様子がおかしいので、しばらく何も考えないようにしていたのだが、ほとんど効果がなかった。ほとんど水面に唇をくっつける程度のものなのだが、感触ではなく、精神的なものが俺をおかしくしていたのだ。

だから、俺が立ち直るのはまず不可能で、後悔が強かった。美咲ちゃんのほうはどうだったのか、それを考えるのも怖かった。

そういうことがあって、11月は極めて、怖い月になった。次の日の授業で、美咲ちゃんはごく普通にしていたが、俺は内心動揺を隠せず、授業こそ、普通にこなしたが、精神状態は不安定だった。

休み時間に美咲ちゃんがやってきて、俺の手を引っ張るので、俺はかなり怖くなって、けれど、平凡を装って、図書室に向かった。

美咲ちゃんは「内緒にしてた」と言ってきて、「そうか、ありがとう」と言うと、美咲ちゃんは落ち着きのない様子になって、行動を迷って、混乱しているような感じで、最終的に俺の袖を引っ張って、「本」と言うので、俺はホッとして、「何が読みたい？」「図鑑がいい」と言うことになった。美咲ちゃんは俺が座るまで、ずっと立っていて、俺が座ると、その上に跨って、頬を胸のあたりに擦りつけてきたのだが、何かの求愛の一種なのか、直感的な行動の一種なのか、とにかく、俺はよく分からないまま、冷静を保とうとするのだが、どうもうまくいかず、美咲ちゃんを引き離して、「図鑑を読もう」と言うと、美咲ちゃんはようやく冷静になって、頷いて、俺の上に座った。もたれてきて、「読んで」と言ってきたので、俺は惑星の大きさのところを読んだ。

それだけで終わったが、美咲ちゃんが混乱している様子なので、M先生に「美咲ちゃんの様子に異変がある。自然にもとに戻るだろ

うか？」と相談したが、「どうおかしいのか」と訊かれ、俺は手短に話すことにしたのだが、「詳しいことは専門家に聞くほかないねえ」

しかし、専門家にこの事情を話すのは気が引けて、独学で探すほかないと思った。

放課後、美咲ちゃんがやってきて、また本を読むことになったのだが、美咲ちゃんが「もう一回キスがしたい」と言うので、慌てて、「今度こそ、警察に捕まってしまう」と言うと、美咲ちゃんは泣きだしてしまい、俺はもはやどうすればいいのか分からなくなって、そもそも正解は存在しない。ここで突き放して、美咲ちゃんが致命的ダメージを負えば、俺の責任だ。だが、倫理の干渉もある。俺はこのときから倫理を徹底的に考えるようになった。生命倫理から、道徳まですべての倫理を考えた。だが、ここでは二つの倫理がせめぎあった。俺が出した結論は『倫理は矛盾している』ということだ。

倫理は矛盾しているから、無限ループになっている。つまり、倫理に従う以上、「解はないし、間違った選択をしてしまうことがある」『目の前に泣いている人がいる。泣いている人がいれば、笑わせたい。小手先の演技では笑わない。それでも笑わせたい』→『笑わせるためなら寿命が縮んでも、警察に捕まってもいい』と言う言葉を俺は思い出したのだが、俺はそれから『倫理や法律の持つ限界』を感じ取った。

今、俺と美咲ちゃんはたった二人の空間に閉鎖されている。だから、外部の干渉は一切なく、あるのは人間の配下で、絶対的に存在するそれらだ。俺はもし、美咲ちゃんに背を向ければ、「俺は俺自身を助け、美咲ちゃんを殺した」ことになってしまう。「俺を殺してでも、美咲ちゃんを助けなければならないのではないのか」俺は自らの多少の不幸で、目の前の少女の一時期の不安とか涙を止めることが出来るなら、喜んで、不幸を取るに違いない。俺は確かに法律を認めている。法律は納得できるし、絶対的にあってほしい。だが、この瞬間、その絶対的なものに従うと、ひとつの輝きを消して

しまうかもしれない。神の配下にあるものは決して背けない。物理法則には誰もが従わなければならない。神様は不平等だと言うものもいるが、それは違うのだ。神はすべてに平等な『法則』を作ってくれた。この世に幸、不幸、平等、不平等があるとすれば、それらを作ったのは『神』ではなく『人間』だ。生まれつきの力だって『神は平等なゲノムの法則を作って平等としている』そう、不完全な『人間』が不完全な『法律』を作ったから、不完全な『世界』になった。ただそれだけのことなのだ。不完全な人間が創った法律が完全になれるはずがない。だから『法律には絶対に従わなければならない』ではなく『法律には不完全な点があり、時には背かなければ最も大切なものを失ってしまう』というわけなのだ。

俺は美咲ちゃんを守ると決めた。だから、そのために禁を破らなければならなかった。だが、それを破っても、俺は誰もが不幸になるとは思わなかった。美咲ちゃんが望み、それを俺が受け入れるというただそれだけのことなのだ。『倫理は不完全』倫理に従うと、大切なものを失う。だから、俺は文系の学問が嫌いだった。完全になれない。エゴイズムのみで成り立ち、そこに絶対がない。俺はそれらを学ぶことに恐怖すら感じた。文系の学問は俺に恐ろしいものを与えた。歴史では戦争の歴史を学ぶのだ。勝手な解釈で言語を文学にしてしまい、勝手な解釈で絶対的法律を作り、勝手な解釈で倫理までも作ってしまった。そのような学問に恐怖を覚えた俺は逃げるように数学を学び、物理学を学んだ。今、その文系の学問がかけがえのない少女を奪おうとしているのか。こんなところにまで手を伸ばしてきたのか。もし、俺がその文系の学問に忠実だったら、美咲ちゃんを、この手で潰してしまうところだったのかもしれない。激しい怒りと恐怖が俺を貫き、俺は神にのみ忠実に生きることを再確認した。

俺はここでどうして文系が嫌いだったのか、それを具体的に感じることが出来たように思う。それらをどうして、俺は避けたのか。心が拒絶したのかもしれない。もし、未来を予知して、今この瞬間、

俺が間違った選択をしないために、文系を拒否したとすれば、俺は今、神に感謝しなければならない。神だけが平等を与えてくれる。間違わない選択をさせてくれる。だから、神に忠実に生きれば『どんな苦痛もそれが間違いでない』のだ。天国も地獄も関係ない。人間の作った法律で天国や地獄が決まるはずがない。『この世は神の創ったルール』だけがすべて。そして、神のルールは反することが出来ない。だからこそ『完全』で正しいものなのだ。だが、もちろん、神のルールから派生した法律だ。俺は何も根本から異論があるわけではない。ただ、どうしてもそれに背かなければならないことがあることを言いたいのだ。

俺はただ美咲ちゃんを守りたいだけだった。

俺は美咲ちゃんに向かい合ったのだけれど、美咲ちゃんはかなり涙を溜めていたので、その涙を拭って、両肩を持って、抱き寄せた。その肩はかなり細く、握ると、潰れるのではないかと思わせた。こうして抱き寄せると、美咲ちゃんのおでこが俺の肩に当たる程度で、接吻を行うには美咲ちゃんの位置が低すぎる。もう少し美咲ちゃんを引き上げようと思うのだが、どこを支えようか迷った。ここまで来ると、緊張が先行して『仕切りなおし』に持っていくことすら難しかった。そこで、まず椅子を引く……しかし引けない。そうしているうちに美咲ちゃんのほうから上がってきて、ようやく目線が同じ位置になったのだが、もう少し美咲ちゃんには上がってきてほしく、右手で美咲ちゃんの腰のあたりを掴んで、左手で押し上げていった。何とか美咲ちゃんが上に見えるようになったので、人間の配下にある絶対的なものを越えることがいつでも可能になった。美咲ちゃんは何も言わずに、俺の肩のあたり、ただし、美咲ちゃんの爪はやや長いので、食い込んできて、それに気が散ってしまい、具体的な場所は不明というあたりを掴んでいる。だが、はたして、これでいいのかという罪の意識が最後まで俺を躊躇わせた。だが、躊躇うことで、美咲ちゃんを潰してしまっていいのか、と俺は何度も心でつぶやいた。

俺はまず右手の位置を考えた。美咲ちゃんの背中に持っていったのだが、人差し指が美咲ちゃんの先端に触れる位置においた。美咲ちゃんの髪は肩下十センチにかかるほどだから、背中の中心あたりか。すると、左手は必然的に美咲ちゃんの首元と決まるので、そこへ左手を伸ばした。

そうして後は、左手がスイッチになる。美咲ちゃんのほうは動かないから、不意の爆発というようなものはなかった。

だが、俺はかなり性的に興奮していた。要するに、相手が子供であるから、決して興奮してはいけないと人間が主張しても、神の創った人体はそうそう簡単にその主張通りに出来ないものだ。とはいえ、俺は美咲ちゃんを守ることがすべてだ。この興奮にしても、美咲ちゃんを守るためのものなのだ。だから、おｓれを罪に置換する必要はない。

ここは閉鎖されている。誰も来ないし、誰も邪魔は出来ない。ここですべてが完結する。だから、これが外部に齎す影響は皆無だった。

「内緒だよ。絶対に」と俺は一言言って、美咲ちゃんの返事を待たず、左手を引き寄せた。だが、恐らく、俺の顔もわずかに近づけたから、予想していたより早く重なったものと思われる。接着と同時に放たれるものもあった。すべての感覚が反応するわけだ。それがすべて第一の興奮により始まった、わずかな面積の接着というものが伝える興奮に最も敏感な状態になっている。

俺たちはなかなかはなれなかったのだが、長時間重なっているうちにほとんど一体化したようになって、自分のものか相手のものかそういう判別も難しくなる。とはいえ、まだ唇は一切動かしていない状態だ。鼻で大きく息をすると、新しい刺激が出現する。この匂いは筆舌に尽くしがたい。何かに近いものを探すと石鹸などそういうものに属するはずだが、人工的なものとは比べ物にならない自然的なものを含んでいる。

一旦解くと、俺はもう美咲ちゃんを一人の異性として捉えざるを

得なくなっていた。要するに、ロリコンでないと、性的興奮などは感じないとか、そんなものは作り話の中でしか通用しない。実際は、ほぼ完成形に近い女性を見れば、その興奮は感じる。問題は人間の配下ではそれが罪になることだ。たとえ、それを拒んで、少女が一人、この世から消えても、俺は『罪』が与えられない。だが、少女を助けるために接吻をしたということが知れれば、俺は『罪』を受ける。これが人間なのだ。こんなものなのだ。人間は。文系はこれが限度なのだ。そして恐ろしく、汚く、醜い。こんなものを俺は信仰していたのか。一時期でもこのようなものを信仰していた俺は、もうそれだけで、自分を見失いそうになる。この醜いものが世界で一番大切な少女の命さえも奪う可能性を持っていたのか。俺にとって、そのようなことは許すことの出来るものではなかった。

俺は美咲ちゃんのもとにもう一度唇を持っていったが、今度の接触で、外部から内部へとその接触が移行していた。不思議なことだが、このような行為において、物理的、化学的に変化することは、単純な物質の交換でしかないのだ。たった一つの交換。それは両方にとって、決して、不利益なものではないはずだ。だが、それを完全に抑圧してしまう人間に俺は一段と恐ろしさを感じた。魔女狩りと変わらないこの抑圧は、人間の配下が、ある一個人の都合で決定されているような気がしてならない。

この接触で、美咲ちゃんは俺を求めようとして、その舌を伸ばしたのだろうが、例えば、その接触が第一の接触より罪を広げるものであるなら、人間は接触そのものではなく、その物質の交換量に罪の深さをおいたことになる。

この接触が悪質だとするなら、俺はその論理が聞きたかった。この接触で、俺は美咲ちゃんから何かを感じ取っていた。それは幸せと呼ぶものなのかもしれない。自殺を繰り返していた頃の美咲ちゃんが得ることの出来なかったものなのかもしれない。それを悪質として、幸せを粉々に打ち砕いてしまうのか。それが文系なのか。もう、俺は恐ろしさでめまいを覚えるほどだった。

第二の接触は第三の刺激を齎していたが、それは耳が感じるもので、その刺激ですら、物理的な音波の性質を考慮すれば、大げさなことではないのだ。理系でものを考えると、いかに人間が他の生物はもちろん、その辺の石ころと『平等』であるかが分かる。人間が石より、蚊よりも身分が高いとしたのは、あくまで『文系』だった。

キスというものは運動なのだ。力学で説明がつけられる。それを文系は改竄を試み、力学で解決させないレベルに持っていった。自然から人工に切り替えてしまったのだ。

美咲ちゃんとの接吻は十分を超えるものだった。行われた行為は物質の交換であり、唾液や口内細菌などが交換されたのだろう。質量に換算して、無視できない量にあたるだろう。コップ一杯の水を超える量かもしれない。それを文系の学問が入り込み、最終的に行為は人間的に禁忌にあたることになる。つまり、もし、文系が神の配下にあれば、絶対的法則を超えてしまったことになる。それほど、大きな行為だったわけだが、その禁忌の中で美咲ちゃんは確かに笑ってくれた。抱きしめたときに、「一生忘れない」と美咲ちゃんはつぶやいた。俺は確かに救えた気がしたのだ。たった一人の少女かもしれない。それにそれはその少女のわずかな間だけかもしれない。寿命が縮まっても、警察に捕まっても、それでも、美咲ちゃんを確かに俺は救うことが出来た。明日になれば、その救いは意味を成さなくなるかもしれない。それでも、俺は今までの人生の中で最も重要な働きをした。文系の抑圧があった。そこで、俺は負けていれば、美咲ちゃんにこの幸せを与えることは出来なかった。俺はたった一人の少女にこの幸せを渡すために、数年も前から、文系を否定し、神の配下に移行し、そして、文系の作り出した人間の配下で、苦痛を受け、生きることにも絶望していた少女に幸せを与えるという事実を成し遂げた。誰にも出来なかったことなのだ。俺は多くを考え、思考してきた。そして、誰もが出来なかった美咲ちゃんを救うことを、俺は成功させた。

俺は美咲ちゃんの親に出来なくなっている愛情を注ぐという役目

を担わなければならない。帰り道の美咲ちゃんはいつもと確かに違っていた。気持ちも表情も確実に晴れ渡っていた。出会ったときの美咲ちゃんは本当に辛そうだった。

それから、俺は確かに美咲ちゃんをいい方向に導くことが出来たと思っていた。思っていたのだが……神は俺を罪深き人間と見たのかもしれない。そうだ。人間ではない。神が明確に俺たちに牙を向いてきた。神の牙は人間のそれとは比べ物にならないほど、徹底的で執拗で、決して逃げることの出来ないものだった。

A5（後書き）

パンダさんも好き。でも猫さんのほうがもっと好き……。

A６（前書き）

日本一まで、あと６２８３話！！

A6

俺は美咲ちゃんにキスを重ねたその日、一回目とは違い、緊張に悩むというよりは、美咲ちゃんの笑顔を思い出して、複雑な気持ちになっていた。明日からの対応の難しさを考えると、悩みが山積みだが、美咲ちゃんの心理状態はいい方向に向かっている。

俺はE先生に『美咲ちゃんがだいぶ元気になってくれた』と送った。M先生もだいぶ心配していた。ただ、俺も明日からどうするべきか、色々と悩んでいた。美咲ちゃんを一人の異性と見ることが可能なレベルになっているのだ。それを押し殺すべきか、貫くべきかだった。とは言え、美咲ちゃんが俺を好意的に見ている点を改善したかった。美咲ちゃんも大人になるわけで、そうなったときには、もっと別の誰かを好きになってほしい。そう願うのは義務的だ。そういう点で、本当に複雑な気持ちだった。

美咲ちゃんが仮に18歳まで歳を重ねたとき、美咲ちゃんの心理がどこまで変わるかが問題だった。もし、変わることがないのなら、美咲ちゃんは人を好きにならないかもしれない。人間に対しては、恐怖の感情しか示せないのなら、美咲ちゃんを守る以上、俺がそこを埋め合わせなければならないのか。そうなる場合、俺は美咲ちゃんへの好意を明確に示さなければならない。

先を見ても仕方がない。俺はとりあえず、算数の予習を始めた。内容的にはまだ分数を抜け出していない。面積を習い始めたが、面積は康平君など算数が得意な子でも難しさを感じた。特に、どうして、そういうふうに面積が求められるかを教えるのが、なかなか難しくて、困っていた。というのは、1平方センチメートルがひどく抽象的なので、子供達はよく分かってくれない。俺もよく分からない。1センチ×1センチの正方形が1平方センチメートルと言われても、それを1個、2個というレベルでは考えにくい。

面積を個数でみなすことを教えたいと思い、1平方センチメート

ルをたくさん用意した。

翌日、朝から美咲ちゃんと顔を合わせたのだが、美咲ちゃんは露骨に恥ずかしがっていて、休み時間のときに、俺と付き合ってほしいというのだ。唐突であったが、美咲ちゃんはかなり人間的な表情になっていたし、純粋な好意からの告白だと思った。ようやく立ち直りかけている相手に否定の返事は難しかった。倫理は決して許さないだろうが、俺はそんな文系の考えに縛られて、美咲ちゃんを潰したくなかった。美咲ちゃんを泣かしたくはなかった。倫理程度のくだらないものに、少女の人生を支配する力などない。俺はそう思った。もし、あるのなら、俺は倫理を破壊するための運動を全力で行うだろう。

付き合うということは、要するに男女の意味で交際しようという意味だろう。付き合った瞬間から、何かが変わることはまずない。だから、俺は快く受け入れたのだ。美咲ちゃんはすごくホッとしていた。その点から見ても、美咲ちゃんの状態はまだ不安定でいつでも崩れる可能性があった。それを崩れないように、丁寧に支える。力を入れすぎても抜きすぎてもダメだ。美咲ちゃんだけに真剣に向き合っていないと支えることは出来ない。

付き合うことになって、俺の恋人が美咲ちゃんということになったわけだ。美咲ちゃんから見ると、俺は彼氏という存在になるわけで、これは特別な関係といえる。だが、俺は美咲ちゃんを守ること。これがすべてだった。

俺は美咲ちゃんが人間の彼女として、一番目になったわけだ。俺は女の子と付き合うということはなかった。俺は大して、優れていなかったから、学生など、アイドル恋愛の全盛期には誰とも付き合うことが出来なかった。猫とは正式に付き合ったわけではない。俺は強者とはまずかみ合わない。俺が高校生のときなどは、みんな周囲は強かった。強者か強者同士勝手にやればいい。俺は弱者にしか興味がない。強者は恋愛に暇つぶしとかそういうものを求める。だ

から飽きたら別れるのだろう。付き合って、すぐ別れるのは要するに、余裕がある証拠で、強者の証拠でもある。弱者は恋愛そのものが、二人でないと成立しないものとなる。つまり、支えあわないと立つことも出来ない。そんな感じなのだ。だから暇つぶしで付き合うことなど出来ない。それに人生をかけなければならない。弱者は強者より弱いが、絆は弱者のほうが数倍強い。

俺のような弱者には現在の『破局』とか『離婚』が理解できない。特に『離婚』は理解できない。子供いないならマシだが、子供が出来ていれば、『離婚』は子供の『ハンディキャップ』だ。これは明確に『チャンスを失う』ものだ。チャンスを奪うものは『犯罪』だ。離婚は持ち出した側が『子供』に対して、罪を償わなければならない。それなのに、『離婚は相手側に慰謝料を払うだけでいい』というのが法律なのか。

長いスパンで影響があるから、傷害よりも重罪に当たるはずの『離婚』が犯罪ではないなんて俺には考えられない。法律を考えた者の頭がおかしいとしか思えない。離婚をして、子供がいれば、子供に対して、とてつもなく大きな謝罪をしないといけない。だいたい、４５００万～一億二千万円は支払わないといけないと思う。

俺は破局ですら信じられないぐらいだから、離婚を見ていると、恐ろしくなる。子供のいる家庭の離婚は恐ろしい。だが、離婚しないことで子供に迷惑がかかるのなら、離婚したほうがいい。やはり、そういうことにならないような絆が必要なわけだ。絆を数値化出来ない現代では、結婚しない若者が増えているのはいいことだ。結婚して、離婚するぐらいなら結婚しないほうがいい。日本人が減っても、『不幸』が増えるよりマシだ。

美咲ちゃんと付き合うようになったのだが、特に何かが変わったわけではなかった。俺はいつも通りにしていた。俺はK先生の手伝いだが、色々な話を生徒とするようになっていた。学校が嫌になった理由を本音で知りたい俺は、二学期から今日まで、生徒に心を開いてもらうことに全力を注いだ。だから、俺は生徒に話しかけやす

いと思われるようにしてきた。生徒が言ってくれた学校が苦痛になった理由、それらに多く共通するのが、恐怖だった。
「学校の先生が怖い」と将太君は言ってくれた。「すごく大きな声で怒鳴られる」と言うのだ。俺はそういう教師が一番嫌いだ。頭の悪い教師に多いのが『暴力や大声で生徒をしかりつける』もので、すぐにでも解雇にしてやりたい。『権力』を行使して、生徒を支配するのはいわば『奴隷社会』と同義で、『人の命』の大切さすら分かっていない者のすることだ。これらの権力で、圧倒的恐怖を受けた生徒がすごく多いのだ。もうひとつは、みんなの前で立たせたり、給食を食べるまで、教室に残させたり、そういうクズ教師のせいで、すごく大切な子供たちの大切な時間を苦痛で埋め尽くしてしまった。どうして、そういう教師を『犯罪者』として捉えないのか。彼らの小学生の時間を何だと思っているのか。俺は腹が立って仕方なかった。彼らの時間を奪っただけではない。人生そのものに多大な影響を与え、チャンスを奪ってしまったのだ。『無期懲役』では軽すぎるぐらいだ。俺は美咲ちゃんを見て、もうその怒りを抑えきれなくなった。美咲ちゃんを守ると決めて以来、俺もおかしくなってしまったのだ。美咲ちゃんを傷つけた連中たちが許せず、怒りを抑えきれなくなっていた。人間、あまりに保守的になると、理性がおかしくなってしまうのかもしれない。俺は理性がおかしくなっていたのか、美咲ちゃんと帰宅するとき、美咲ちゃんにぶつかっていった男がいた。美咲ちゃんの手前堪えたが、危うく決して使ってはいけない拳を使いそうになった。ただぶつかっただけで、美咲ちゃんが大きな怪我を負ったわけではない。しかし、美咲ちゃんがぶつかってよろめいただけで、俺の防衛本能は働いてしまった。本当に怒りを抑えるのが難しく、さらに何度も美咲ちゃんの身を案じた。
　この時期から、俺は美咲ちゃんのことを四六時中意識するようになっていた。もし、美咲ちゃんを傷つけるものがいたら、恐らくはそいつを許すことが出来ない。
　そんな不安定な状態になった俺は美咲ちゃんが「すごく嫌だった

先生がいた」と言ったとき、その教師を許せなくなった。

俺は美咲ちゃんと付き合って、理性そのものがおかしくなっていた。つまり、美咲ちゃんの敵に属するものはまるで、大悪人のように見えて、許すことが出来なくなった。論理的にものを考えられなくなり、俺は美咲ちゃんの通っていた小学校に行き、美咲ちゃんが三年生だった頃の教師を出せと俺は用務員に怒鳴るように言って、もたもたしている用務員に腹が立って、早くしろ！　と大きな声をあげた。幾人かの教師が注意に来たけれど、「人の人生がかかってるんだ。口を慎め」と言い返して、弱そうな教師を壁に吹き飛ばし、三年生の担任だったという教師を裏庭まで連れて行って、ひどくおかしなことを言ってしまった。「どう責任を取るのか？」と言うと、その教師は何も答えなくなり、「お前の責任だろ。教師辞めろ」などと、あまりにおかしなことが口から出てしまうのだ。しかし、俺の理性は完全になくなっていた。ただ、美咲ちゃんの敵、それは大自然での草食動物が肉食動物を相手にし、理性を失った草食動物が肉食動物を食らおうとしている図に似ていた。俺は何度か拳を振るい、別の教師が止めに来て、ようやく俺は冷静になれた。この件が問題にならなかったところに、向こう側の反省が見える。だから、俺は何とか怒りを抑えることが出来た。

こんなことがあったことは美咲ちゃんには言わず、E先生とM先生のだけ言った。冷静になると、自分のおかしさにようやく気付けた。俺は決して怒らない人間になることを志していたが、もはやそんな理性の中で考え出された理想など、あの時点ではなくなっていた。美咲ちゃんに対する並々ならぬ思いが尋常でないことを悟った俺は美咲ちゃんと接することに何か恐怖を感じるようになっていた。

人が人に向ける愛。その愛が弱いうちは冷静さを持てる。俺は美咲ちゃんと会うまでは、尋常ならぬ愛を持ったことなどなかった。美咲ちゃんと出会い、理性を失うほど防衛の本能が目覚めた。俺自身分かったことは、愛が高くなると、もはや冷静な自分はなくなり、

あるのは防衛のための本能という状態になってしまう。
人は勝手なことを言う。「本当に愛があるなら冷静でいられる」など。しかし、それらの言葉が真実か。否。世の中のいかにも名言じみた言葉はすべて『相対的に正しいのであって、絶対的には正しくない』つまりは『嘘』だ。
少なくとも、美咲ちゃんを守ろうという思いが高くなると、冷静にいられなくなった。美咲ちゃんが少し落ち込んだり、怪我をしたりすると、俺はひどく怖くなった。
美咲ちゃんと付き合ってから、少しの日が過ぎて、付き合っていなくてもいても変わらないことに気付いて、俺は美咲ちゃんをデートに誘ったのだが、デートと言っても、休日にどこかに連れて行ってあげようという感覚だった。「どこに行きたい？」と訊くと「どこでもいい」と言うので、「適当に歩いて、ついたところにするか」と言うと、「それがいい」ということになった。
そんな感じでデートが決まった。俺の手元に１７万８０００円が使われず、おいてあるので、お金には困らなかったが、たぶん、お金はそんなに使わないだろう。休日、美咲ちゃんの家に行って、そこから歩き始めた。
俺はＫ先生などに色々と名所を教えてもらっていたので、Ａ市の土地勘はかなり身についていた。「どっちに行く？」と訊くと、「こっちがいい。行ったことない」というので、駅と交番の間を抜けて、歩いていった。
しかし、歩くだけで、特別何かしたわけではない。美咲ちゃんが「手を繋ぎたい」と言うので、繋いで、工場などがあるところに行って、それからごく小さな公園に入った。
「何かほしいものはないか？」と訊くと、美咲ちゃんは少し考えて、「キツネ」と言った。あのときのキツネのことだろうと思って、「キツネを捕まえに行くか」と言うと、美咲ちゃんはコクリと頷いた。
それで、俺たちは美咲ちゃんの家の近くまで戻ってきて、川辺に向かった。キツネは出てこなかった。

「どのあたりにいたの？」「ここから、こっちに走っていった」と言うので、その方向を見ると、林があった。
「夜にならないと出てこないな」と言うと、「夜まで待つ」と美咲ちゃんは俺の手を離さなかった。五時までに帰ると親には言っていたので、とても困った。
「また明日もあるから」と言っても、美咲ちゃんは聞かなかった。俺も美咲ちゃんといれるほうがいいので、特別、異論があるわけではない。俺は美咲ちゃんを背負って、何とか家まで送った。
　そんな感じのデートだった。次の日、美咲ちゃんはすごく楽しかったといっていた。美咲ちゃんと接する機会が増えて、俺は確実に美咲ちゃんに対する好意を高めていた。家に帰っても、ほとんど美咲ちゃんのことばかりを考えているし、美咲ちゃんのことが心配でならなかった。
　１１月２１日が美咲ちゃんの誕生日なので、俺は「何かほしいものがあるか？」と美咲ちゃんに尋ねた。「キツネ」というので、俺はペットショップに「キツネを売っているか？」と訊き、「ない」と言われ、「野生のキツネは懐くか？」と訊くと、「あんたキツネ好きか？」と怪しまれた。「猫が一番です」と答えると、「猫とキツネはあかんで」と言われた。インターネットで調べると、けっこうあったが、海外だった。ワニや蛇も売ってあったので、驚いた。
「キツネのぬいぐるみではダメか？」と訊くと、「それでもいい」と美咲ちゃんは答えた。とはいえ、実物がほしそうだったのは見て取れた。俺はインターネットで、キツネのぬいぐるみを探したが、「好みのぬいぐるみを作ってくれる会社がある」と言うことを知って、そこに「リアルなキツネのぬいぐるみを作ってほしい」と依頼した。「予算は？　資料は？」と訊かれ、俺はキツネの画像を送った後「２０万ぐらい」とメールを送った。「１７万ぐらいで作れる」と言うので、「お願いします」と注文を確定した。１７万でキツネが入るなら安いものだ。ぬいぐるみが出来るまでに時間がかかるので、美咲ちゃんに「少し待ってくれ」と言った。「いつでもいい」

と美咲ちゃんは答えてくれた。
俺は美咲ちゃんにほとんど掛かりっきりだった。俺は美咲ちゃんに一途になっていた。美咲ちゃんと付き合っているのだから、それも普通かと思ったが、倫理的な抑制がこの頃ようやく出てきた。「美咲ちゃんと放課後会うのはやめてくれ」というようなことを言われて、「美咲ちゃんのため」と言っても、通用しなかった。俺はそれなら辞めるとまで言った。しかし、教育委員会は「本当に必要なこと」より「人間的配下の規則」を重視するので、「法律をやぶると、１０００人が助かる」状態でも、「法律をやぶってはいけない」と言う意識があり、「法的事件にならないうちに」と言ってきた。「児童に対する猥褻な行為」だと言って、どこの馬の骨とも分からない連中がやってきた。「そんなことはない」と俺は言っていたのだが、どこから聞きつけたのか、「児童と個人的に交際すると、懲戒免職になる」と言ってきた。どこか、美咲ちゃんが苦しめられているような気がした俺は防衛本能が理性を失わせて、「盗聴していたのか」と言った。
美咲ちゃんの親がすごく怒って、「娘に二度と近づくな」と言い、俺は美咲ちゃんとの交際を断ち切られようとしていた。俺は美咲ちゃんのことが好きだったし、美咲ちゃんも同じだろうから、「美咲ちゃんのために絶対必要」ということを何度も説明した。論理が通らないことが苛立ちを呼んだ。まるで、圧倒的な力で押さえつけてくるような相手の態度。人間が俺に襲い掛かってきた。文系の逆襲だった。それは俺を絶望させるものだった。
話だけで終わり、俺がやめさせることはなくなったが、俺は美咲ちゃんと付き合うことが出来なくなってしまった。俺は美咲ちゃんを手放したくない。だから、次の日、放課後、美咲ちゃんに会って、「僕と会えなくなるのは嫌か？」と訊くと、「どうして会えなくなるの？」「美咲ちゃんと付き合ってはいけないと言われたんだ」「どうして？」どうしてだろう。それとなく理由は思い当たるが、俺は『美咲ちゃんを守ること』にすべてをかけていたから、いけない

理由が見当たらなかった。まるで、権力で押し付けられた。そんな感じだった。俺はそんな『三国干渉』より、もっと理不尽な干渉など無視しようと考えた。俺が美咲ちゃんと付き合ってはいけないなんて、そんなことを他人に言われたくなかった。美咲ちゃんは不安になって、泣いてしまった。だから、俺は「僕はそんなこと無視するから、また会えるよ」と言って、頭を撫でてやった。

俺は美咲ちゃんを泣かせた人間を許せなかった。美咲ちゃんを傷つける奴はすべて敵。美咲ちゃんを傷つけるような奴の言いなりになって溜まるか。美咲ちゃんは俺にしか救えない。その俺がそんな人間に負けるわけにはいかなかった。

後日、アパートに大きな包みが届いて、それがぬいぐるみだと知って、美咲ちゃんの家に届けた。かなり大きい。８０センチ以上のキツネだ。毛並みからして上等で、写真と同じだった。美咲ちゃんのお母さんは俺にいいイメージを持たなくなっていたが、そんなイメージは関係ない。美咲ちゃんの部屋に運んだのだが、美咲ちゃんはかなり気に入ってくれて、そのときの笑顔は幸せそのものだった。俺のことを「大好き」と言ってくれて、俺も「大好き」と返した。そうだ。好きだから付き合っているのだ。それを差別みたいに引き裂かれて溜まるか。

結局、俺は美咲ちゃんと交際を続けた。放課後にはほぼ毎日会っていたし、キスの回数も数え切れないまでになった。だが、それを快く思わず、親が俺のことについてなにやら、美咲ちゃんにデマを流しているらしいのだ。俺といると病気がうつるとか言っているようなのだ。俺は人間ドックを受けているが、異常はなかった。そんなデマを流してまで引き裂きたいらしいのだ。だが、そんなことで引き裂けるほど、俺と美咲ちゃんの絆は弱くはない。俺は美咲ちゃんを守ると決めた。不幸にはさせない。美咲ちゃんはずっと苦しんできた。何度も自殺を考えるほど、周りの人間が嫌いになっていた。誰も信用できる人がいなかった。俺がその役目を果たさないといけない。親にも出来ないことだ。

俺は美咲ちゃんを完全に愛していたのだ。だから、そうそう断ち切れるものではない。だが、人間はその絆を断ち切るために物理的手段を用いてきた。

美咲ちゃんを連れて、引越しさせるという強攻策に出たことを知ったのは、3連休が明けたときだった。土曜日の午後に俺は美咲ちゃんと会った。そのとき、美咲ちゃんは何も言わなかった。つまり、引越しをすることを日曜日まで美咲ちゃんに伝えず、完全に俺と隔離させるための方法を取ってきたのだ。

俺は動揺した。先生たちは木曜日の段階で知っていたらしいが、伝えてはいけないと念を押されていたらしい。すぐに探した。当たり前だ。美咲ちゃんがいなくなって、学校にも来なくて、話を訊くと、「引っ越した」なんて、そんな話があるかと思った。

「美咲ちゃんの住所の引越しを担当した会社」を興信所で調べてもらい、俺は話を聞きだそうとしたが、機械的なアナウンスで「お答えできません」と言うので、腹が立って、本社に押しかけると言った。

結局、分からなかった。美咲ちゃんがどこにいるのかわからないまま、俺は途方にくれていた。仕事などはどうでも良かった。とは言え、水曜日までは仕事に出ていた。木曜日からは仕事に行かなくなり、全国に手を広げた。「すごくいい探偵がいる」と言うので、その探偵を訪れると、「五十万で」と言われた。俺は「お願いします」と言った。E先生がお金を貸してくれて（くれると言ってくれていたが、後で俺は返した）その日のうちにお金を払うことが出来た。「数日のうちに連絡する」と言うのだが、十日以上経ってからようやく「見つかった。住所は……」と教えてもらえた住所がS県だったので、驚いた。

とにかく行くしかない。美咲ちゃんは俺の迎えを待っているはずだ。絶対に悲しんでいるはずだ。俺は二週間以上会えなかったため

にかなり苦しかった。美咲ちゃんも同じはずだ。俺は腹が立って仕方がなかった。親では美咲ちゃんを救うことなど出来ない。

二週間以上、美咲ちゃんを独りにさせてしまった。俺は俺自身を叱咤した。守ると言って、このザマだ。美咲ちゃんを悲しめてしまったのだ。俺の未熟さとか、能力の低さ、そういうものが出たのだ。そんなことは許されない。美咲ちゃんの命はひとつしかない。一人しかいないのだ。たた一度しかないこの二週間を独りにさせて、悲しませてしまった。どんな言葉をかければいいのか分からない。ただ、美咲ちゃんを安心させたい。人間が明確に俺に牙を向いてきた。人間の牙は離間させようと本気だった。だが、絆までは切断できない。

俺を待っていた途方もない現実。恐らくは絶対的なものが意志を持って、牙を向いてきたのだ。俺が美咲ちゃんの家を訪れたとき、親は俺に驚いていた。「美咲はいま、入院しているのだ」と俺に告げてきた。その意味が分からなかった。精神的なもので入院しているのだろうと思い、精神病院を思い浮かべたが、俺にも何も出来ないものを親は告げてきた。

その病院は近くに看板が上がっているし、大きいのですぐに分かった。美咲ちゃんは白血病という病気だそうだ。名前の通り、白い血。白血球が増加し、途方もなく多くなって、人間を死に至らしめる。血液のガン（厳密には血球を作る細胞……造血細胞というのか？　とにかくその才能のがんだが）で、ガン細胞が剥がれて、血液に落ちると、血液中を流れるように移動して、やがて到達した場所で、新たなガン細胞を作り出すそうだ。剥がれるまで、あるいは到達するまでに時間がかかって、早期発見が出来れば、このような転移を防ぎ、化学療法に使う抗がん剤で、治療できる可能性が高いのだが、発見が遅れると、レベル二とかレベル三とかいうそうで、レベルが高くなっていると、血液中をがん細胞が巡って、さらにオリジナルの部分でがん細胞は血液を栄養に細胞分裂を繰り返して、人間を殺してしまうという。ガンになる直接の原因は不明。宇宙がこ

こまで解明されているのに、ガンの直接の原因は分からないというのか。まるで、神が意図して牙を向いてきたようなそんな感があった。俺は不思議だった。ガンになる原因が不明。まさか、神が量子力学に続いて、サイコロを振るというのか。何か生物学的、あるいは数学的にガンになる条件があるはずだ。どうなったら、ガンになるのか。そういうものが分からないなんて、神は人間にだけ、絶対的でないルールを用意しているというのか。いや、それとも神は生命体に、あまりに不平等な法則を与えているのかもしれない。

神が怒り、意図的に法則をいじり、がん細胞を作り出したのか、それとも、絶対的な条件があるのか。

俺は美咲ちゃんに面会出来るかと怒鳴るように病院の者に訊くと、「無菌室には誰も入れない」と言うのだ。「ふざけるな」と俺の理性はまたおかしくなっていた。抵抗力の弱い人はすぐ菌にやられるので、一切の面会が禁止だという。当たり前のことだ。だが、もはや俺は美咲ちゃんを求めずにはいられなくなっていた。

そういえば、少し前、無菌室でキスをしたとか、そういうことで、もめていた時代があったことを思い出した。くだらないと思って、当時は掲示板での意見を見ていたのだが、今、分かることがひとつある。あれは『必然』で『意図したものではない』ということだ。当事者でないものは遠いところからお茶を飲みながら見ていられるから、好きなことを抜かせる。だが、当事者にとっては、それが理性で押さえつけるレベルを超えた葛藤があり、大いなる何かに導かれての展開なのだ。俺が文系を拒絶したように心に現れた本能ともいうべき、何か。それが人を導き、そして、結果を作り出す。それだけのことなのだ。安易にそういうことを書くなと言う人もいたけど、安易ではない。それぐらい、当事者になって心情を考えればすぐに分かる。遠くから見ているものには分からないだけだ。俺もそうだった。美咲ちゃんもそうだ。多くの人から苦痛を受けてきた。だが、相手にとってみれば、苦痛を与えている気になっていない。何も罪を覚えず、相手の気持ちも考えられず、そして強者の域で悠

々と過ごしている。その中で、たくさんの犠牲者があるのだ。そういうことを考えると、『無菌室でキスをした』なんてことはそこでは必然なのだ。人間の配下にある常識ではありえないことだ。やっていいことではない。だが、そこで、人間の配下にある絶対的なものに背かなければ、潰れてしまうものがある。俺もあのとき、美咲ちゃんにキスをしなければ、あのとき何かが潰れていた。背かなければならない。それが『無菌室でキスをした』ということなのだ。それを全力で避難する人たちは『文系』の信仰者で、俺と美咲ちゃんを引き離したように『最も大切なもの』より『人間の考えた不完全な絶対的背景』を重視したのだ。だが、俺は人間の不完全さを知っている。それに、患者に失礼ということもない。患者とあの展開とは何の関係もない。あれはあくまで人間の配下に従うことで消えてしまう何かと、罪の意識という葛藤から生じた必然のものなのだから。本当に失礼なのは相手を傷つけたり、チャンスを奪ってしまった人たちだ。美咲ちゃんを傷つけた人間とか、教室に来ている人たちを傷つけた人間だ。

俺は本当に大切なものを自らの視点から見出すほかないと思うのだ。だから、俺は美咲ちゃんに会うこと。会って話をすること。俺はそれだけを考えた。

「美咲ちゃんに会わせろ」と言うと、「今は危険な状態」と病院側は言う。慢性骨髄性何とかと言っていたが、俺にはさっぱり分からない。だが、それでもだ。それでも、美咲ちゃんと会わないと、俺自身だけでなく、美咲ちゃんが報われない。もし、俺と会えないまま、二度と話が出来なくなれば、俺はそれだけはさせたくなかった。美咲ちゃんはここまでずっと苦しい中を生きてきたのだ。たくさんの人から傷つけられて、自殺まで考えて、それで、どうして、今もなお、傷つかなければならないのか。俺は人間の配下にあるもの。文型すべてがあまりに憎らしく思い、「会わせろ」と何度も突っかかった。俺は異常者と思われたらしく、たくさんの人が集まってきて、「非常識だ」ということを、病院のものや周囲にいた人々に言

われた。だが、何も知らないものは勝手なことがいえる。だが、当事者になればすべてが分かるのだ。美咲ちゃんに会わなければ、ここで会わなければ、一刻も早く会わなければ、美咲ちゃんを安心させなければダメなのだ。美咲ちゃんを守ると決めた。それをただひたすら言い続けても、病院側は応えてくれなかった。当たり前だ。そんなことを許していたら、患者の信用を損なう。医学を利益と捉えるこの時代、そんなことを許すものがいるはずがない。

だが、あきらめて溜まるか。あきらめていいわけがない。美咲ちゃんが待っているのだ。俺はすべてを押しのけ、美咲ちゃんに会わなければならない。牙を向けてきたものは神だけでなく人間もだ。俺は神と人間どちらも敵に回してしまった。だが、それでも、俺は美咲ちゃんを守る。神が相手でも美咲ちゃんを守ってみせる。

だが、俺は病院側に完全に取り押さえられてしまい、動くことも出来なかった。医者は「あなたが我慢すれば、助かる」と言っていた。今は見守ること。それが必要なのだと説明された。分かる。それぐらい分かる。だが、俺はそういうものをすべて通り越してでも美咲ちゃんに会わなければならないのだ。美咲ちゃんも早く会いたいと思っているに違いない。今、物理的に会える状態にいるのに、会えない。そのもどかしさは俺をさらにおかしくさせた。俺はこれらの障害をすべて押しのけて、美咲ちゃんを抱きしめなければならないのだ。

俺がほとんど狂ったようになって、暴力を振るうようになると、看護婦が警察を呼んで、さりげなくおばあさんも警察に連絡をいれていた。俺は医務室を出て、一番強そうな男を押しのけて、ようやく人の少ない廊下に達した。霊安室が見えて、俺の中に嫌なものが蹲った。どこに無菌室というものがあるのか分からず、焦りばかりが込み上げていた。走って、ようやく見つけたのだけれど、その前に医者や関係者がたくさんいて、「入ってはいけない」と言った。「いれてくれ」と俺は涙ながらに懇願し、それから、勢いよく掴み

かかった。俺にとって、美咲ちゃん以外はもう眼中になかった。美咲ちゃんに会えればそれで、後はもうどうなってもいい。そう思っていた。だから、俺は前方の人間を物質とでも見ていた。いや、大切なものを奪おうとする悪魔にさえ見えたかもしれない。ここで美咲ちゃんに会わないと、大切なものがなくなってしまう。人間の作り出した至極不完全なものでは理解できない、そんなものだ。常識を絶対的なものと捉える者には決して理解できない絆とか、愛とかそういうものなのだ。無菌室に入るなんて馬鹿げている。それぐらい、俺にも分かっていた。だが、ここで躊躇えば、一秒でも美咲ちゃんと会うことが遅れると、それは大きな損害になると思った。もし、例えば、後一秒が遅れたことで、美咲ちゃんと会えなくなってしまったら。二週間以上も会えなかった。明日こそは会える。明日こそはとずっと重ねてきて、最後に会えないままなんてことになったら、俺は美咲ちゃんに何と言えばいいのか。

俺は関係者をただひたすら殴りつけていた。ボクシングを練習していた頃、磨きをかけていた右のフックをとにかく振り回した。俺の軌残した跡はただ美咲ちゃんに会うためだけのものだ。相手を傷つけようとかそんなつもりは一切なかった。俺は美咲ちゃんの前に立ちはだかる障害をすべて跳ね除け、ドアに手をかけた。ドアが開かなかったので、ガラスの部分を突き破り、とうとう中に入ってしまった。

神の創ったフィールドに新たに絶対的な背景を用意したことで、人間は統率されてきた。もともと神は神話とかそんな糞にもならないものとは無関係なのだ。あるのは厳密な自然科学や数学のみ。神から程遠い常識や法律が『絶対的』であるはずがない。～は常識と言っても、それが科学的でなければ『常識』ではない。俺はここで美咲ちゃんと会うことが、絶対的な正解だと信じた。二人が同時に会いたいと思うから会うのだ。会えなくなる可能性が０と数学的に証明されない限り、たとえ、このような状態でも、俺は美咲ちゃん

と会う必要があるのだ。確率が０にはなれない。だから会わなければならない。会って、安心させなければならない。

美咲ちゃんは悄然として、目が虚ろで、俺の心を抉るほどに死に近い表情をしていた。俺は声を完全に失っており、枕の上に散っていた髪を何本か拾い上げた。抗がん剤は身体にダメージを与えるものだ。抗がんのために、正常なものも犠牲になる。人間の社会と何も変わらない。一握りの幸せな人間のためにたくさんの不幸な人間が生まれる。だから、俺は犠牲になるものが痛々しく見えてしまうのだ。

「美咲ちゃん、僕だよ。分かる？」俺に気付いておしくて、俺は顔を近づけた。美咲ちゃんはほとんど喋れなくなっていたのだ。口元がわずかに動いただけで、その言葉が聞き取れない。俺の動揺は極めて、大きく、涙を堪えることなど到底出来ない。だが、美咲ちゃんは表情を変える元気すらもうなかった。それでも、涙だけは確実にこぼれるのが見え、俺はまた激しく動揺した。美咲ちゃんは何かを伝えようとしていた。だが、言葉が紡げない。こぼれる涙がそのもどかしさを伝えていた。

俺はどうすればいいのか。ここで去ってしまえば、何もならないだろう。何とか出来ないのか。美咲ちゃんのために何もしてやれないのか。

美咲ちゃんの手が動いたのが分かったから、俺はその手を掴んだ。美咲ちゃんの手に力が入ってくる。恐らく全力で握っていたに違いない。その弱さに驚き、俺はかなり涙をこぼしてしまった。「僕が分かるか？」と俺は質問を繰り返す。美咲ちゃんの口が動くので、それに集中していると、「ありがとう」と伝えようとしていることに気付く。どうして、ここで礼を言われなければならないのだろうか。礼など言う必要はない。こんなときに気を遣わないでいいだろう。俺は心打たれてしまった。美咲ちゃんのもうひとつの手も動き始めて、俺を必死に掴もうとするのだが、その手は大きく震えている。俺はその手を掴んだ。もうこれ以上、体力を使う必要はない。

美咲ちゃんを安心させるためには何をすればいいのか。俺は何をすればいいのか。そんなときに、関係者は俺を外に連れ出そうとしてしまうのだ。美咲ちゃんの手が離れて、俺は引きずられる。美咲ちゃんが手を伸ばして、すごく多くの涙を流すのが見えて、「僕が傍にいなきゃダメなんだ」と必死に訴えた。美咲ちゃんはただ手を伸ばして、何かを訴えようとしていた。「行かないで」と訴えていることに気付いて、俺は必死に抵抗するが、圧倒的力の差だった。美咲ちゃんは最後の最後まで訴えていたが、俺は美咲ちゃんから完全に引き離された。俺は「必ず美咲ちゃんを治せよ」と医者にただ叫ぶことしか出来なかった。美咲ちゃんが元気になれば、会うことが出来る。そのときは、もう何も躊躇いし、道徳的干渉にも屈さない。ただ、美咲ちゃんを見つめ続ける。そう誓った。美咲ちゃんは俺にとってのすべてだった。だから、美咲ちゃんの傍にいることにすべてをかけようと思った。誰にも美咲ちゃんを傷つけさせない。神にもだ。

美咲ちゃんが亡くなったとその翌日聞かされ、主治医に殴りこみに行ったのだが、ほとんど何も出来ず、取り押さえられてしまった。警察署で聞いたことだが、美咲ちゃんは亡くなるそのときまで、ずっと俺の名前を呼び続けていたそうだ。あのとき、「行かないで」と美咲ちゃんが訴えていた。そのとき、どうして、もう少し強い力で振り切り、美咲ちゃんを抱きしめなかったのか。俺はひたすら思いつめた。美咲ちゃんの顔を思い出すと、激しい嘔吐感を覚えるので、俺は何も考えないようにした。

だが、美咲ちゃんを切り離すことなど出来るはずがなかった。美咲ちゃんを守ると決め、そのために俺は美咲ちゃんと付き合った。だが、俺は美咲ちゃんを守ることが出来なかった。一番失ってはいけないものを失い、どうでもいいものたちが悠々と生きている。俺には信じられなかった。美咲ちゃんはずっと苦しんでいた。結局、人間も神も美咲ちゃんには苦痛を与え続けた。俺はそれを阻止しな

ければならなかったのだ。守ると決めて、俺は人間にも神にも敗北した。せめて、最後まで、美咲ちゃんの傍にいてやりたかった。安心の中で目を閉じてほしかった。それさえ、俺はしてやれなかった。人間にも神にも結局勝てず、美咲ちゃんを死なせてしまった。

俺の人生はこれで完結したものと思った。出来ることは美咲ちゃんの後を追って、今度こそずっと傍にいてあげることだ。今度こそ、何人からも美咲ちゃんを守る。それが役目だと思った。美咲ちゃんの親は「葬儀をするから」と警察署まで来て、俺に伝えてくれた。だが、俺は考えられなかった。葬儀だと？　死んだら葬儀。みんながやっているからか？　ふざけるな！　美咲ちゃんはお前たちを嫌い、恐怖していたのだ。馬鹿にするのも大概にしろ。俺は最後の怒りでそのようなことを訴えた。美咲ちゃんの傍にいるのは俺だけで十分だ。大して美咲ちゃんに好意も持っていない連中がいやいや葬儀にやってくるのだ。それでご苦労様だと？　それで罪が帳消しになるというのか？　いやいや来てやっただと？この人間たちはどこまで美咲ちゃんを苦しめるのか。何の疑問も持たず、大人共は葬儀を始めた。俺はいかなかった。いったとしても、暴動を起こすだけだ。だが、美咲ちゃんはせめて俺が来てくれることを期待していたかもしれない。だから俺は佳境になって、訪れたのだが、葬儀のためにわざわざ仕事を休んでやったとほざいていた大人がいた。そのときの俺が怒りを押さえつけることが出来るはずがなく、その大人を殴り飛ばしてしまった。どうせ、こうなるのだ。美咲ちゃんをすべてと捉える俺が普通の人間と同じにしていられるはずがない。

俺はキツネのぬいぐるみが残っていたので、それも一緒に頼むとだけ言って、警察署に戻った。俺はもう本当に人生を完結させたのだ。

A6（後書き）

扇風機に「あー」っていうと、「あ゛ー」ってなる。おもろいな……。

A7（前書き）

残り６０００話を切るまでが勝負なんだよね

A7

俺は何も言わず、仕事に出なくなり、アパートに来てくれたM先生に退職することを伝えて、ほとんどアパートに引きこもった。E先生が「一度会おう」と言うのを「外に出る気力がない」と言うと、すぐ家に来てくれた。E先生は美咲ちゃんの件に関して、特に何も言わず、「うまい店を見つけた」などと言って、俺をその店に連れて行き、悄然とした俺をほぼ無視して、普通に会話をしようとした。E先生はプロだから、そういった配慮をすぐに行えたのだろう。だが、俺はもはやすべてを失っていた。だが、どうしても思い残すことがあるのだ。それを思考すると、活力となり、生きる力をくれた。俺は美咲ちゃんに対してメッセージを何も用意していなかった。つまり、俺はそのとき、自害することを前提にし、死んだとき、確実に美咲ちゃんを探し出せるようにしておかなければならないと突飛なことを考えるようになっていたのだ。

だが、考えているうちに、馬鹿らしくなったり、美咲ちゃんのことを思い出して、おぞましい絶望に苦しんだりした。俺は結局解を提示できず、E先生のくれるお金で数ヶ月も生活していた。ほとんど、無駄に生きているような感じだった。憎悪はなく、絶望が大半を占める状態だった。

そんなときにE先生が「僕の患者に女性がいて、君のことを話すと、会いたいと言うんだ。会ってみないか？」と言ってきた。「失望させるだけだ」と答えると、「それはまずない」と言うので、E先生が仲介するのならということで了承すると、俺のアパートに、E先生が例の女性を連れてきた。『紗耶』という名前の女性で、E先生からは21歳と聞いていた。ほとんど高校生ぐらいの女性だった。うつ病の疑いで治療を受けているらしいのだが、うつ病とはほど遠いほど、話はしっかり出来ているし、容姿のレベルも高い。最初はE先生が「俺と似た症状」だからと、アドバイスを次々と俺と

紗耶さんに聞かせた。それから、紗耶さんが「独り暮らしですか？」と訊いてくるので、「そうです」と答えた。「私は両親と暮らしてます」と紗耶さんは言い、最終学歴が『中卒』で、中学校を出てから、仕事をしないで、家にいるそうだ。家の農業は手伝っているらしいので、怠けているわけではないらしい。俺も何か言うべきだったが、言うに言えないことしか持っていなかった。「仕事はしていましたが、辞めました。ついていけなくて」と言うと、「仕事をするだけでも偉い」と褒められた。それから定期的に会うようになって、E先生が来なくても、紗耶さん一人で俺のところに来るようになった。紗耶さんは行動的ではなく、家庭的で、恐らくは大人しい部類に属するだろう。E先生の分析はさすがと言うべきか、俺と相性がいいことを確信したからE先生は持ちかけてくれたのだ。

紗耶さんはまず強者でない。少なくとも、俺の十代の頃出会った女性とは違う。同じであれば、すぐに分かる。そもそもうつ病を患うということは、他人に対する思いやりが強いのだ。「お茶を淹れますね」と紗耶さんが言うので、「ご馳走になります」と答えた。「このやかんは使ってもいいですか？」「はい、ここを回して、少し経つと熱くなってきますので」と電気コンロの使い方を説明して、俺は奥で待った。

他人を気遣う能力という意味では紗耶さんはすごいものがあった。話をしていて、分かったのだが、紗耶さんは他人の気遣いが曲線的なのだ。要するに一定の規則がない。誰にも同じ気遣いをするのではなく、相手を見て、その場その場で適切な気遣いをする。それは会話の言葉を吟味するところにも現れている。だが、俺はやはりそういう気遣いする人にとって、話しやすい相手らしく、「相手のことを考えると、言葉も考えてしまいます」と言うのだが、俺の場合はあまり考えずに言葉を紡げるというのだ。「僕の前では別に考えなくてもいいですよ」と言うと、「助かります」と言っていた。

それから、比較的相性が良かった俺たちは定期的に会うようになって、俺は紗耶さんになら話せると思って、美咲ちゃんの件を話し

たのだが、話すとどうしても涙ぐんでしまい、紗耶さんはあまり動揺することなく、俺の傍に来て、「どうぞ、胸を貸します」と言ってきた。俺はかなり動揺した。そのようなことを言われた経験がなかったのだ。とはいえ、紗耶さんはいつもそこまで気遣いをするのか、疑問に思って、「大胆でビックリしました」と言うと、「ほかの人には出来ません」と紗耶さんは答えた。俺は弱者として受け入れられていたのだろう。紗耶さんの場合、その性質上、受け身な俺とは相性が良かったのだろう。気遣いするタイプは主導権を取ることが出来て、はじめて、その威力を発揮する。そういうことは心理学を学んでいた頃から知っていたが、実際に接して、それがよく分かった。俺としても紗耶さんの家庭的な雰囲気が気に入った。社会から半ば隔離されている弱者同士、それなりに親しくなることが出来た。

だが、美咲ちゃんのことをこのまま忘れて、紗耶さんと親しくなることがいいことなのか、罪を考えてしまう俺はずいぶんと迷った。つまり、美咲ちゃんのためにも俺はやはり死ぬべきで、死んで美咲ちゃんを抱きしめてあげるべきなのではないか。俺の彼女は美咲ちゃんなのだ。命を捨ててでも守らなければならない大切な相手だ。

美咲ちゃんのことを俺は決して忘れることはないだろう。けれど、美咲ちゃんへの思いが次第に薄れていることは自覚していた。時間が経過して、紗耶さんが夕食を作りに来てくれたりするようになって、緩和が進み、俺は死を考えることが亡くなっていた。

紗耶さんは「まずいときはまずいと言ってください」と夕食を作りに来たときに、俺に言った。意外な言葉で俺は戸惑いながら、「好意を仇で返すのは気が引けますけど」「そうしているうちに好みにあった料理が出来るようになるんです」と紗耶さんは笑顔で言ってくれる。紗耶さんの気遣いはもう敬服に値する。俺の親などはまずいと言うと「それなら食べるな」と言う。紗耶さんは「まずい」を受け止める気遣いを持っているのだろう。そんな優しさがこの社会では荷物になってしまうのか。その気遣いで、他人のペースにつ

いていけなくなっているのかと思うと、俺は悲しくなって、「紗耶さんのような家庭的な女性は初めてで感動しました」と言うと、「そうでもないです」と紗耶さんは答えた。

そんな感じで、紗耶さんは優しすぎるところが問題だった。優しいというのは人間社会ではさほど必要にならない。むしろ、優しさが傷になって、他人と接することが出来なくなることもある。『優しい』が『不利なステータス』になるこの社会は本当に恐ろしい。俺はせめてその優しさを褒めたいと思う。その優しさで傷ついているのなら、その優しさを最大限受け入れようと俺は思った。紗耶さんは家事の全般をやってくれるようになり、E先生は俺にずっとお金を渡し続けてくれた。

俺は人の優しさとか愛情というものを、そのときはじめて知ったような気がする。親と過ごしていても絶対に気付けなかった。俺はいちいち感動してしまった。その優しさはあまりに大きくて、心を豊かにするものだった。

紗耶さんと親密になって、こうも何度も会っていると、関係がプラトニックを越えるのは自然なことだった。その日、紗耶さんは夕方頃に俺のアパートに来て、寒かっただろうと思って、コタツを用意していたのだが、俺がコタツに入って、向かいに紗耶さんは座るだろうと思っていると、俺の隣に入ってきて、「寒かったです」と言うので、俺は緊張を隠せず、「いつもすみません」と答えた。それから、会話がなかったので、何か言おうと思っていると、紗耶さんがもたれてきて、あどけない目を向けてきた。俺はそれをスイッチか何かとは予想していたが、それをいきなり、確定的なものとして、押し倒したりするには気が引け、紗耶さんの肩のあたりを撫でたりしていると、紗耶さんが乗り出してきて、俺は最後まで受け身のままだった。受け身といっても、スイッチの後は、相手の許容を確認できたから、俺も少しばかり積極性を持ち、唇を重ねた。キスというものは美咲ちゃんと俺を繋ぐ行為だと、俺は完全に見なしていたので、このキスは新型で、旧型と切り離されたものに感じた。

美咲ちゃんのことを思い出してしまったところに、二つの行為が同じ流れに属することが分かる。ただ、俺は美咲ちゃんに対する思いがいまだに強いことを悟った。美咲ちゃんが俺の中にはまだあり、それが涙となって現れたような気がした。

「すみません」と俺は謝ってから、もう一度キスに望んだのだが、美咲ちゃんへの好意を悟ったのではなく、会えないことへの悲しみが思い出されて、それが涙となったことを理解して、もし、美咲ちゃんが俺の中にいて、それが苦痛にしかならないというのなら、紗耶さんに美咲ちゃんを断ち切ってもらいたかった。

美咲ちゃんのことは忘れられない。一緒に過ごしていた頃を思い出すと、今でも涙を止めるのが難しい。だが、美咲ちゃんをずっと胸に秘めていることは、俺自身辛かった。美咲ちゃんが俺を呼んでいると思うたび、あのときの「行かないで」という訴えを無視してしまったことを思い出すたび、ひとつずつ、美咲ちゃんに近づくが、決して、接することがない悲しみに辛さを覚えてしまう。

紗耶さんはもう21歳だから、経験はなくとも、知識や想像での光景は持っているだろう。俺も経験はないが、想像は持っている。だから、何をすべきかはすぐに分かった。想像が楽であるというのは本能に刷り込まれているからなのかもしれないが、キスをして、二人が相手の了解を確認すると、次に移行する。俺は紗耶さんを押し倒す形になったのだが、それは一種の流れで、連続したものだから、そこでせき止めるということは出来ないから、それに悪い気持ちを添付するのはほとんど無益なことだと思った。

交わりはあったが、その後、いきなり何かが変わることはなく、または羞恥を切り離すためか、「それではこれで失礼しますね」と紗耶さんは帰っていった。最初、俺は失望されたのかと思ったのだが、次の日、またやってきて、体を重ねるに至ったのでそういうわけではなかった。それで安心して、紗耶さんのことを思うことが出来るようになった。

俺と出会ってから、紗耶さんは医者に掛かることがなくなった。E先生も大丈夫だろうと言っていた。俺たちは仕事をしていないから、ほとんど毎日会うことが出来た。俺が最初、紗耶さんのところを訪れたとき、両親を紹介されて、両親共に優しい方だった。嫌な感じがなく、とても話しやすかった。父親は将棋が強く、「対局の相手になってくれ」と言われたので、相手をしたのだが、歯が立たなかった。定期的に行って、畑仕事を手伝っていたが、俺も紗耶さんと付き合うことには、このままでいるわけにもいかず、履歴書を買ってきて、紗耶さんと一緒に書いた。紗耶さんは字が上手なので、住所などを書いてもらって、求人情報を当たった。普通自動車免許を持っていないと受け付けないところがほとんどで、免許不問の場所は月給１１４０００円などのところだった。

とはいえ、今は拾ってくるところに行くしかない状態だった。もはや、俺は紗耶さんのために何とかしないといけないとしか考えていなかったので、ただ職を見つけることだけに専念した。情けない俺は面接の会場の前まで紗耶さんに来てもらった。「頑張ってくださいね。応援しています」と紗耶さんは励ましてくれて、人がいないのを確認して、そっと唇を重ねてくれた。俺はかなりやる気になって、面接に向かったのだが、「うちはどのような会社だと思いますか？」という思いもよらない質問が来た。事務所の手伝いなので、事務的な仕事をするところと答えると、「違う違うそういう意味じゃなくて、もっと別の意味で。分かるでしょ？」と嫌な顔をして訊いてくるので、分からないと答えると、溜息をつかれた。面接が終わって、紗耶さんが「お疲れ様です。どうでしたか？」と尋ねてきた。ずっと待っていてくれて、缶ジュースを差し出してくれた。「変な質問をされた。ダメかもしれません」と言うと、「そうですか、でも、お疲れ様です」と紗耶さんは笑ってくれた。たぶん不採用だから俺はかなり落ち込んだのだが、紗耶さんはかなり豪華な夕食を作ってくれて、気持ちが晴れた。とはいえ、その紗耶さんのためにも仕事が必要だった。後でE先生から聞いて分かったのだが、いい

会社かそうでないかを見分けるには専門家がいるぐらいだそうだ。俺の受けたところはダメな会社らしい。だが、大手はすべて学歴重視だし、俺は能力に欠けるから、無理だ。まともな会社を専門家に選んでもらった。ついでに面接の指導も受けた。「選んだところに、筆記試験を課すところはないから、面接がすべてだよ。履歴書も高卒なら犯罪歴がなければそんなに気にはしてこない」ということだった。

面接は紗耶さんにも手伝ってもらって、かなり上達したつもりだったが、紗耶さんは話しやすい相手で、正直あまり参考にはならなかったと思う。

専門家の言うとおり、まともなところはまともな質問をしてきた。「食品営業部では、一日に何件も業者を回ってもらわなければなりません。一日を通して歩く気力はありますか？」「はいあ、あります」と言うと、試験官は和むような笑みを浮かべて、「君は若いし大丈夫そうだろう。なかなか厳しいんだけど、今、人手も不足してるからね。君にぜひ戦力になってもらいたい」「私でよければ、お願いします」と言うと、また笑って、「給料は安いけどね」と言って、その日のうちに採用の通知をくれた。まともな場所は試験官の質も違うんだなと俺は感心した。その人は本当にいい人で、俺が「お願いします」と言うべきところを、頭を下げて、「よろしくお願いするよ」と言ってきた。

仕事が決まったことを紗耶さんに伝えると、紗耶さんも喜んでくれた。「今日はサービスしますね」と言われた。俺が就職した場所はほとんど誰でも入れる場所だった。初任給手取り１００００００を切るような場所だ。だから、俺は情けなく、「生活がかなり厳しくなるかもしれない」と言うと、「けっこうですよ」と言ってくれた。俺たちは付き合いをしている仲ではあるが、結婚することは約束していない。告白があったのは紗耶さんのほうからで、俺は受動的に頷いていた。いつの間にか、ほとんど同棲生活になっていて、紗耶さんが俺のところに泊まることが多くなっていた。

仕事はほとんど誰にでも出来ることだ。言われた会社を回り、頭を下げ、取引と言っても、事前に話がついている相手なので、説得したりそういうことをしたわけではない。頭を下げて、相手の機嫌を損ねない。それだけだった。

そういうことを一日やって、家に帰る。紗耶さんが夕飯の準備をしていることが日課になっていた。紗耶さんのところにも何度か行った。紗耶さんが少し席を外している間に紗耶さんの母親がやってきて、「紗耶をもらってくれないか」と言うので、俺は「ぜひ、お願いします」と答え、父親も「ありがとう、任せるよ」と言ってくれた。とはいえ、俺はまだ結婚するには早いと思った。ほとんどお金もない。そこで、紗耶さんには結婚をすることを言わなかった。

言わないうちに妊娠が発覚し、それから、しばらくして、女の子だと分かった。E先生にも報告したのだが、M先生とも俺は多少の交流があったので、伝えた。「おめでとう」ではなく、「頑張りなさい」と言われた。「はい」と答えて、紗耶のことを抱きしめた。

美咲ちゃんのことはかなり遠く感じることが出来るようになっていた。紗耶さんを守ること。守り続けること。それだけが俺の気持ちになっていた。それ以外が思考できなかった。防衛の本能が過剰に働くのは至極当然だった。俺はかなり恐怖を覚えていたのだ。この世のすべてが恐怖に移る。紗耶を傷つける奴がいれば、そいつは許せない。紗耶を守るためには社会に潜む悪魔という名の人間を遠ざけなければならない。世の中には悪魔ばかりではない。E先生やM先生のような方もいるし、会社の先輩に当たる、Kさんもとてもいい人だった。

ある日、紗耶さんのところに泊まりに行ったというより、妊娠して以来、俺はほとんど紗耶さんのところに泊まっているのだが、父親が「結婚式は挙げるのか？」と言われて、「紗耶さんは挙げたくないと言ってますし、僕も……」と口ごもると、「あの子が望むよ

うにしてやってください」と言われた。俺たちは婚約届けを出して、式を挙げることはなかった。ほとんど知られないままに俺たちは結婚した。結婚前に一度だけ、俺の親に紗耶さんを会わせたが、親は何も言わなかった。ようやく、俺のことが片付いて安心したのだろう。婚約してからは、この家を使えと言われたので、俺はアパートを出て、紗耶さんの家に入った。会社で氏が変わったことに気付いたKさんに結婚したことを言うと、かなり意外に思われて、それから、かなりのお祝い金をくれた。Kさんはまだ結婚されていなかった。とはいえ、俺が結婚できたのは、相手が紗耶さんだったからだ。普通の女なら、金がないだけで、論外だし、俺の経歴を見ても、論外だろう。紗耶さんは絶滅の危機にあったところ、俺が偶然見つけ出した世界で一番大切な人だった。世界で一番だから、防衛本能が至極高まって、紗耶さんと買い物に出かけたときのことだが、知らない若者が紗耶さんにぶつかって、何も言わず、去っていったのを見て、俺は若者に掴みかかってしまった。紗耶さんが止めて、問題にはならなかったが、俺は休日、紗耶さんのボディガードのようなものを務めるようになった。

買い物は紗耶さんの母親が行ってくれるようになって、俺も「あまり無理しないで、ゆっくりしていてくれ」と言った。紗耶さんは「大丈夫です」と言って、洗濯物を干したり、食事を作ったり、家事全般をかなりこなした。

俺は男女の絆と言うものが、これほど強烈なものとは思わなかった。もしかすれば、俺たちだけかもしれないが。俺は一人のときは色々なことを深く考えていたが、紗耶さんと一緒に過ごすことになってからは、そういうことを考えなくなり、ただ、紗耶さんと一緒にいたいとだけ思うようになっていた。他人のいずれよりも紗耶さんを優先した。県の病院に通うときには車がないので、電車を使わなければならないのだが、そのときは休みを貰って、俺が付き添った。座席がなくて、俺はわざわざ人に声をかけて、座席を開けてもらった。紗耶さんのためなら、自分から他人に話しかけることも出

来た。さらには周囲に目をギラギラ輝かせて、少しでも紗耶さんの体に触れた奴は痴漢として、たたき出すつもりでいた。紗耶さんは俺だけのものだというそんな考えもあるいはあったかもしれない。天皇より、総理より、誰よりも、圧倒的に大切な人だ。誰よりも俺は優先して、紗耶さんの身を案じた。難病に苦しんでいる者を見ても、死に掛けている者を見ても、紗耶さんが優先される。がめついおばさんの意味が分かった気がする。がめついおばさんは何よりも身内を案じているのだ。他人すべてを放擲して、身内の、例えば孫や息子のためだけにすべてを注いでいる。だから、がめつくなるのだ。今の俺はいかなる善意も他人にはもたなくなっていた。所詮、善意というものは真に守るものを持っていないものたちだけが持っているものだ。俺の祖母はとても優しかった。だが、それは他人のすべてを捨てても、俺に愛情を優先させてくれたからだろう。

俺は紗耶さんのためにお金を稼いでいる。他人には、たとえ乞食がいても一円もやる気はない。俺は、乞食に金をやらないことや優しくない人たちを『善意のないもの』と考えていたが、早計だった。そういうことだったのだ。彼らは守るべきものだけを見つめていたのだ。そのためには、乞食に一円すら与えることが惜しい。自分の子供、または妻、または親か。とにかく、この世の多くの悪意は相対的に受け取っていただけだったのだ。視点を相手に移せば、悪意などない。

俺は紗耶さんと一緒に暮らすようになって、つくづくそれを思い知った。みんな、守るために全力になっているのだ。守るためだったのだ。今思えば、野生動物は取った獲物を他人にやったりはしない。他人が獲物に近づいてきたら攻撃する。守るために攻撃するのだ。その愛情は桁外れで、それは他人を顧みる暇もないほどの愛情の強さなのかもしれない。とはいえ、思考力にかける野生動物がそんな大げさなことを考えてはいないだろうが。人間もそれに近い性質を持っているのだ。

とにかく、俺はその性質が強すぎた。紗耶さんを腫れ物に触るよ

うな手付きで扱っていた。電車を降りるときも、気を遣いすぎて、「そんなに気を遣わなくてもよろしいですよ」と言われ、「ごめん」と謝った。妊娠が数ヶ月に渡ると、お腹も膨らむのだが、各種栄養が足りなくなるらしい。「特にビタミンCや鉄分ですね」と言われ、それらを多く含む食材を教えてもらい、「よく噛んで食べて下さい」とアドバイスを貰った。

妊娠と言うと、卵の発生で、その家庭は割球がだんだん割れていくようなものと俺は習っていたが、発生過程は実に不思議なものだと思う。自分のアイデンティティも脳もどんどん作られていくのだ。人工的に作ることの出来ないものを作ることが出来る。これが自然なのか。神なのか。桁はずれだ。その神は平等な遺伝子に従って、子供を作っているのだろうか。しかし、俺には不思議に思えてならない。まるで、物理法則を超越する何かがそこにはある気がしてならない。発生とはそれほど俺には不思議に見えた。

難しいことはともかく、お腹の中で俺の子は無事に育っているらしいので、安心した。「名前、何にしますか？」と家に帰ってから、紗耶さんが言ってきたので、俺はしばらく考えた。名前は当たり障りのないものがいい。別に名前に自然科学を操作する力はない。ただ、名前は人間社会で環境を操作する力がある。珍妙な名前をつけられると、それだけでコンプレックスになる。それだけは防ぎたい。俺は有名な名前をいくつか考えてみた。『莉子』『京子』『愛美』『琴美』『真希』『美希』……いくつか挙げたが、『当たり障りのなさ』『読みやすさ』『親しみやすさ』などの総合点ではそれらが上位に来るのだろう。（個人差はあるが、個人的ベスト6だ）だから、そんな感じか。別に俺は何でも良かったので、「紗耶さんは、何かいい名前があるの？」と聞くと、「全然、一緒に考えましょう」と言うことなので、俺はインターネットでも名前ランキングを見たのだが、俺は一瞬愕然とする。『美咲』という名前がとても人気があると書いてあったのだが、美咲ちゃんの名前とかぶってしまうから、俺は避けるように別の名前を探し始めた。胸を抉られるような

思いが一瞬心に生じた。自分の子に『美咲』と名付けるという発想が発展して、俺はそれを抑えようとした。別に美咲ちゃんが生き返るわけでもないのだ。『美咲』という名前は、名前だけを見れば、俺の挙げたものにも匹敵する親しみやすさがあるが、俺にとっては、どうしても美咲ちゃんを連想させてしまう。

俺はずっと忘れていた美咲ちゃんを思い出し、なぜか、ずっと美咲ちゃんが俺のことを呼び続けているような気がしてきた。だから、俺はかなり苦しくなった。

「何かいい名前がありましたか？」と紗耶さんに訊かれて、俺は無意識に「美咲とかは？」と答えていた。俺は美咲ちゃんと自分の子を重ねていたのか。だが、もっと別の意味。美咲ちゃんに会いたかったからなのかもしれない。俺の責任のような気もした。

「……可愛いですね。そうしましょうか」と紗耶さんは言った。少し躊躇ったのは、俺から美咲ちゃんのことを聞いていたからだろう。

「漢字は美しいに咲くですか？」とすぐ尋ねてきた。「そうだよ」と答えると、紗耶さんは実際に紙に名前を書いていた。

俺の子が『美咲』と名付けられることが決まってから、紗耶さんはお腹に向かって、「美咲、美咲」と言っていた。俺はしばらく複雑な気持ちだったが、すぐに馴染むようになった。

名前が美咲と決まってから、それが両親にも伝えられて、俺も遅れて、自分の両親にそのことを告げた。

自然科学のシステムそのものを創り出した神は人間すら創るようになった。俺はそれが怖かった。俺はやはり防衛本能が異常なのだ。紗耶さん、そして美咲。守るべきものが増えて、俺は神の手に二人の命が握られているような気がしてきた。俺の大切な二人だ。たとえ、神であっても、許せなかった。だが、どうすることも出来ない。俺はそんなことでストレスを感じていた。

出産が近づいて、俺はずっと紗耶の傍にいたいと思ったが、有給休暇には限度があり、いつ生まれるか分からない状態ではいつ使う

べきか分からなかった。それに、子供が生まれれば、育てなければならない。お金を稼ぎ続ける必要があった。

俺はかなり不安な面持ちで仕事をしていた。それをKさんが指摘して、出産が近いということを知らせると、「いつでも電話もらえるように携帯もちなよ。とりあえず、何かあったら俺の携帯にかけてくるように言ってやるよ」とKさんが力を貸してくれた。当時の俺は携帯電話すら買う余地がなかった。だが、美咲のためとあれば、用意ぐらいはする。だが、俺の防衛本能は異常で、電磁波のあるものを一切遠ざけた。パソコンも二階の部屋に隔離し、テレビを見ないようにと紗耶に言ってしまった。とはいえ、紗耶は本当にテレビを見なかった。医者は「電磁波はどこでもありますよ。そんなに気にしなくていい」と言うのだが、どうしても俺は過保護になってしまう。

「紗耶、どこか痛いところはないか？」と俺は何度も心配した。出産が近づいたときあたりから、俺は紗耶を呼び捨てにするようになっていた。「大丈夫ですよ」と紗耶は言う。

そんな感じだったから、栄養学も学びなおして、妊婦のための栄養学まで調べた。紗耶さんは「ありがとう」とだけ言ってくれた。

俺は過保護に紗耶を守ってきたのだが、それなのに、紗耶は一度体調を崩した。三十八度七部ほどの高熱を出して、風邪ではなく、何かの食中毒の可能性もあるとして、すぐに救急車を呼んだ。

人間では太刀打ち出来ないのだろうか。それが神の創り出した領域なのだろうか。いかなる防御の壁もいとも簡単に突き破って牙を向いてくる。その破壊力はすごい。反則だ。そうだろう、不治の病なんて反則だと思わないか？　どうしても治せない病気を作り出して、人々を苦しめるのだ。または、人への挑発か？　医者はよく分からない病気を俺たち（紗耶の親も含む）に告げて、治らないと告げた。神の卑怯なところは不可能なもので攻撃してくるところだ。もちろん、人間はもっと理不尽だ。やる気になれば、鉄砲打って、健康体を一瞬にして、殺してしまえるのだから。だが、それは人間

が憎悪や劣等感を抱かないとそんなことはしない。神は俺たちのどこが気に入らなかったというのだろうか？　それとも、これに及んで、平等な成り行きだというのだろうか。論理的かつ理論的に病気が発生したというのだろうか。論理も理論もあるなら、どうして、分子生命学が発達した今日でも、原因が分からないのか。人間にかけられた呪いとしか思えない。もはや科学ではなくオカルトに頼るほかないような気がした。

俺はすぐに紗耶のところに行った。出産が始まり、切開が必要だと医者が言って、俺たちを下がらせると、いかなる震動、音も通さない部屋の奥に紗耶は入れられた。俺は紗耶に近づく死神を探すかのように病院内を歩き、もし、霊というものがあり、死神を止めることが出来るのなら、「止めてくれ！」と叫びたかった。この圧倒的理不尽な神の攻撃はあまりに間接的だ。神はどこにもいない。いないところから、鋭い牙を向けてきたのだ。その恐ろしさは程度を逸脱していた。俺にとって最も大切な人に神は何の躊躇いもなく襲い掛かったのだ。

「腹膜炎が起こっている」と言う状態らしく、かなり危ない状況だと、医師は伝えていた。俺は医学からも物理学からも目を背けるほかなかった。助けるためには超越したものが必要だ。だが、それらが人間の前に姿を現すことはまずない。どこを歩いても、走っても、それらは出現しなかった。

やがて、俺の前に結果が突きつけられた。美咲は全く息をしなかったらしい。紗耶は身体にダメージを受けすぎていた。骨盤が破壊されて、息も途絶えるほどだと聞く。俺がようやく紗耶と対面したときには、紗耶は何も話してくれなくなり、美咲だけが何とか一命を取り留めた事実だけを話して、気の毒そうに執刀医は去っていった。俺はつかの間、紗耶の手を握っていて、その後、「美咲はどこだ？」と周囲の者に尋ねた。「今は危険な状態で面会謝絶だ」と言うので、俺はまた頭を抱えた。また、美咲を俺から隔離するのか。そして紗耶まで奪ってしまうのか。俺は紗耶を抱きしめ、ただひた

すら俺を認識してもらいたいために体温を送り続けたが、神は人体から完全に魂を取り去っていた。紗耶は目覚めず、俺に何も言わず、去ってしまった。せめて、もう少しぐらい話をさせてくれてもいいところを、一部の時間も残してはくれなかった。紗耶に話すべきことはまだたくさんある。それを俺は言えないままに、紗耶と一切の関係を断たなければならなくなってしまった。紗耶が亡くなり、俺はもう美咲だけしか残っていない恐怖を感じながら、紗耶を探していた。探して見つかるものではない。だが、俺の本能は探す余地を見出すことによって、何とか哀しみを抑えようとしていた。

A7（後書き）

とにかく書けば進んでいく感じなんだよね

A8（前書き）

残り６０００話までの数年がね。

A8

美咲が正常な赤子として生まれてくれたことが唯一の救いだったとはいえ、一時は危険に晒されている。紗耶がいなくなると、しばらくは紗耶の家にお世話になっていた。仕事は正式な退職を告げず、辞めた。だが、美咲を育てていくためにはそれは許されず、紗耶の親にも迷惑をかけるわけには行かなかった。

その頃、俺は実家に美咲を連れて戻り、しばらくは俺の親から養育費を貰うことになった。保険が取るに足らないものだったため、それらは美咲のための貯金にした。俺は養育費を貰っただけで、美咲には指一本も触れさせなかった。俺の防衛本能は継続されていたのだ。どうして、俺の大切な美咲を汚らわしい手で触られないといけないのか。俺は四六時中美咲の面倒を看ることにした。だから、俺の手に美咲が渡されてから、俺はすべての人間の接触を断ったつもりだ。触れるのが、例えば、止むを得ないのなら、俺も納得できた。風邪をひいて、それを診てもらうためなら納得出来たが、自己満足のために頭を撫でたり、抱っこしたりする奴は許せず、そういう魔の手から美咲を守るために俺は美咲のところに二十四時間いることにした。

病院で育児のすべての情報を手に入れた。しつけや接し方はすべて俺の方法を取った。特に小さい頃は俺以外の情報を与えたくなかった。だから、美咲と俺およびそれ以外の人間に隔離して、俺は美咲のためにすべての時間を費やしていた。美咲は0歳のうちはよく泣いていたが、やがてほとんど泣かなくなり、言葉もどんどん覚えていった。標準語で、比較的温和な会話を心がけていたからか、それとなく美咲は優しい女の子に育っているような気がした。だが、家にいると、間違いなく外部の干渉があった。馬鹿親が大声を上げて喧嘩するから、美咲が怯えてしまい、俺は親を殴り飛ばして、外に出たが、今度はわけのわからない連中が話しかけてきて、そいつ

も殴り飛ばして、川原にいった。川の音が小さな上流のほうに向かい、川の音を聞きながら、色々なことを語りかけた。

しばらく後、俺は美咲のためにもここを出なければならないと思い、親にお金を出させて、よそに移った。最初は紗耶の家に行こうと思ったが、たとえ、紗耶の親であっても、美咲を渡す気にはなれず、全く別のところに向かった。二万四千円の家賃でアパートを借りた。ほとんど人の入っていない場所で、関係も稀薄だというので、そこに決めたが、国道からも切り離されていて、自然豊かないい場所だった。とはいえ、大家が言うには、このあたりも開発の計画が立っていて、どんどん都市化するらしい。

美咲とそこで住むようになったのだが、近くにある水の澄んだ川があって、山のほうに続いているので、山の近くまで美咲を連れて行って、鳥の声を聞いたり、川を眺めたりするようになった。親に金を出させて、何の見返りもしない俺はひどく親不孝な奴だ。だが、親不孝でもいい。美咲のためなら、どんな悪役にもなれるし、どんな奴も利用してやる。E先生も利用していた。

美咲と二人きりで静かな環境を手に入れたのだが、不便な点もあった。店がないので、一時間も歩いて、町に向かい、オムツやミルクを買わなければならなかった。夏場は暑いので、非常に高級な日傘を差して向かうのだが、美咲を連れて行かなければならず、大変だった。美咲は暑さにはかなり強く、ごくごく普通にしていた。店の冷房をむしろ嫌がり、俺は用事を済ませて、そそくさと帰った。

美咲のためにパソコンを封印していたので、アパートには情報源が一切なく、しばらくは世の中のことが何もわからなかった。総理大臣が変わっていることを知ったのは、どっかで流れていたラジオを聞いたときだった。それほど美咲に掛かりきりになっていた。美咲は2歳になるとかなり言葉を覚えていて、ほとんどの言葉に反応していたし、4歳になると、もう俺以上に社会で生活出来るのではないかと思うほどになっていた。

住民票に登録されているために、幼稚園の案内が来て、俺はそれを破り捨てて、ゴミ箱に放り投げた。どうして、美咲をそんなわけのわからない怪しいところに向かわせなければならないのか。

この頃、美咲はほとんど俺の傍を離れたがらなかったから、俺は幼稚園など行かせず、そのままにした。この頃、美咲はなぞなぞが好きになっていたので、俺は色々ななぞなぞや引っ掛け問題の本を買っては一緒に読んでいた。美咲は俺のことを「お父さん」と呼ぶようになっていて、恐らくだが、俺以外の人間の情報がかなり少ないはずだ。俺は決して怒らなかったが、４歳の美咲はほぼすべての常識的な法律は習得していて、『人や物を傷つけない』『迷惑をかけない』などといったことはすべて覚えた。わがままを言うこともなく、山に行っては、二人だけで遊ぶようになっていた。美咲は大人しい子だった。人との関わりがないぶん、普通の子供がなかなか馴染めないものに馴染ませた。自然とか星空とかそういったものだ。運動不足にならないように柔軟体操をしたり、自然的な山に出かけたりした。そうして、美咲は俺といることが安心であって、楽しいことだと思うようになった。幼稚園には行かせず、社会との関わりも少ないまま、俺たちは過ごしていた。美咲をそんな場所に行かせることが出来るほど、俺は安定した心理を持っていなかった。過保護に美咲を可愛がっていた。美咲の願いはほぼすべて叶えることに専念した。

「お父さん、山に行きたい」と美咲が言うと、山に行くし、遠慮なく何でも俺には言うようになっていた。俺はそれが嬉しく、そして幸せを感じることが出来た。美咲はとても可愛い女の子に育っていたが、子供としては表情や態度、性格に突起が全く感じられない。要するに大人びた感じに育っていた。俺の育て方は反社会的なものだったと思う。それがこのような女の子を育てたのだろうか。とにかく、俺の嫌いなタイプの性格に育ってくれなくて、良かったと思った。

美咲に「幼稚園に行きたいか？」と訊くと、「お父さんと一緒がいい」と言ってくれる。だから、幼稚園など行かせず、ただ、俺は美咲のところにいた。だが、美咲が成長するにつれて、お金がかかるようになってきて、親集りでいるわけにもいかなくなった俺は内職を探した。「鶴一羽あたり十二円の内職がある」というので、それをやろうと思ったのだが、「他にも折ってもらわないといけない」と言われ、『鶴』や『やっこ』などを折る仕事をすることになった。「私も手伝う」と言って、美咲もやってくれるのだが、俺より美咲のほうが上手に折る。つまり、俺より美咲のほうがすでに社会人として優れていたわけだ。

美咲は五時間、六時間も折り続けるので、「無理はダメだ」と言うと、「楽しいから」と言って、美咲はたくさん折ってくれた。

小学校、つまりは義務教育課程に入って、美咲を小学校に行かせなければならなくなったのだが、俺はそれに対して過剰反応を示した。小学校は俺にとって忌まわしいものなのだ。第一の美咲がこの小学校に、命を奪われかけたのだ。そこに自分の美咲を置くなど考えることが出来なかった。まして、幼稚園から上がってくる奴らなので、美咲がそのまま馴染めるはずもなく、また、他人がもし美咲を傷つけたらと思うと、俺はとても美咲を学校に通わせることなど出来なかった。案内が届いたとき、美咲は鶴を折っているところで、「美咲、学校は行きたいか？」と訊くと、「お父さんと一緒がいい」と美咲は答えた。会話の中で学校の制度は口頭していたが、実際に、学校と言うものを美咲に見せたことはない。だから、俺はジレンマに苦しんだ。要するに、このまま美咲といるべきか、学校に行かせるか。学校に行かせたほうが、美咲のためになると思った。

だが、俺は結局美咲を学校に行かせることはなかった。当然、俺のもとに教育関係者が来た。言い合いを美咲に見られたくなかったから、「用事があるから、留守番しているように」と言った。美咲はかなり不安な表情をしていたが、「すぐに帰ってくる」と言うと、「すぐだよ」と俺に言い聞かせて、納得してくれた。

外で話をして、学校に行く勇気がないと相手は思ったのだろう。不登校の生徒と認知されるようになって、担任と名乗る男性教師に、家庭訪問などは必要ないと言って、自宅に来させないようにした。

美咲は誰にも渡さない。誰にも傷つかせない。紗耶が命を賭けて、俺に残してくれた最も大切なものなのだ。紗耶に手を合わせて、美咲を守ってくれと祈ったりもした。

小学校が始まっても、美咲を学校には行かせなかった。当時の俺たちの生活は午前六時に起きて、といっても美咲はそれより遅めに起きる。俺が六時に起きて、三十分ほどすると、美咲が洗面所に立っていた。過保護な俺は栄養学を完全なものにしたいと思い、美咲の体重や体脂肪率を考慮していた。美咲は好き嫌いが多かったので、美咲の食べられるもので栄養を満たすものを選んで、それを食べさせた。

美咲は料理以外のすべての家事をやってくれるようになっていた。アイロンもかけることが出来るようになっていたし、掃除機も使う。窓も床も拭いて、お風呂の掃除もする。俺は感心しながら、鶴を折っていた。美咲が一日に１７０ほど折ってくれるので、４４０ほど毎日折ることが出来た。夕方を過ぎてから、俺たちは買い物に行くのだが、美咲は本以外には興味を示さず、本も図鑑やクイズの本などだけで、漫画とか小説などは興味を持たなかった。俺は美咲を実家に連れて行ったことがあって、そのときに、俺の聴いていたＣＤを持ってきたのだが、美咲は気に入って、よく聴くようになった。とはいえ、最近の歌詞はかなり刺激的なものが多く、美咲が妙な疑問を持つようになったので、対応にやや困った。夕食と言っても、原材料をそのまま食べることが多い。キュウリとキャベツは生で食べるし、じゃがいもとかぼちゃを一緒に湯がいて、そのついでに豆も湯がいて、味のないままに食べていた。ごま塩がご飯のおかずだった。とはいえ、そんな食事でも美咲は満足してくれた。というより、その味しか覚えていなかったのだろう。

夕食を終えると、静かな夜の中、鶴を折ったり、本を読んだり、夜景を眺めたり、音楽を聴いたりと実に内向的なことをしていた。美咲はかなり内向的な女の子に育った。大きな声で、あれをしろ、これをしてはいけないなどとは一切言わず、それでも、美咲はとてもいい子に育っていた。

とはいえ、俺も美咲に何かを教えてやろうと思った。教育を幅広くせず、興味を持つ題材を探すような感じを心がけた。美咲は右利きだったから、右脳より左脳がいいのだろうかと思ったが、美咲は絵がとてもうまかった。画家的な絵というよりは漫画的な絵ではあるが。美咲も絵を描くことに興味を覚えたらしく、よく描くようになった。そんな感じで毎日が過ぎていくのだが、美咲は居場所をここに確立していたのだろう。

俺たちの生活には邪魔が多く入った。学校側が家に来て、「あなたは子供をダメにしている」と言ってきた。美咲は俺のことをよく心配してくれて、俺が困っていることにすぐ気付いて、訪問者を外に連れ返す手助けをしてくれた。美咲はドスンと男にぶつかって、「お父さんを返して」と涙声で言ったので、俺は頭に来て、訪問者を帰らせた。美咲を泣かした奴は許せない。だが、美咲の手前、その拳を止めることが出来た。美咲は俺にしがみついてきて、「私、ダメなの？」と訊いてくるので、「ダメなのはあいつらだよ」と言い聞かせた。もし、このことで美咲が不安になってしまったのなら、俺はそいつを許さない。大切な美咲を不安にさせたということは、ほとんど死刑と同じ罪だ。俺の心理はただ美咲の保護だけに向かっていた。だから、本当に守るとは過保護にすることではないなどと宗教臭いことを言われても、本能は変わらない。ライオンなどは生存しているその瞬間自体が幸せなのだ。そして死は不幸だが、死ぬと何も感じることが出来ない。だから、彼らは幸せ以外の何もないのだ。生存しているという事実だけなら、生存しているものに共通だ。人間はそこにステータスを付け足したから、幸せ、不幸が生まれた。幸せを求めるから不幸が生まれたというのは皮肉だが、周囲

とのステータスの格差が幸せのレベルに明確な数値を与える。今の俺はステータスに則らない思考しか出来なくなっていた。

美咲はさほど気にすることなく、次の日も鶴を折っていた。俺はこんな子供に労働をさせているのかと思ってしまい、かなり情けなさを感じた。美咲は毎日２０００円も稼ぎ出してくれる。月にすると、６００００円も稼ぎ出してくれる。十時間も鶴を折り続けてくれる。音楽を聴きながら、ひたすら折っていると、年収１７０万ぐらいにはなり、約５５万円の貯金をすることが出来た。

美咲は俺のすべてだった。美咲と四六時中過ごすようになっていて、美咲も俺のことを完全に信頼してくれていた。銀行に行っている三十分も家を離れると、美咲はすごく不安そうになって、「遅いよ、お父さん」と言う。学校に行くこともなく、美咲は家のことは何でもこなすようになっていた。

美咲が小学二年生になるころには、美咲は高校の理科を学ぶことが出来るようになっていた。ただ、美咲はどうしても、等式の変形をうまく理解することが出来なかった。

ＰＶ＝ｎＲＴをｎについて整理すると、ｎ＝ＰＶ／ＲＴだが、それを見て、「お父さん、分からない」と言うので、ここが現時点の限界なのだろう。とはいえ、それ以外のことはほとんど理解して、比較的興味深く見ていた。学校側がプリントを届けに来るのだが、そのプリントがあまりにやる気のないもので、丸めて捨てた。所詮は万人を相手にしたものだ。一人一人の個性に合わせたプリントなど義務教育と言う犬養成マニュアルに出来るはずがないのだ。この頃、俺は美咲に合同式を教えていたのだが、－１≡３（ｍｏｄ４）などの負の剰余がイマイチ理解するのが難しい様子だった。

運動会があるなどと、学校側が言ってきても、俺は無視した。もう美咲を学校に行かせることはしたくない。とはいえ、社交性が重要なステータスの現代、社交性が必要だと思い、俺は美咲を連れて出かけた。美咲がこの頃一番興味を示していた獣医学の研究を見学させてくれるというので、Ｋ大学に付属している研究室を訪れたの

だが、そのときの博士が論文のコピー（古いものだった）をくれて、美咲と一緒に話を聞いた。とても簡単に噛み砕いてくれたので、美咲もだいぶ飲み込んでいた。

それ以外に、動物園に連れて行ってやって、「子供が興味を持っているので、世話をするところなど見学させてもらえませんか」と係りの者に言うと、丁寧に案内してもらって、少し待っていてくれと言われて、美咲とモルモットを抱っこしたりして遊んでいると、妙な動物を見せてもらえて、「カモノハシです」と説明された。

俺たちが外に出ることはそれぐらいしかなかった。この頃から、美咲に内職を手伝わせることがとても悪く感じるようになって、「美咲、ありがとう、もう十分だから」と内職の時間を減らすように言ったが、「お父さんが大変だから、手伝う」と言って、美咲は続けた。俺は感動した。寝る前は本を読むのが日課になっていたが、俺たちは同じ布団で寝ている。今日も一緒に本を読んでいたのだが、美咲が不意に泣きだして、俺は「どこか痛いのか？」と訊くと、「何でもない」と美咲は答えるのだが、明らかに異常だったので、俺は心配になって、美咲を抱きしめていると、「お父さん、無理しないで」と言ってくれた。俺がどこか無理をしているように見えたのだろうか。「大丈夫だよ」と答えた。

美咲が二年生の頃の担任は若い女教師で家に来なくてもいいと言っても、やってきて、「美咲ちゃんは元気ですか？」と訊いてくる。奥で美咲は絵を描いているときで、俺はさっさと教師を帰そうとしたが、「美咲ちゃんが学校に来られるように、私も願っています」と言ってきて、「美咲に無理はさせたくないので」と言うと、「会わせてもらえますか？」と言う。「美咲が嫌がるので」と言って、教師を帰らせた。

俺は美咲をこのままに保存しておきたいと思っていたのだろうか。正直、何も考えてはいなかったと思う。ただ、言えることは、美咲を傷つけるものはすべて敵で、俺はその敵から美咲を守らなければ

ならない。そのためなら、義務教育にも従ってやる。親は義務は守らなければならないという。俺は「老人は荷物だから死ねと言う法律が出来たら、お前らは天皇バンザーイと言って死ぬのか」などとわけの分からないことを言ったりしてしまっていた。とにかく、どんな法律も文系の恐怖からも美咲を守ってみせる。それだけが俺の役目だった。

時間が経過して、美咲は賢くなった。生物と化学、生化学なら恐らく大学院レベルほどだと思う。だが、それは身に付けたというよりかは興味関心に引かれて、刷り込まれたというほうが正しい。東大後期の生物など、軽く解いていたから、程度は高めと言っても問題はなかった。美咲はもっと本格的な実験などをしたかったに違いないが、当時の環境ではとても不可能だった。

とはいえ、美咲にとって、最も重要なことは俺が傍にいることで、俺が買い物に行く用意をするのを見つけると、すぐについてきた。美咲は礼儀正しいし、思いやりもある。紗耶の血を引き継いでいるのだろうか。買うものは固定される方向にあったので、お店に入ると、美咲は買い物籠を持って、野菜エリアに行って、買い物を始める。俺は美咲を守るために常に周囲をうかがっている。少しでも美咲を傷つけたと判断すれば、そいつを許せない。美咲はお菓子をあまりほしがらなかったから、必要なものが揃うと「入れてきたよ」と俺に買い物籠を差し出してくれる。「何かほしいものはないか？」と訊くと、「ハッカの飴がいい」と言う。美咲はハッカが好きだった。必要なものとハッカの飴を買って、すぐに帰宅する。「他に行きたいところはないか？」と訊くと、「ない」と答える。「お父さんの行くところについていく」とだけ言った。

家に帰宅して、必要なものを冷蔵庫（かなり小さい）に入れて、美咲は洗濯物を取り込んでくれる。俺は鶴を折ることに専念するのだが、美咲はすぐに手伝いに来てくれる。目が悪くなるのだが、美咲は俺が作業をしている間は決して、やめないから、俺は作業を中断して、「外に行こうか」と日が暮れて、人目がつかなくなったら、

美咲と山のほうまで出かけた。川の音を聞いて、景色を眺めていく。美咲は疲れると、俺の膝の上に座って、眠いと言ってきた。「そろそろ帰るか」と言って、美咲を負ぶって家に帰る。美咲を寝かしつけると、暗いところで鶴を折るのだが、一時間もしないうちに美咲が起きてきて、手伝い始める。「ごめん、明るくて眠れなかったか？」と訊くと、美咲は首を横に振って、「お父さんがいないから」と答えた。午後十時までには寝かせたいので、俺は午後十時に眠りについた。この頃、３５７羽まで、作業の速度が落ちていた。半分近くは美咲の手柄だ。

とはいえ、内職の稼ぎは生活費で、この頃、まだ親の仕送りがあって、それを貯金にした。年収１７０万といっても、１４０万近くまで落ち込んでいたから、五十年続けても、６０００万円にしかならず、それだけでは、美咲を大学に出せないと思い、親の仕送りをひたすら貯金していた。子供にバイトをさせないと大学に行かしてやれないというのはいわば親の甘えだ。多少無理をすれば、例えば１８時間労働すれば、大学費用ぐらいよぶんに稼ぎ出せる。副業禁止でも、副業に属さない稼ぎ場はある。俺は美咲が一生生きていけるだけのお金を貯金したくて、かなり切り詰めた生活をした。紗耶が残してくれた美咲を不幸にさせるわけにはいかない。その責任の重大さを感じていた。ここまで、紗耶のことを美咲には話さずに来た。紗耶が母親だということを美咲はまだ知らない。そのようなことを話題に出さなかったが、紗耶のことを知らないままに美咲をさせておくことに恐怖を覚えた。ただ、紗耶のことを思い出すと、気持ちが一気に沈んでしまう。結局、最後は一緒にいてやることは出来なかった。言葉をかわすことも出来なかった。紗耶は美咲を見ることも出来ないのだ。紗耶が生き返ってほしいとは思っても、そんなことは出来ない。だから、何も考えないほうがいい。だが、それでいいのか。

俺は思い切って、美咲に「お母さんのこと分かるか？」と写真を見せた。美咲は写真を見て、「知らない」と答えた。「美咲のお母さ

んなんだよ」と言うと、美咲は写真を深く見て、それでも無関心そうに「分からない」と言った。美咲の中に母親は映っていないのだろう。紗耶が生きていれば、美咲は……。その先を考えることはとても怖いことだった。

美咲を守ることだけに徹していた俺は、美咲を一度も学校に行かせず、いつも傍にいた。美咲の教育は俺が行った。教師などに支配されたくはない。特に美咲に、国語や社会は教えなかった。俺は当時、文系の科目にはとても恐ろしいものを感じていた。国語の教科書に載っている児童小説や不完全な評論や詩などはすべてエゴイズムの塊で、それらを学問として捉える恐怖は並々ならない。文章はすべて、化学と生物の本で読ませて、書かせた。とはいえ、美咲が興味を持ったのは生物だけで、化学はその補助だった。

美咲は生物はかなり詳しくなって、俺よりも立派な知識や生物的な分析力や推理力を備えているだろう。文系の学問は非常に怖い。言語にまで学問の手を浸透させているのだ。それをまるでスパルタ指導を受ける兵士のような面持ちで勉強している人たちがとても怖い。俺は怖くて、美咲に国語や社会を勉強させる気になれなかった。

紗耶がいなくなって、俺にはもう美咲しかいなかった。義務感からのみ俺は美咲を育てているわけではなかった。俺が存在するための必要十分条件が美咲が存在することなのだ。だから、美咲がいなくなることは、俺がいなくなることと全く同じ意味を持っている。俺の命は美咲の命に委ねられていた。今度は神にも渡さない。美咲を学校から切り離し、敵から美咲を隔離し、美咲を幸せにするために俺はずっと美咲の傍にいた。

だが、美咲が成長して、親を煙たがる日が来るだろう。俺はその日が来ることも恐怖していた。少なくとも、今、美咲は俺を必要としていた。美咲は一人で何でもこなすようになっていた。大人のしている仕事をしてもこなすだろうし、家事も完璧にこなせる。だが、精神的支えに俺を必要としている。だから、俺は美咲の傍に居続けた。美咲も不安にさせたくはない。ただそれだけを考えて、生きて

いた。
内職は続いた。美咲は二百羽も鶴を折ってしまう。折るのが本当に速い。そして丁寧だ。半日で二百羽を折って、一息つくのだ。鶴を折るのに1分だからすごい。正方形を作って折り返すまではほんの数秒。そこから、手先を起用に動かして、流れるように鶴を作って、次へ向かう。集中力が一時間ちょっとは切れず、一時間で七十羽以上も折ってしまう。俺は五十八羽が限度で、かなり雑だ。とはいえ、俺は『ぱっくんちょ』や『やっこ』を作るよりは、鶴のほうが好きだ。ぱっくんちょはかなり早く作ることが出来るが、失敗しやすいのだ。この鶴、何に使われるのかと思って尋ねると、用途の広さに驚いた。病院の患者にあげるだけでなく、鶴の舞とか、そういう演出に使われるらしい。
相変わらず、家に教師がやってきて、「美咲ちゃんはどうですか？」と言いに来る。俺は一度だけ美咲を会わせたのだが、美咲は丁寧に自己紹介して、頭を下げた。「学校は行けそう？」と失礼な質問を教師はしてくる。美咲は「行きたくない」ときっぱり答えた。だが、俺はそのとき美咲を学校に行かせることに対して、やや不安を拭っていた。美咲はしっかりとしていた。教師を相手にはっきりと言葉を喋る。とはいえ、美咲が望まないのなら行かせる気はない。初等教育で美咲を潰されてはたまったものではない。やり直しのきかない美咲のたったひとつの命を小学校程度に汚されたくはない。美咲は「学校は嫌」とはっきり俺にも言った。俺でない例えば、無神経な親だったら、「馬鹿言うな！」と怒鳴っているのだろう。例えば、俺が死んで、美咲がそんな親のもとに行ってしまったら。そう考えると、俺は美咲の傍を離れるわけにはいかなかった。「学校なんて行かなくていい」と俺は美咲に言った。人間の配下では行かなければならない。だが、そういう『義務』は不完全だ。そんな不完全なものにすべての人間を当てはめたら、気質特異性に近いものがある人間は一部が欠損してしまう。それが『不登校』『自殺』という形で出ているというのなら、『義務』の不完全さに気付いて、何とか

しなければならない。すべての人間を同一の物質と見なすことに俺は同調出来ない。だから「学校に行かなくてもいい」と俺は堂々と言った。学校に行って、並々ならない苦痛を味わうよりはマシだ。すべての人間が同じ課題で同じ苦痛を受けるわけではない。苦痛は相対的で、『彼』は５０の苦痛。『別の彼』は７０の苦痛などと言った具合だ。

美咲は俺の傍を離れたがらなかった。俺は後になって気付いたのだが、美咲が家事をして内職を手伝ってくれるのは、俺のためだった。紗耶と同じ性質を美咲も引き継いでいたのだ。俺は美咲にいつも言うのは「疲れたら、休んでもいいんだよ」

美咲は放っておいたら、どこまでも作業を続けてしまうかもしれない。とはいえ、俺に負担をかけないために遠慮している窮屈さはさほど受けてはいないはずだ。お腹がすいたら、「お父さん、お腹空いた」と言って、ぺこぺこだという素振りをする。疲れると、床に転がるし、「お父さん、山に行こ」と言ったりもする。俺は美咲にとって必要だった。だから、まだ元気でいなければならない。俺と紗耶の遺伝子が半分ずつ与えられて、美咲は生まれてきた。その美咲は俺にとっては特別なのだ。美咲を守るためには人間の絶対的な法則を守り続けるわけにはいかなかった。

美咲を手放さないこと。それが俺の生きる意味だった。その日、三学期が始まって間もない頃だった。学校に関わっていない俺たちには関係のない寒い日だった。寒いから、すぐ買い物を済ませて帰るつもりだった。

美咲と手を繋いで、外に出かける。買い物とは人間の配下にあるものと関わらなければならないことだった。親から仕送りを貰う、内職をする。これらは厳密に人間の配下に関わったとは言えない。外の世界を歩くこと、たくさんの人の中を歩くこと。これを通して、はじめて、人は人間の配下にあるものに真に怖いと感じるのだ。

その日、寒いとはいえ、雪は降っておらず、風もさほど強いとは

いえなかった。美咲が風邪を引かないように、マフラーなどをつけて、外に出た。道を歩くこと三十分。自然界に近い場所から人間界に出る。そこには夥しい車が通っている。俺は思うのだが、車を数えたら人の数より多いような気さえする。とはいえ、車を運転するのが人間なのだから、走っている車が人間より多いということはない。だが、国道沿いなどは歩いている人間より、車のほうが多くなる。俺たち二人しか道を歩いている者はいなかった。俺は人間界と自然界の紙一重の境界で生きているのではないかと思った。俺は車に強い恐怖を覚える。だから、ここまで免許を取らなかった。何の恐怖も感じず、あるいは少しの恐怖しか感じず、車を運転している人たちが至極不思議に見えた。そもそも恐怖が強いと車など運転できない。俺の恐怖は車だけでなく、電車や飛行機にも感じる。電車に乗ることはいくらかあるが、とても怖い。電車の場合、電車そのものより、周囲の人間が怖い。車はそれ自体が怖い。俺は走り抜ける車の何台に一台が事故を起こすのか。何台に一台の車の運転手が命を落とすのか。車は便利だ。ビジネスなどが広範な近代、そういった乗り物があれば便利だ。だが、便利と危険を取引した人間の悪魔の意志が見え隠れしている。人間は完全に安全にはなれない。だが、その安全のレベルを簡単に上げることが出来る。危険を取り除けばいい。そこでは多くの障害と取引になる。人間は取引をことごとく避けてきた。

俺たちはそんな車をぼんやり見つめながら、店に入った。美咲は一息ついていた。外と中の温度差はかなりのものだ。冬になっても、俺たちの食生活は普遍だ。同じものを買って、さっさと店を離れた。人と出会う機会を最小限にすることが、俺たちの生活だった。美咲が荷物を持つと言うので、「重いぞ」と言うと、「大丈夫」と言った。美咲は荷物を両手で持って歩くので、「無理はするな」と言って、俺は荷物を持った。美咲は手を擦り合わせて落ち込んでいたから、何かを臨時に買って、それを持たせようと、本屋を見つけて、生化学の本を見つけて、それを美咲に持たせた。書店には夥しい量

の本がある。全く売れないままに残る本もある。売れないと著者が泣くというより、路頭に迷ってしまうだろう。本を書く人間が増えすぎている。この９９パーセントの馬鹿げた本の中からいい本を見つけるのはまさに地雷撤去作業だ。地雷を踏むと、命はなくならないが、お金が消し飛ぶ。だが、買ってみなければ分からない。悪い本など多くはないが、本の良さの決定は相対的なものだから、誰かがこの本がいいと言って、何かの賞を与えても、ほとんど意味がない。意味があるのはそういう宣伝に乗せられるミーハーぐらいだ。売上が本の優秀さに現れるというのは変な話だ。賞を取るか取らないかはよし悪しの問題ではなく、あらかじめ、何かの基準が決まっている。大概はお決まりなので、俺は賞で騒がれている本は買わない。買って得したためしがない。それどころか、もう俺は美咲のために本を買うのであって、本自体、読まなくなった。そんなものを読んでも時間の無駄にしかならないことに気付いた。美咲も読む本は決まっていて、漫画や小説などはまず読まない。前に面白いと言われている児童書を見せると、「つまらない」と言った。

本屋を出て、また寒い大気に身を晒すと、美咲がひどく寒がったので、「早く帰ろうか」と言うと、美咲は手を擦り合わせて、息を吹きかけたりしていた。

帰り道を急いでいた。人間の恐ろしさ、それは神の恐ろしさとは異なる。だから、人間の配下にあるものは嫌いだった。そもそも神が齎す脅威は本当に神に由来するかは分からないが、それらを犠牲的に見なすと、神の配下にある脅威は自然災害に現れる台風や地震だ。火事は厳密に神のものとは言いがたい。地震も台風も何か理があって、それに基づいて起こる。理不尽な場合もあるが、厳密に理不尽とは言えない。だが、人間の配下にある恐ろしさは規模こそ小さいかもしれないが、理不尽だ。神の配下から来る脅威は紗耶や美咲ちゃんを俺から切り離すという圧倒的絶望を与えるものだった。だから、美咲を守るためには神の配下の脅威を近づけさせないことがすべてだと思った。だが、小規模な攻撃を理不尽に仕掛けてくる

人間の脅威。それは本当に恐ろしい。
美咲がひどく寒がるので、俺は一旦立ち止まって、しゃがんで、美咲の両手を握って、「もうすぐだから」と励ました。美咲は「ありがとう」と言って、手を繋いで歩き出した。人が少なくなり、狭い道に来て、かなりアパートが近くなったので、俺も一息ついたのだが、それと同時に車がやってきて、曲がり角で大きくスリップして、俺たちに車の側面が激突してきた。反射のレベルを超えた咄嗟の出来事だったので、美咲を庇うこともなく、俺は転倒して、感じた腹痛が予想以上に大きなものだったことに気付いて、すぐに美咲を探したのだが、幸い美咲は怪我をしておらず、俺も腹痛はすぐに引いた。美咲は「怖かった」と言って、俺にしがみついてきた。運転手が降りてきて、「大丈夫ですか？」と気のない返事をするので、その男を俺はただひたすら殴りつけた。一歩間違えれば、美咲が死んでいたのだ。俺はその怒りで男を殴り飛ばして、美咲を抱えて、すぐアパートに戻った。
「美咲、もう買い物は、僕、一人で行くから」と言った。美咲は相当な恐怖を覚えて、しばらくは俺の傍から離れなかった。
俺は怒りなのか憎悪なのか分からないものを感じていた。美咲を攻撃してきたものはすべて敵だ。俺は美咲を守るためには外に一歩も出すわけにはいかないと思った。
それ以来、美咲を外に出さないようにしたが、俺が出かけるとき、美咲はひどく心配してくれて、「早く帰ってきてね」と体を震わせながら言ってきた。「用事が終わったらすぐ帰ってくる」と言って、俺は出来るだけ急いで用事を済ませて帰ってきた。帰ると同時に、美咲が飛びついてきた。美咲の外に対する恐怖は想像以上のものになっているらしく、寝るときに「お父さん、死なないで」とかすれた声で言うので、「絶対死なない。安心しろ」と言って、美咲を抱きしめた。俺は本当に許せなかった。美咲をこれだけ怖がらせたものが許せなくなって、理性を超えてくる高い感情の突起を抑えるのが難しくなっていた。

美咲は前と変わらず、内職を手伝ってくれるし、家事もしてくれる。とても、丁寧でゴミの仕分けも完璧にしてくれる。この頃になっても、教師がやってくるので、俺は「もう来るな！　美咲を殺す気か」などとヒステリック気味なことを言って、教師を追い返した。外に出ることを唆すものは美咲の命を脅かそうとする奴らだ。俺は美咲の命を完全に守るために外には出さず、窓から自然だけの景色だけを見せた。

だが、結局、俺が美咲を傷つけることになってしまった。俺は買い物に行かなければならないので、「すぐ帰るからな」と美咲の頭を撫でた。「早くだよ」と美咲が言うので、「分かってる」と言って、買い物に向かったのだが、車に対する恐怖や怒りは並々ならぬものになっていて、体が震えるほどだった。何を思ったのだろう。俺は道に飛び出して、「お前ら、ちょっとは遠慮しろ！　人の命がかかっているんだぞ！」などとわけの分からないことを言って、交通の安全を乱すようなことをしてしまった。出てきた運転手と殴り合いにまで発展した。俺はただひたすら美咲を恐怖に陥れたものたちを破壊しようとしたのだろう。だが、びくともしないほど、人間は強かった。警察が関わって、俺は複数の罪で警察に逮捕されて、拘置所に連れて行かれた。とはいえ、凶悪犯を逮捕するものとは違い、手錠もはめられなかった。拘置所で、「待っているように」と言われたのだが、「子供が待っている」ことを言うと、「電話番号は？」と訊かれて、「電話はない」と言って、住所を言うと、連れてくるよと何とか了解してもらえた。俺は美咲のことが心配で自分のことはどうでもよかった。俺は結局美咲を守ることは出来なかった。理性を越えて、本能が先に出てしまった。ようやく戻った理性で後悔しても仕方がない。早く美咲に会いたかった。

殴った相手は軽症、交通は乱れたが、事故は起きていなかったので、軽犯罪として扱われた。美咲が到着して、すぐ俺のところへ来た。俺は美咲を抱き上げて、抱きしめた。「子供を心配させたらあ

かんぞ。しっかりせえよ」と言われて、俺は釈放にになった。俺は美咲を背負って、外に出た。送っていくと言われたが、車に乗るのは気が引けたから、約二時間かけて、徒歩でアパートに戻った。

俺は本当に情けない。ほとんど理性を失ってしまっていた。美咲を守るための本能が理性を超えてしまっては、結局、人間の配下では美咲を助けることは出来ないのだ。人間の配下とはそういう場所なのだ。守るためには理性を失わない。自然界とはわけが違う。美咲が泣き止むことはなく、夜になっても、ただ美咲を抱きしめていた。

翌日になって、ようやく美咲は立ち直って、買い物（昨日はいけなかった）に行くとき、「私もついていく」と言った。昨日のことで不安になったのだろう。俺は「それじゃあ、背中に乗って」と言って、美咲を負ぶって、買い物に出かけた。俺たちはもう人間から逃げるようにしか生きていけないのだろうか。過保護な本能を沈めることは出来そうもない。美咲を学校に通わせるなんてことは出来そうにないのだ。だが、人間の配下に入っていなければ決して生きていくことが出来ないのかもしれない。

俺は美咲を学校に行かせることを視野に入れていた。美咲は十分立派な頭を持っている。生物や化学は最後まで到達しているし、数学も高校レベルだ。授業についていけないということはないだろう。だが、問題は別にある。学校ではそんな授業は重要ではない。人間との付き合いが最重要課題なのだ。美咲は標準的な小学二年生としては大人しすぎる。会話についていくというのは厳しいだろう。俺がいない中で時を過ごすのは苦痛でしかないはずだ。俺自身、美咲と俺の関係が稀薄になるのは嫌だった。だが、ここで人間から切り離していて、生きていける気がしなくなっていた。

俺はとても悩んだ。さりげなく、「先生が学校に来いと言っている」と切り出すと、「嫌」と美咲は答えた。不登校ではなく登校を拒否している。面倒くさいのではない。家のことを完全にして、毎日２０００円ものお金を稼ぎ出している美咲が面倒くさいを理由に

行きたくないと言っているのではない。美咲は学校へ行くのが怖いのだ。俺から離れるに対しても恐怖を抱いている。俺によりかかっているのではなく、俺が必要なのだ。必要な要素に俺が刻み込まれている。生まれてから、ずっと俺は美咲の傍に居続けた。誰との関わりも持たせず、ここまでやってきた。その俺が学校に行けと言い出しているのだ。俺は馬鹿だった。美咲を苦しめてまで学校に行かせたくはない。

結局、俺は美咲を学校に行かせなかった。俺はもう美咲を学校に行かせないことにしようと思った。だから、俺は美咲の親として、そして教師となろうと決めた。美咲に追いつくように、生物や化学を学んで、その間に数学や論文の書き方などを教えて、人間社会で生きていけるように的を絞った教育を施すようになった。

美咲は数学が苦手……と言っても、小学三年生で、高校数学のほとんどを理解しているから、標準的な小学生からすれば超越しているが、三角関数の合成公式の原理を理解させるのが難しく、負担を強いている気がして、簡単にすると、それを見抜いてしまう。だから難しかった。美咲は分かるまで考え込むから、時間がどんどん過ぎていった。夜遅くなってしまい、数学はひとまず切ることにした。

美咲を家に出さなくなって、学校側としてはかなり心配になったのだろう。面談会があることを伝えて、どうしても来てほしいと言うのだ。「二者の面談ですか？」と言うと、そうだと言うのだが、美咲は俺から離れることを拒むから、「それは出来ない」と断った。どうしてそこまで露骨にこだわるのかと相手は思ったことだろう。俺と美咲の関係がどういうものなのか、分かるほうがおかしい。俺たちは命を共有している。そんなことを言っても無駄だから言わなかったが、相手側が俺たちを異常者と見たのは間違いなかった。

ところで、俺は美咲とは四六時中一緒にいる。美咲が生まれてから、自慰行為のひとつもしていない。この長期間、射精を封殺した経験ははじめてで、紗耶が妊娠したときは紗耶が慰めてくれたから、実質、何の前触れもなく封殺したことになる。とはいえ、さすがに

お風呂を一緒に入るのはやめたほうがいいかもしれないと思っているが、美咲とはまだ入浴を共にしている。結果、一緒にいない時間というのは皆無に等しかった。美咲のほうにはプライベートというのがないらしい。これがもう少し時間が経過すれば、なくなるのだろうか。それはそれで悲しいものがある。

学校を切り離してから、このような生活が続くことになった。だが、この生活もそう長くは続かなかった。魔の手はいたるところから伸びている。俺が関与しない部分から伸びているのだ。恐ろしくそして全く気付かないままに魔の手は伸びて、俺たちを破壊する。その破壊はひとつの神秘だった。

美咲が三年生になってしばらくが経過した。七月のことだ。俺たちを破壊する魔の手がやってきた。その魔の手は執拗で喰らいついたら決して離さない。圧倒的権力で俺たちを引き離し、美咲を追い詰めた。

俺たちの生活は平和で幸せなものだった。美咲はよく笑っていたし、俺自身、何の不満もなかった。だが、学校に行かなかった。そのことで、俺が児童虐待をしている疑いがあるということで、警察や関係者が家に来て、話をすることになった。学校に行かないのではなく、俺が行かせていないことを知って、彼らは俺を美咲から引き離してしまった。確かに俺は俺の意志で美咲を学校には行かせなかった。だが、美咲が学校に行くことを望まなかった。相手側が「しつけのあり方として問題がある」ととてつもなく頭の悪い発言を始めた。法律の仕事をしているとは思えないほど常識から外れていたのだ。怒りを感じた。そんな頭の悪い間違った解釈で、俺は美咲から引き離されたというのか。美咲には俺が必要なのだ。それを、こいつらは知らずに、引き離して、こんなわけの分からない議論を俺に仕掛けたのか。論理的に返そうとしたが、美咲への防衛本能が先に出て、「勝手なことを言うな！」とその場で騒ぎを起こしてしまった。

美咲は紗耶のところに預けられることになり、俺は親としての権利を一時期取り上げられることになった。暴力事件も起こしてしまい、また拘置所に入れられた。俺は虐待などしていない。虐待をしている親は他にたくさんいる。俺は何度も「美咲に会わせろ！」と驚くほど大きな声で言ったが、外に出ることは出来なかった。美咲と会えないまま、その日が過ぎた。美咲がいなくて、おかしくなりそうだった。夜、寝ることが出来ず、夜中にも関わらず、美咲を返せと叫び続けた。美咲も俺を必要としているはずだ。これこそ、虐待だ。何度訴えても、人間の配下にある絶対的なものはびくともしなかった。「ふざけるな、何で美咲を傷つけるんだよ！」と何度も訴えた。悔しくて死にそうだった。こんな奴らに美咲が傷つけられている。こんな奴らにそんな権利はない。そして、外に出られない俺自身にも腹が立って、頭を策にぶつけ、出血した。美咲と会うこと。俺はそれだけを要求していた。だが、すべて却下された。美咲の姿を想像すると、恐怖で死にそうになった。美咲も今、苦しんでいるに違いない。傍にいってやりたい。そう思うたびに、策に打撃を加える。恐らくは一トンでも壊れない柵だ。人間の打撃など、分子間力よりも無視できる力なのだろう。結局、美咲には会えなかった。

翌日、係りの者が「君の子供は専用の施設で訓練を受けて、学校に復帰出来るようにしつけをやりなおしている」などと馬鹿なことを俺に言った。しつけをやりなおすだと？　復帰できるように訓練するだと？　俺はその係員を殴ろうとして、柵はびくともしなかった。係員は精神異常と見たらしく、俺に精神鑑定を施すらしい。ふざけるな。俺は正常だ。美咲は俺を必要としている。俺以外のしつけなど何の約にも立たない。美咲を傷つけるだけだ。もし、美咲を泣かしてみろ、絶対に許さないからな、などと叫び散らしていた。俺は怖かった。訓練？　美咲に一体どんなことをするというのか。俺の一番大切な美咲に何をするのだ。貴様らの汚らわしい訓練など必要ない。貴様らが勝手に美咲の精神を弄繰り回す権利などない。

俺は発狂してしまい、昏睡薬を打たれた。
美咲が美咲で亡くなってしまう。俺のことも分からなくなってしまうのではないか。それがとても怖かったのだ。まるで、美咲に改造手術を行うと宣言されたような気分だった。手術が終わると、前までの俺の大切な美咲はなくなり、普通に学校に通い、俺を必要としなくなり……。ふざけるな。お前らに美咲を返る権利は無い、美咲を返せ！
拘置所にいる一分一秒が恐怖だった。今も、美咲の改造が続けられていて、どんどん俺を忘れていく。それも人間という汚らわしい奴らの手によって、社会の犬に変えられてしまう。美咲が助けを求めているかもしれない。どうして、傍に行ってやれないのか。俺は美咲を守ると決意しただろ。何度も床に拳を叩きつけた。何も見えないのだ。美咲がどんな連中に何を言われているのかも、叩かれていないだろうか。泣いていないだろうか。苦しんでいないだろうか。係りのものが毎日、「君の子は素直にやっているそうだよ」と言いに来る。それが怖かった。美咲が奴らに懐柔されてしまったのではないか。素直？　俺と会えないこの状態で、素直に、無事に生きているというのか。「美咲に会わせてくれ！」と俺は懇願した。「君が落ち着いたらね」と係りのものが去っていく。俺は多くの涙を流した。美咲が美咲でなくなってしまった。悔しさ、絶望感、そんなものが湧いてくる。一番大切なものが目の前で汚らわしい連中に犯されている気分だった。俺は死にそうになって、祈り続けた。「紗耶、美咲を助けてくれ。守りたいんだ」だが、ある日、係りのものは笑いながら、「学校に登校したみたいだよ」と俺に言った。そんなはずはない。美咲は「嫌」と俺にはっきり言った。俺に本音をぶつけたのだ。その美咲が学校に行ったというのか。まさか、美咲をしかりつけて、脅すような方法で学校に行かせたのではあるまいな！　俺は悲しさと恐怖で涙が止まらなくなった。
美咲が学校に馴染んでいることを聞かされ、「仲のいい友達が出来たそうだよ」とも聞かされた。よかったねと俺に言う。いいわけ

あるか！　そんなの少しもよくない。美咲が変えられてしまった。俺が大切に育ててきた美咲を人間は改造しやがったのだ。美咲はあのままでとてもいい子で、優しくて、幸せだったのだ。それをすべて奪ったのか。真実が知りたい。美咲に会いたかった。美咲は今、どうなっているというのか。もう何ヶ月、ここに入っているだろう。美咲が変わっていく。怖くてたまらない。大切なものが守れなかった。俺は美咲と会って確かめたかった。俺のことは覚えているか。俺のことをまだ必要としてくれるか。あの頃から変わっていないか。俺の大切な美咲でいてくれるか。すべてが変わってしまったような気がするのだ。それは怖くてたまらない事実だった。

十二月五日、俺はようやく釈放になった。放心してしまって、右も左も分からなかった。分からない方向に分からない距離歩いて、寒い風が通り抜けた。

前方から歩いてくる学校帰りの少女が見える。笑いあい、喋りあっている姿はごく普通の小学生たちだ。美咲はああではない。美咲はあんなふうに笑いあったり喋りあったり出来る子ではない。俺が一番よく知っている。美咲は俺のために色々なことをしてくれて、外に対しては恐怖を持っていた。人と会話をするときも、言葉を慎重に選ぶ子だった。そう、だから美咲ではない。だが、中央にいるのは紛れもなく美咲だ。だから、俺は立ち止まり、美咲を見つめた。声は出ず、ただ動揺が大きかった。

だが、美咲は俺を気にもせず、冷たい風と同じぐらいの速度で、俺の横を抜けていった。奴らの改造の恐ろしさを知った。今頃、美咲が学校に行けるようになって、良かったと思っているのだろうか。いい子になったと思っているのだろうか。だが、俺の知る美咲なら、必ず、俺に気付いて、必ず、足を止めるはずだ。両隣の友人が足を止めなくても、俺のために足を止めるはずだ。美咲はもう美咲ではなくなっていた。俺は怖くて振り向くことも出来なかった。話し声がなくなり、俺は道の前に立っていた。人が横を抜けていく。「ど

うしましたか？」と訊くものもいた。俺は無言で歩き始めた。俺の大切なものはすべて守りきれなかった。もう俺の役目はすべて終わった。美咲ちゃんを俺から切り離し、紗耶を切り離し、そして、美咲を切り離した。俺からすべてを切り離した。

「紗耶、会いに行ってもいいよな……」とつぶやいて、俺はどこにもなく歩いていった。人間も神も俺に敵対した。だが、ショックだったのは俺が美咲と繋いでいた絆を容易に断ち切ってしまう人間の力だ。心理学を知り尽くしたあいつらなら、俺と美咲の絆を断つことなど簡単だったのか。もう立ち直ることなど出来そうもない。もう俺の守るべきものは何もない。すべて、奴らが奪っていった。

この俺はすべてにおいてダメな人間なのだ。あれからアパートで数日を生きた俺のもとへやってくるものはいなかった。美咲もやってきてはくれなかった。会うこともなかった。会いたくもなかった。美咲は全く別の生き物に変えられてしまったのだから。しかし、俺の部屋には確かに残っている。美咲の匂いも思いでも残っている。窓を開けて、美咲と眺めた景色を眺め、美咲が使っていた歯ブラシやお箸も残っている。それらが夢のかけらのように見えた。俺はそれらをすべて処分し、親にも連絡をせずに、そこで数日を過ごした。美咲が帰ってきてくれることを願ったのだろう。美咲と折った鶴が二羽落ちていた。見た目が綺麗だ。美咲が作ったものだ。恐らく、俺が連れて行かれて、ギリギリまで折っていたものだろう。

俺はその鶴を解体して、正方形の折り紙に戻した。何かが記されている。

『お父さんをかえして』

そう書いてあった。丸みのある字。美咲の字だ。俺は折り紙を握り締めて、その場に転がった。美咲が妙に懐かしく感じられる。美咲が０歳のときから、小学三年生になるまで、ずっと一緒に生活をしてきた。涙が止まらなくなり、俺は息を止めた。意味はない。息が苦しくなれば、息をしてしまう。時を待っても誰も来ない。いや、

インターホンを鳴らすものが幾人かいた。俺は出なかった。出るつもりはない。俺はこの場を動くことも出来なかった。怖いとは思う。だが、美咲がいなくなったこの世界に何が残っているというのか。ここで目を閉じれば、紗耶に会えるのか。美咲ちゃんにも会いたい。もう一度、会って、俺のことを愛してほしかった。もうここには絶望しか残っていないのだから。守ることが出来なかった。何一つ守ることが出来なかった。失格だ。人間としてではない。俺は人間の配下にはいないのだから。

・制作期間　０９年　３月１９日～７月３０　校正期間　校正は入っていない。
・作品ナンバーおよび分類　１　私小説・一人称
・参考資料　『輝ける子　１００メートルを１０秒で走れと言われてもさ、いっくら努力しても走れない奴っているじゃん　明橋大二』『なぜ生きる　明橋大二・伊藤健太郎』『日本人のしつけは衰退したか　広田照幸』『Ｙ氏の隣人　吉田ひろゆき』『「ニート」って言うな！　本田由紀・内藤朝雄・後藤和智』『いじめの社会理論　内藤朝雄』『ニートの心理学　荒木創造』『断食療法５０年で見えてきたもの――人類は愛と慈悲の少食へと進化する　甲田光雄』『断食療法の科学　体質改造の実際　甲田光雄』『断食・少食健康法　宗教・医学一体論　甲田光雄』『あなたの少食が世界を救う　甲田光雄』『朝食を抜いたらこうなった　甲田光雄』『トリックの心理学　樺亘純』『心理操作ができる本　渋谷昌三』『先生と生徒の恋愛問題　宮淑子』『天才はなぜ生まれるか　正高信男』『誇大自己症候群　岡田尊司』『「ダメな教師」の見分け方　戸田忠雄』『自殺するなら、引きこもれ――問題だらけの学校から身を守る方法　本田透・堀田純司』『問題は躁なんです――正常と異常のあいだ　春田武彦』『大学への数学　マスターオブ整数　黒木正憲・栗田哲也・福田邦彦・石井俊全』『「親力」で決まる！　子供を伸ば

すために親に出来ること　親野智可等』『ウィキペディア、多数項目参考』『各種ホームページ多数参考』『２ｃｈ　各板、多数書き込み参考』『ガンジー　ジョン・ミルズ』『ニートおよびひきこもりのブログ多数参考』

※そのほか、たくさんの経験や体験談を参考にさせていただきました。

A8（後書き）

コオロギのごとく進むことにしたい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5257h/

ニート失格

2010年10月8日14時46分発行